

新しい家庭科

ウキ

地域に生きる



野の花をたずねて
にしきうつぎ



雨の六月は山の緑が冴えて、ニシキウツギの花が殊更美しく葉陰を彩ります。

アツモリソウに会いたくて、山深い寒村に來たのですが、思いがけず山はニシキウツギの花盛りでした。舞妓さんの頬紅のような花に身を包まれて、屏風絵の中にさまよう心地でした。

この花は、初めは白色で後に紅色となるので二色ウツギと呼ばれるそうですが、今日の花たちは、錦ウツギでもいいなと思う程です。ふと行く手の山道に夕色を感じ、ひき返そうとした時、霧の山々に深くこだまするコノハズクの声を聞きました。もの悲しく響くその声は、旅愁を感じさせるに充分過ぎる程でした。鳥仲間に話したら、随分とوراやましがられるだろうな。それとも顔だけ平静を装って、心で泣くだろうか。

黒い土に落ちた紅色の花をそっと拾い上げ、雨にぬれた花びらを、ていねいにぬぐってから手帳にはさみ、ゆつくりと山道を下り始めました。

(大室君子)



巻 頭 言

準公選教育委員として見たもの 俵 萌子

こうではないかな、と想像してはいても、経験してみないと確信が持てない、ということが世の中にはたくさんある。

二人の子を育てる過程で、いまの教育は何だかおかしい、教育行政はどうなっているんだろうという疑問を抱いていた。

3年前、私の住んでいる東京・中野区で、日本ではじめて教育委員の準公選があった。民主主義の視点からも、地方自治の視点からも、教育の独立性の視点からも、教育委員は公選の方がよいと考えていた私は、立候補した。

以来、3年間、最前線の教育行政の中に身を置いてきた。

そして、あらためて確認したことは、任命制の教育委員会が、いかに形骸化しているかということだった。

文部省→都→区市町村教委は、単なる通過ルートであり、そこには何の独自性もなかった。任命制の教育委員は、官僚機構のお飾り、あるいは追認ロボットになり果てている。

学校現場は、中央集権が見事に行き届いて、自由と活気と明るさを失っている。

親や住民には、公教育に対して意見をいう場がない。

そして、教育行政には上意下達だけがあって、下意上達のシステムがない、ということもわかった。

これがあるべき形に直してゆくには、中野区のような“仕組みからの改革”が必要なのであろう。

(東京都中野区教育委員)

新しい家庭科



1984年6月号

地域に生きる

〈巻頭言〉準公選教育委員として見たもの……………俵 萌子 1

❀地域に生きる❀

固有名詞のつきあい―寿町に通いつけて……………青木 悦 4

「美ら寿」の春……………神戸 照子 9

「くみの家」と私たち……………石井 恭子 14

自給生活を築く中から……………緒方 順子 19

〈特別企画〉We公開ゼミナールを顧みて……………68

レポート・ハイライト集……………71

❀新しい家庭科を創るために❀

小学校では わが家と共働き…中里あや子、中里清志 24

中学校では 人間嫌いをつくらないために…楢田 真澄 30

高等学校では 「学ぶ」力を育てるために……………福島 澄香 36

合成洗剤残留実験Ⅱ

大学では、今 地域の自立をめざして……………佐藤 慶子 44

❀発言❀

学習の主人公たち きんじよのこと……………54

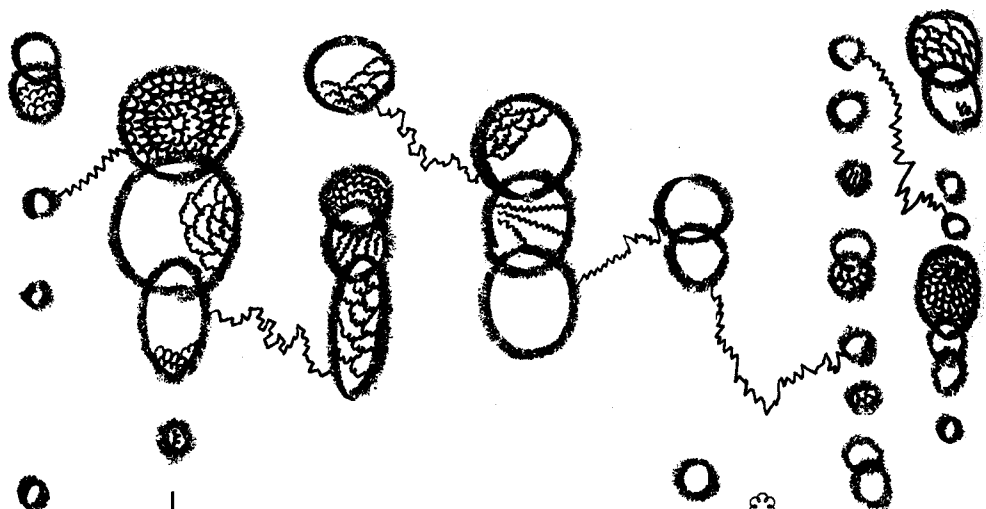
………福井県敦賀市立西浦小学校の子供たち

雪の地方に住んで……………町田 直子 56

地域で仕事をして……………新井 恭子 58

○Weになんでも書おうなんでも聞こう 66
○わたくしからあなたに 90

○Weの読者会だより 89 ○泉 87



❀ 連載 ❀

地域から地域を考えるー生活地図で語る『家族の地域』……………若竹キミイ 60

地域で教育を考える……………小野美智子 62

地域に生きる「かつばの家」……………木崎志つ香 64

野の花をたずねて……………大室 君子 48

視点 〈まなび〉の文化の発想……………長谷川 孝 50

counselingの応用 「直面する」その1……………児玉すみ子 52

ー現場からー 秘密……………武田 秀夫 77

體通信 病みし娘……………藤田 健次 78

ふじたけんじの 萬葉の女たち・男たち 石は踏むとも……………井田 邦弘 79

生活マンガ 女の人生・男の人生 中年の苦悩その二……………増本 敏子 80

男女平等教育 スカートめくり……………中嶋 里美 81

すすめてますか する側 される側……………盛川 華代 82

風に向かって 「女性であること」を考える……………小田亜佐子 83

ほん 『風流夢譚』事件以後』その2……………遠藤 由紀 84

シネマ エレンティラ……………半田たつ子 84

○波 〈家庭科男女共修問題、国会審議をめぐって〉……………半田たつ子 84
○ひと 榎田真澄さん 47
○新刊紹介 88

目次イラスト 馬場洋子 本文イラスト 中野敬子／野中浩一／半田たつ子
表紙デザイン 加藤由美子

〇〇地域に生きる〇〇

固有名詞のつきあい

—寿町に通いつづけて—

青 木 悦

去年の暮、取材で遅くなった私は、駅からの道を急いでいた。いつものように小走りになる。心臓の持病がある母に子どもを見てもらっている。夫が家にいる夜はいいが、今夜は彼もいないはず。とにかく一時も早く帰らなければ……。横浜駅から私の家までの間は、飲み屋、キャバレー、パチンコ屋、ゲームセンターなど並ぶ、いわゆる歓楽街。ストリップ劇場もボルノ映画館もある。忘年会の帰りか、あちこちに酔ったサラリーマンのグループ。

途中、小さな橋を渡る。昼間は真っ黒によどむ運河も、ネオンを映して光の道に見える。渡り切ろうとしてハッとした。今、すれちがいざまビラを渡してくれた人は、Aさんではないか。アレッと思つてふり返ると、やっぱりAさんだ。

「Aさん」と、引返して顔をのぞきこんだとなん

「ワー、とうとう見つかつちゃった」

と、Aさんは両手で顔をおおった。ワキの下にはさんだビラがパラパラと落ちた。しゃがんで一緒にそれをひろいながら

「今、この仕事してるの？」と聞いた。

「仕事っていうか、アルバイトだよ。年末だけ。BさんとCさんと三人でやつてるんだ」

「交代で？」

「そう、その日やれる人がやるんだよ」

「寒いでしょう」

「寒いのは平気。だけどみんなオーバーに手をつっこんで、うけとつてくれないのがつらいよな。全部配らなきゃならないし……」

「私のうち、このすぐ近くよ。帰りに寄ってくれない。熱いお茶ぐらいあるよ」

「でも、終わるのが十一時すぎるから、悪いよ」

「うちはいつも一時ごろまで起きてるよ。よかったら寄つてよ」

「じゃ、こんど三人で一緒に行くよ」

「待つてね」

テレやのAさんを、これ以上テレさせてもいけないと思い、手をふりながら私は橋を渡った。Aさんは通る人ひとりひとりに頭を下げ、「お願いします」といいながらビラを渡していた。新規開店の商店のビラだった。

AさんもBさんもCさんも、みんな寿町のドヤに住む日雇労働者。寿町は今、町始まって以来という失業に襲われ、近辺で野宿する人も、毎夜百人前後。雪の多い今年、町の中のドヤの玄関先で凍死する人も出た。

横浜駅近辺も野宿者の多い所。仕事の行き帰り、必ず二、三人の野宿者とすれちがう。彼らを「浮浪者」としてこわがる人は多い。しかしこの辺を毎晩のように歩く私にとって、一番こわいのは酔ってグループになったサラリーマンたち

だ。

道のまん中で立小便をしてみたり、歩く女たちを次々とからかったり、グループの仲間に虚勢を張る様は目にあまる。帰りを急ぐ私に

「まだお仕事ですか、大変ですねえ」「女は仕事なんかしないで、家にいりゃあいいんだよ」「早く帰って父ちゃんに抱いてもらいな」

と、からかってきたサラリーマンたちがいた。酒のにおいをプンプンさせて近づいてきた四十歳前後の男の脇腹に、私は、持っていた書類の入ったカバンをイヤというほど強くぶつけてやった。男たちはびっくりしたのか急にシラけて、道をあけた。「こわーい」という小さな声が、うしろから聞こえた。

女として男にからかわれた、それにハラがたつたというよりも、その時の私の胸の中には、「浮浪者」は昼間から酒を飲んでいて何をするかわからない、だからこわいという、一般的な見方に対してハラをたてる思いがあった。集団の威をかりて、それこそ「何をするかわからない」酔ったサラリーマンたち、その方がよっぽどこわいのにと思っていた。

次の夜、Aさんたちはやってきた。本の好きなAさんは書棚に見入っていた。人の好いBさんは、「夜分におじゃましてすみません」を何度もくり返した。寡黙なCさんは、私の

母が煮た里芋をうまそうに食べた。

夫が酒を出した。三人とも、なかなか杯をあげない。遠慮していると思った夫は、熱心に勧めた。はじめからオチョコ一杯を何度も口に運びながら、文字どおりなめるように飲んでいるCさんがボソリと言った。

「ずっと、酒で失敗してきたから……」

私も夫もハツとした。人をもてなすのに酒を勧めるのは当り前と思っていた。しかしAさんたちは、「酒」に対し実にさまざまな思いをかかえていたのだ。それを理解できなかった私たちの行為は、思い上がりのように思えた。

五人で小さな徳利一本、二時間半をそれでもたせていろいろな話をした。少年たちによる襲撃事件が明るみに出てからそろそろ一年になろうとしていた。この日のAさんたちとの話から、殺された人たちの「墓参り」をすることが決まり、私たちは今年二月五日、ゴミ箱に投げこまれて殺された須藤泰造さん（当時六十歳）の襲われた場所、山下公園に「墓参り」をした。

寿町に通いはじめて丸一年。「通う」という言葉に心理的な抵抗はあるが、やはり「通う」としかいいようがない。寿町に住んでいない私は、外の町から「通う」わけだから。今はこの町にたくさんの知り合いができたが、一年前の私は、

寿町という「特別な」地域の名前のみ知っていた。AさんもBさんも知らなかった。

初めて町に来た時、記者商売にもかかわらず人の顔を記憶することの苦手な私は、町の人たちを見てびくくりした。ひとりひとり実にはつきりした顔つきをしていて、名前も、その人を的確に示す「通称」で教えられることが多かったから一発で記憶してしまった。何よりもひとりひとりの人間が、それぞれの人生を想像させる表情をもっていた。

そのことから私は逆に、今までくらししていた町や仕事場で人の顔をおぼえられなかったことを考え直し始めた。私の記憶力がなかったためだけが理由なのだろうか。この町の人々にくらべ、ひとりひとりが「個人」の人生を持っていなかったせいではないだろうか。それはなぜだろう。

野宿者を次々襲い、殺してしまつた十人の少年たちのひとりと会つた。私が事件のことを書いた『「人間」をさがす旅』という本がきっかけであつた。会うまでの経緯を詳しく書くと、多くの人に迷惑をかけることになる。また、その少年と会つたときの私のショックを、誤解されないように伝えるには紙数が足りない。

しかしそれをあえていうなら、少年が、襲撃の時の「蹴りすぎて、はいていた靴が破けた」ほどの暴力を、実に淡々と、まるで他人のこのように語つたこと、一年たつても自分が

人を殺したという実感を持っていないように見えたこと、母という言葉にはひどく敏感に反応しながら、「浮浪者はくさくて許せなかった」と言い切ったこと、それらがショックであった。そして少年の口から「黒いかたまり」という言葉がもれ、それが「浮浪者」を意味するとわかったとき、幼いころから殴られつづけて育った少年の生いたちを考えると同時に、「人間」を知らない少年の孤独を知った。

野宿する人たちひとりひとりの顔を、この少年たちは全く知っていない。彼は、逮捕後警察で、須藤さんの写真を見せられ、初めて自分たちが襲った人の顔を知った。その晩、須藤さんの夢を見たという。その部分を語るとき、彼の顔に初めて、戸惑いに似た表情が、表情らしいものとして浮かんだ。

寿町という町の名のみ知っていること、「黒いかたまり」として人間を見てしまうこと、その恐ろしさがしみじみ胸に迫った。人間社会で、ひとりひとり顔が見えなくなっている、それは殺人にまでつながる危険なことである。それを私は事件を取材する中で見てきた。

一月末、大雪の朝、私はまた寿町を訪ねた。前々日に、山下公園で十年近くも野宿してきた永井徳次郎さん（七十六歳）が凍死していた。その葬儀のことを聞きに行つたのだったが、町の雰囲気はいつもとちがって殺伐とされていた。Dさんが通りのまん中で大声で叫んでいる。「どうしたの?」と

聞くと、彼は早口でしゃべり始めた。

「俺は今から公務執行妨害をやりに行く。つかまってサツにでも入らなきゃあ、死んじやう。どうしてこんな大雪のときぐらい生活館にいられてくれないんだよ」。

夜九時で閉まる生活館（市の建てた寿町の中にある会館）を一晚中、雪のときぐらい開けてくれという彼の、靴もズボンもびしょぬれ。酒のせいかな顔や胸は赤いが、酒でも飲まなければとてもいられそうもないほどの薄着だ。

私は逃げるように雪の道を歩いた。Dさんに会うちよつと前、生活館の階段で、ひとりの野宿している人に言われたことが、まだ私の頭の中で音をたてていた。雪に対し毛糸の帽子と手袋とマフラーで「完全防備」の私に、すれちがいきざまその人はこう言った。

「何だい、ぬくぬくと着やがって」――

ドキンとした。反射的に手袋とマフラーをはずした。しかしすぐまた手袋をはめ、マフラーを首にまいた。つらかったけれど、ここで私がそれらをはずしたからといって、それですむことではないと思つたし、私は雪の日には「防備」をして、その人の言葉を身に浴びながら、通いつづけるしかないのだと、それまでの経験の中で心を決めていた。そのつらさをつき破らない限り、この町にずっと通うことはできない。すぐ手袋をとり、その場で共有できるほど、ここの人たちの

抱える痛みはかんたんなものではなかった。

Dさんのこと、この人の言葉など思いながら、マフラーに顔を埋めて雪の道を歩いた。ゴム長の底から冷たさがい上がつてきた。

春になってまた寿町に行ったとき、Eさんに会った。酒を飲むと「さわり魔」になるEさんは、この日もまた腕とか手とか肩とかさわってきた。「イヤよ」というと、

「女の人っていいなあ。イヤよって言い方もいいねえ」とくる。仲良しのFさんが同性のよしみで

「バカ、やめなさいよ。青木さんイヤがつてるんだよ」といつてくれるが、きき目はない。

あまりに堂々としていて、心底不快という気にはならないが、やっぱり気持ちのいいものではないから「イヤだつてば」と、楽しそうなEさんの顔を見てこっちも笑いながら逃げた。Eさんは「わかった。握手だけでよ」という。手を出すとギョツと握りしめてきた。ハツとした。

「手を見せて」

と、私は思わず真顔になって彼の手をつかみ直した。Eさんは両手のひらを私の前に広げた。マメの上にマメをつぶしたその手。しかしマメの跡はすっかりなめしたようになくなっている。手入れのいいグローブのようなといえばいいのか、つやつやと、しかも強くて、しかも柔らかみのあるその

大きな手。見とれている私に、さっきまでの笑顔の消えたEさんは、ちよつとテレ臭そうに

「スコップ握って二十年だから……」

と言った。仕事においては右に出る者もないといわれるほど、熟練した腕をもつEさん、私は、その仕事の手を、声もなく見つめていた。

においや声や手の感触、そういう感覚でのつきあいを、私たちはいつからか見失ってきたように思えてならない。タイの難民キャンプから帰ってきた夫が、「成田についてびっくりした。日本の、とくに子どもたちの顔が能面に見えた」と語ったことがあったが、私も初めての日、きつと能面のような顔でこの町を訪ねたことだろう。

今、地域に根を張ることは、運動論的な意味ばかりでなく、「人間」をとらえ直すためにも大切なことになっていると、私は思う。固有名詞のつきあい、それを広げていくことが、「荒廃」という言葉に踊らされるだけではないつながりを作ることになる、そして子どもたちの心もとりもどせることになる、私は信じている。

(婦人民主新聞)

〇〇 地域に生きる 〇〇

「美ら寿」の春

神 戸 照 子

「美ら寿」の春は、前年の十一月から始まるといってよいでしょう。雑木山のもみじの美しさにうっとりとしていたら、すぐ冬になってしまいます。

から松の縫針のような金茶色のもみじ葉が、音もたてずにあたまに肩に降りそそぐころ、ここよりも一ヶ月近くもはやい初霜に心せく北軽井沢の野菜専業の開拓三十年のお主婦さんから声がかかります。

「たくわん漬の大根をおわけいたしましょう。おとどけすればよいのですが、なんとしても時間がとれなくて」。

一年の生活を半年にかけて働く農婦は、雪解けを待っての春、そして夏、とり入れの秋と冬霜の降りる前まで、ゆっくり顔を洗う覚えもない日々といっています。一昨年も去年も、そしてきつと今年も、隣村の青年の車で、北軽井沢生まれの大根が、白菜、グリーンボール、セロリーなどの高原野菜をお供に「美ら寿」へお嫁さんに来る時から、「美ら寿」の春がはじまります。冬から春への漬けものを洗う水は、四百メートル奥から自然の落差で引いた水。「ここに泉あり」と私たちは名づけていますが、やわらかくて、あまくて、これこそほんものの天然水でしょう。この引き水が「美ら寿」の毎日をやたかに支えます。

人のくらしに一番大切なものの一つ、それは水でしよう。「ここに泉あり」が十年余も、どうして私たちの生活を豊か

に助け、楽しくしているかをお話ししましょう。

都市であれ、小さい町であれ、不便な村と呼ばれる山里であれ、その地域にとけこみ親しく生活しはじめると、必ずその「古老」と呼ばれる人に出会うものです。

「美ら寿」の建設は、一番はじめに、社会に通じる一本の途として、幅七メートル、入口から「美ら寿」の玄関まで八百メートルの道路づくりが計画されたのでした。次には、水の問題です。道路と水がちゃんと用意されはじめて建築工事がなされることを知りました。

水は敷地内の澄んだからまつ川から、自営水道設備をして、ポンプアップして水道塔に。山の東地に高く、地球儀のようなクリーム色の塔の上の水槽は、すぐそばにとりつけられた避雷針と共に、遠くからも見える「美ら寿」のシンボルの一つとなっています。が、それよりも毎日の私たちの生活を支えるものは、なんといつても、四百メートル奥から、自然の山の落差で引いた「ここに泉あり」の水なのです。

「簡易水道が出来たので実現しませんでした、あの湧き水を、家の近くに引きたいと私は思っていたものでした」との古老の言葉に、私は、科学や人の力を越えたぜいたくと安心がほしいと、しきりに願ひはじめました。そしてこれは是非若者の協力と労働で実現してみたい。農青年Kさんに声をかけて、泉の水量、林の中をどう引いてくれればよいかを頼みま

した。Kさんを中心に若い力はまたたく間にこのことを具体化し、仕事の合間をぬっての奉仕がはじまりました。

東京からも銀行や会社づとめの青年たちが、七・五ミリ肉厚のエンビを肩に山に運び、掛矢でつぎつぎにエンビはつながれて、待っていた水槽に遂に水があふれこぼれた時の感激。掛矢の音は林から空にこだまして、そのまま水の音に、青年たちのたくましい息づかい、息を止めて待っていた私たちの胸のたかなり、最高の歓喜の交響楽は、あの時から十余年とぎれもなくいまに続いております。その上こぼれ余る水でつくったさらさら小川は、はながいのチャボたちの水のみ場であり、私たちはここでもなんでも洗います。洗濯機なしの青空天井での洗濯のだいご味は、もったいない限りです。まだあふれ余る水は、防火用水を兼ねたあめんぼうと呼ぶ池にも落ちて、この池の水の冬の全面凍結を防いでいます。「ここに泉あり」の天然水で入れたお茶は、まろやかでほんのりとこくがあり、お客様が必ず「おいしいお茶」とおっしゃるのです。あす地球が終わる、との声を聞いても、私たちはせつせと山に木を植えましょう。

この「美ら寿」の春の足音を聞きにいらっしゃってください。林にエンビを埋める途づくりをした若者も、エンビを一本ずつ肩にかついで腰で調子を整えて運んだ娘さんも、エンビを自然の落差を見きわめながらつなぎ、土をかけた地域の

青年も、時を経てみんな結婚し、社会人への生きる責任を、仕事に、子育てに、働きざかりとなりました。親子で、いずれは孫と三代で、山に「ここに泉あり」の水を飲みに来る日も近くなりました。山で知った自らの存在感、山で見た支えあうことの意義と重さ。人は一人では生きられない、それを肌でからだで体験し、本気で生きることこそ、まことの自立と、みんなで覚えた労働を、宝石よりもっと美しく大事にして生きている仲間たち。これこそ「美ら寿」の春。今年のような幾十年ぶりの大雪にも負けないで、生きてきました。確実に、ひとりひとりの魂に労働の場に、春は約束をはたして、訪れて来ました。水ぬるむ、雪解けをきく春。どこにいても、みんなに聞こえる春の足音の一つ、「ここに泉あり」の水音は、今年は特にあふれ響いて、誰彼に届き聞こえているみたいなのです。

この水の音を原点に、明日へ私たちはみんな、人間愛とは血のつながりを超えたもの、まことのつながりは何か、をさがしてまいりましょう。

♥.....♥

ゆつくりと山を下り、からまつ橋をわたり、蛇野川を右に左に見ながら沢渡温泉に出ます。週二回の温泉での入浴は、健康になによりなのです。十余軒の宿の一つ、六十歳を過ぎた夫婦だけで営むちいさい湯の宿と、いつの頃からか親

しくなりました。

人情が豊かで、生活は地味。不思議と心からだも休まります。「美ら寿」は土地のみんなと仲よしですし、またお世話になって十余年。お互いに何もかもあけっぱなしなのが、本当に気らくです。

K宿のおじさんとおばさんに私はいつも笑いながら、

「おじさんもおばさんも、これ以上お金持ちにならないでね」と言います。

「なによ、わたしが金持になりっこないさ、どうして？」

「だっておばさんたちがお金持ちになると、お宿を建てなしたり、お湯に濾過機をつけたり、循環機をつけたりするでしょう。そうするとここのお湯の値うちがなくなってしまうすもの。おじさんおばさんの人柄と、ここはそのままということで、なじみ客はみえるのですもの。どこに行くよりも気らくでうれしいって」。

「そうさ、そうさ、たいしたことはわたしらにはできるわけはないさ」。

用事があって電話する時々聞きなれない声が電話口でします。あらまちがったかしらと一瞬とまどいながら、

「あなたはどなたでしようか？ Kお宿とちがいますか？」

「はっはっ私はお客ですよ」と。

電話が鳴ればそばにいる誰でもが受話器を手にします。年

賀状の宛名書きも、餅切りも湯治のお客さんがうれしそうに手をかすのです。おじさんもおばさんも心からお客様を迎え、正直で、あたたかで、昔そのままの宿。ものを無駄にすることは性分としてできない人柄なのです。いわゆる近代化とはほど遠い宿は大変な値うちです。

お湯をいただきにくたびに、私にとってのお料理教室となつて、おばさんなんでも聞いて習っています。野菜も自分でつくつていて、とりたてのもてなしですから、おいしいにきまっています。

このあたりはまだ山菜の宝庫、殊に春の山菜は追いかけるようにゆたかです。おばさんに毎年毎年同じことをくりかえし習つて、たのしいことこのうえなしなのです。また時にはおじさんとおばさんのぼやく相手に私はなります。「子供たちは、なかなかさわたりにもどつては来ないだろうね。仕方ないさ、わびしい思いもするがねえ」と目をうるませるおばさんに

「もどつてはこないよ、決めることはないわ。忘れてはいないもの。若い人には、いま若い人の人生があるもの。おばさん、からだに気をつけて、おじさんとやれるだけのくらしをすればね」。

「次の浮世はサラリーマン」などと唱いながら台所であとかたづけをするおじさんも、群馬県人特有のカラリとした性格

で、正直でかげのない二人は、善良でつましい。またそれに共感するお客が集まりよつて支えあっています。

「世の中がはでになりいやだねえ。こんなでいいのだろうか」といつも問いをかけて、じつくりと生きている二人。これがほんとうかも知れません。

「つましくしていれば間違いないさ」。この言葉。二人がいうと、実感となり、生活に根をはった重味となり、忘れていた世界が見えてくる感じです。

「昨日も虫が知らせたのかねえ、夜十二時近くに女の湯をはらつておいたら、今日はお休憩が三人あつてね。三人もきてくだされば、どうにかまわつていく。ありがたいね」とおばさんはいいます。

K宿には近代的な設備は何もない。あるものは、あたたかいごまかしのないそのままの元湯と、それにも増しての人間ありのままの変わらないおじさんとおばさんの氣質が、みずみずとあふれているだけです。

「美ら寿」をやつと訪ねてきた昔からの私の友達は、ここに泊り、東京にもどつておばさんに

「おばさん、ありがとうございました。むずかしい親類に泊るよりどんなによかったか。またうかがいます。おばさん『美ら寿』といつまでも仲よくくらしてください」と。「ありがたい電話いただきました」とおばさんは私に……。

「おばさんと後の世まで仲よくしなくちゃ」私も思わず心よりそういつて、笑ってしまいました。

落ちこんだ時も、うれしい時も、人間はひとりでは生きられないことを学ぶ私たちなのです。

「美ら寿」の春、山羊の百子の出産も近く、やがて蜜蜂もとび出すことでしょう。地味にしずかに大地に足をつけて歩いてまいります。

この山の入口近くに移り住んで八年目を迎えたAさん一家も、「美ら寿」になくってはならない助け手となっています。

Aさんは水道工事の職人として家族を支え、休日は「美ら寿」に全力投球です。夫人は毎日午後定期便のように、「美ら寿」に登ってきて、私とは「母と娘」の理想像を探す生活をめあてにしています。

人間関係の在り方の面白さ、まことの自由さ、をお互いに発見し創造するよろこびは、はだかのつきあいから生まれてくると、やっと知りはじめるところまで歩いてきました。

三日前、同じ吾妻郡に住むひとりとして、私は北軽井沢の農協婦人部の総会のあとのみなさんにお目にかかりにいつてきました。昭和二十三年ごろに、満州（中国）からの引揚者が中心に入植した地域です。当時、親に手をひかれ、浅間山の天明噴火のガレキにつまづきながら歩いた幼い子が五十歳に近く、貧乏に負けるな、涙の谷を越えよ、と励まされて近

在からの嫁を迎えた日も遠く、もう次の代が生活を支えはじめています。

—人はみんな老人になります。さてどうしましょう—を中心に、生き抜いてきた婦人たちとの二時間余。私は沢山のことを改めて考えさせられて帰ってきました。浅間山は、三十年來の豪雪にまっ白に輝き、それにも増して、集まった婦人たちは、雪やけ、冬やけに顔はつやつや、きらきらと、これこそほんものと呼べる人間像そのままでした。

高齢社会が目前にとか、福祉国家とかの言葉がうつろに響く社会の在り方に、私はこの方たちとしっかり手をつないで、ま向えばなんとかなるとの力を知りました。

終わりまでのぞみを持ち、自分をみつめ、自分の存在感が生々とする在り方が、自らと社会との両方からかみあう歯車で生まれなければなりません。

人の終わりは、限りのある終末は、おもいきり美しい空気を胸いっぱい吸い、太陽にあふれ、おいしい水をごくんと飲んで、静かに、黙って、誰もが……。

ひとりであって「孤ならず」。

この生命の約束に、忠実にみんながなれる社会を、さてどうすればよいのでしょうかの問いかけを具体的に。さあ、探し求める明日が待っています。

（財団法人老人健康村「美ら寿」村長）

「ぐみの家」と私たち

石井 恭子

銀灰色のぐみの葉が、初夏の陽ざしに光る頃、私たちの『ぐみの家』は開設三年目を迎えます。

当面の活動は『食』が主で、仕出し弁当と、日曜日の病院の給食を請負っています。始めた頃のような極度の緊張や不安は少なくなつたものの、現実とめざすものへの到達の道のりの遙かな距りに、思わずため息のすることもしばしばです。

『ぐみの家』について語ろうとする時、その母体となつた藏敷生活学校の十年を越える歩みを抜きにできません。『ぐみ』の活動はその延長線上にあるものであり、自然に行きついた一つの結果ともいえるものだからです。現在『ぐみ』にかかわるメンバーは七名ですが、いずれも一方で生活学校の中核メンバーでもあります。

〈『ぐみの家』の母体、藏敷生活学校〉

私たちが地域で生活学校を始めたのは一九七三年。PTAの広報委員有志の呼びかけで、地域で身近な問題についての学習をしませんかということがきっかけでした。この辺は丘陵を切り崩した造成地で、交通機関の整備もおくれ、図書館などの公共施設からも遠いというマイナス条件が、かえって自分たちで何かを創り出そうという気にさせたのかも知れません。

最初の三年間は、講師を招いての学習会の形で、合成洗剤

・食品添加物・大気汚染・農薬・医療問題など、その時々に関心を反映した総花的な内容でした。

四年目に転機が訪れました。一つは生活学校で学ぶ意味の見直しから『くらしをどう守るか。学習は解決の手段を見出すためのものだったはず、実践活動を伴ってこそ』というところで、ここからテーマ別のグループ活動が展開されて行きます。もう一つは、『わが家のくらしからの出発』ではあったものの、地域ぐるみで考えていかなければ解決は難しいと気づいたことです。地域あつてのくらし、ここに住んでよかったという実感が持ててこそ、という思いが期せずしてメンバーの中に芽ばえて来ました。

以来『地域づくり』が一貫したテーマで活動が続けられています。

実践活動の方は、『安全食品』『資源・環境』など四つのグループに各自の興味・関心によって分かれて行うようになりました。たとえば安全な食品の共同購入、みそ・たくあん共同仕込み、ガラス類の回収管理、不用品交換、継続的な大気汚染調査、石けん類の定期的な販売などを内容としたものです。学習をくらしの中で実践することによって、意識やくらし方が変わっていくことが体験的にわかって来たように思います。また人と人とのふれ合いの濃い活動は、新旧メンバーのいろいろな格差解消にも有効でした。

候補地まで決めた遊び場づくりの運動が挫折した時が、二度目の転機となりました。失敗を契機に自分たちの生き方の問題から問い直さなければという反省が生まれました。私たちがなりに一生懸命やって来たつもりでも、一人ひとりが自分の生き方をきちんと持ち、責任ある行動をして来たか、さらに遊び場づくりそのものが、子どもたちの切実な要求に応えるものだったのかということを含めての問い直しです。

新しい地域づくりに取り組もうとする時、まず自立した個であること、その個が連帯してこそ——それには個の自立の問題にまで溯らなくてはと遅まきながら気づきました。

それからの二年間、私たちの生き方としての『自立』の問題に没頭しました。多くの学習と議論を重ね、精神的自立については、困難ながら励まし合う仲間の中で少しずつ進められるのではという見通しが持てたように思います。けれど経済的自立については難問でした。しかも精神的自立も経済力の裏づけなしには難しいとなると、ずっしりと胸に重くかかることでした。

十年の間にたくさんの仲間たちが、フルタイムで、パートで地域を離れ仕事へと出て行きました。『自立』の学習から専門的技術を身につけ、一人立ちしていった友がいます。子どもの問題にかかわる中で、学童保育の指導員を選んだ仲間もいます。それぞれの選択を尊重し合い、助け合うよい関係

でありたいとねがっていますが、私たちとて働きたいという思いは同じです。ただ遅々とした歩みであっても、そこに価値をおいて来た地域活動と両立し難い就業は、今までの生き方の放棄を意味し、辛いのです。まして年齢や資格で私たちの働きの場は狭く、多くは企業の最末端であり、何とか流れ変えようとささやかな抵抗を続けて来たはずのものを、逆に押し進めることにもなりかねません。社会の望ましい発展に少しでもプラスになる方向の働きは：しかも無償のボランティアではなく：という選択は、厳しい制約の下で働くことを余儀なくされている人からは、暇な主婦の世迷い言との非難は覚悟の上での模索でした。

『ぐみの家』の発足、そして今……

地域に根づき、地域の連帯を進めながら『経済的自立』をもめざす——困難は明白ですが敢えてかかげた目標です。

私たちはごく普通の主婦です。唯一のよりどころは、人間らしいくらしを求めて学び合いたいことでしょうか。一人ひとりは無力でも、何人かが力を合わせれば自分たちの思いをいかした何かが創り出せるのではないかということから、一歩ふみ出したのが『ぐみの家』なのです。集いの場となった小さな家の戸口に、折から一枝のぐみが涼しげな陰をおとし

ていたことからこの名がつけられました。

手はじめに、今まで活動する中で自分たちの生活にとり入れて来たよいものを、地域の人にも提供し、それが正當に評価され、報酬が得られるなら『経済的自立』にもつながるのではないかと考えました。売る人・買う人という一方的な関係ではなく、同じ地域に住む者同志がよいものをわかち合って暮らすという私たちがめざす『地域づくり』の延長線上に『ぐみの家』はあるととらえています。石けんを買いに来た人が、たくさん造ったから欲しい人に原価プラスコストで分けて欲しいといつて、自家製のらっきょうを持ち込んで来るといった楽しい交流を期待しているのです。

発足に当たって、メンバーとして参加するという意思表示のため一律三万円を出資金として拠出し、必要最低限の設備と道具を整えました。大半は家庭の不用品と粗大ゴミとして出されていたものを修理再生したものです。『ぐみ』が各メンバーの家から五分位のところに格安で借りられたのは幸運でした。一年後には積立金で保健所の営業許可がとれるよう調理場を改造しました。

現在の主な仕事である仕出し弁当は、手づくりの家庭の味を基本に季節の素材を使い、栄養のバランスを考えながら、安価でおいしいものと欲張っています。注文はPTA、子ども会、趣味のグループの集りから祝儀・法事など、いろいろ

ろです。食べものを通してのつき合いが、点から線・面へと広がっていくことをねがっています。

近くの整形外科病院からの依頼による日曜日の賄の仕事は、二人一組で献立から仕入れまで担当、二五名前後の食事をつくります。地域の病院として大事にし、よい関係をつくっておきたいことと、楽しみの少ない入院患者さんたちの食事をできるだけ家庭の味に近い、手をかけたものにしてあげたいという思いで引き受けました。朝食の温かいミルクティーやサンドイッチがことのほか喜ばれ、日曜日が楽しみという声をきくとうれしくなって張り切ってしまう私たちなのです。

『食』にかかわるメンバーの他に、『衣』に取り組む人がいます。布のいのちをいとおしみ、できるだけ活かして使いたいと、リフォームをライフワークにしたいと意欲を燃やしています。ここが展示・即売の場として地の利が悪いため、日常的に活動できず、不用品などの交換・即売を目的としたガレージセールに出品しています。

生活学校の共同購入から始まった石けん類の販売は、粉せっけん・歯みがきなど十数品目で、取り扱い高はかなりの額になります。いつでも手に入れられるよう、『ぐみ』に在庫をおき、日常的に扱うようにしました。利用者も地域の人の他、野菜の共同購入のルートを通して厚木・小田原などのグ

ループにも及んでいます。

生活学校で毎年共同で仕込むみそが好評なので、今年から『ぐみ』でも仕込み、年間通して供給できるよう、少しずつ時期をずらしながら仕込むことを始めました。

以上が『ぐみ』の活動の概要で、とり敢えずできることから始めた私たちですが、二年目も半ばを過ぎ、次のステップをどう進めるか集中的な論議をしなければならぬ時期にさしかかっています。

〈これからの『ぐみ』〉

◎地域活動の拠点としての課題

現在の利用は、生活学校のグループ活動や生活学校から派生したグループなど関連のあるものに限定されています。狭い、地の利が悪いなどがネックで、私たちがめざす地域の複合施設にいくためには、買いものがてらフラツと寄れるような場所に移ることが望まれます。地域の茶の間として、気軽な交流や情報交換の場であり、メンバーのリフォーム作品の他、ニット・革・籐など手づくり制作品の日常的な展示ができ、一人ぐらしのお年寄りや、時に食事づくりから解放されたい仕事をもつ主婦やその家族、残業や外出で遅くなる家庭の子どもたちに、家庭に代わって心のこもった食事を提供する場にできれば……と夢はふくらみます。

しかしながら将来に備えて積み立てられる額は毎月微々たるもので、別途方策を考えない限り現状の収入では実現はおぼつかない状態です。ほとんど活動の場のない『衣』については、このままでも仕事ができるよう先方からの持ち込みの素材で希望をいかしたりリフォームや寸法直しなどを積極的にPRしていくことを決めました。

◎経済的自立をめざしての課題

今のところ時給三百円、一ヶ月平均手取りは一万五千円程度です。かなり忙しく働いても二万円位ということは、手をつけた手づくりを基本の私たちのやり方では、努力しても限界があり、くらしを賄えるような『経済的自立』は難しそうだということが明らかになって来ました。どう打開するか、現状維持でやっていくのか、すっきりとした結論はでずうにありません。

*仲間と一緒に働くことが楽しく、我が家の食卓がうるおう今の状態に満足、無理して広げることとはどうも……

*メンバーの誰かが家庭の経済を負わなければならなくなつた時、せめて一人を支えるに足る基盤をぜひ持ちたい。

そのためには人も仕事もある程度広げなくては

*これからの人生を『ぐみ』にかけたい。そのためには将来への展望を着々と実現すべく常に見直しをしながら次の手を考えていくのでなければやっつけいけない

*他に仕事を持つっているため背水の陣で臨んでいる人に比べ、真剣味に欠けるようで後めたいがやり続けたいなど、つきつめると『ぐみ』へのかかわり方も思いの深さも決して一様ではありません。ささやかな設備投資をめぐってさえ、時に激しい言葉の応酬もあります。内心はらはらするような緊張場面もあるのですが、そのことが却って常に自分にとって『ぐみ』の持つ意味を否定なしに問い直す機会になっているのではないかと思います。そして今のところ答えは『とにかく続けるために努力しよう』という点で一致しています。

多面的な活動のできる拠点づくりのためにも、安定収入の増大につながるものを考える必要があります。ちらしなどの配布により一般の需要を開拓する一方、例えば次のようなことも視野に入れるべきでしょう。

*定期的に一定数の受注先を確保する

*一人ぐらしの老人給食など行政とかかわりを持つ

いずれも今後の検討課題です。荒海にのり出した小舟のような『ぐみ』ですが、ゆっくり進んでいきたいと思えます。

自給生活を築く中から

緒方 順子



今年の冬は、この和歌山県本宮町に引っ越して初めての冬、雨不足と凍結で、水にはとても苦労しました。一km程離れた水源地从ら沢水を引いて、一〇軒程で共同で使っています。皆で水の見まわりなど、自発的な共同性に感心し、これまでの自分をふり返ると、蛇口をひねれば水は出てくるものと固く信じこみ、どこが水源地なのか考えもしなかったのです。素性のわかった沢水はとてもおいしいんです。その水も、雨がたくさん降り、暖かくなり、やっとたつぷりと届くようになりました。それを待ちかねて、数日前には味噌を仕込みました。今年で六回目、わが家ではすっかり定例化しましたが、今年はまた格別。台所にでーんとすわったかまどに、二つの大鍋をのせて豆を炊きました。つれあいと子供たち二人がこねるのを手伝ってくれて、にぎやかにかめに詰めました。一年経って、どんな味になるのかと今から楽しみです。

昨年の四月に、私たち四人は、自給生活をめざしてこの地に移ってきました。それまでは、神戸に住んでいました。自分が目をつむることのできない世の中の構造は、そのままそっくり食べ物の世界にもあてはまることに気づきました。生きていく上で、まず基本となる食べ物に、しっかりとこだわりたいと、つれあいは、共同購入の会の専従メンバーになり、私も活動に一緒にかかわってきました。生産者への訪問・援農を通じて、より近く、より深く食べ物が見えてきました。そして、自分たちも畑を耕そうと、会の仲間たちと自分たちの農場を作り、休日のほとんどを通いました。自ら耕せという安藤昌益の思想に共鳴し、その意味での農場づくりでした。また、お産の立ち会い、子供の預け合いなどを通じて、自分の体への問いかけ、子供との育ち合いにも話し合える友人もでき、楽しい毎日でした。会の活動と並行して、わが家の食事もはつきりと変わってきました。食べ物は、ほとんど共同購入の会を通じて手に入るようになり、玄米野菜中心となってきました。

しかし、五年間の活動の中で、労働と生活ができるだけ分断されない暮らしができるだろうと始めたことが、日々忙しい中で、つれあいの、何事に対しても意義づけ、位置づけと論理化を迫ってくるのに、心底嫌になり、関係も破綻してきました。そして、また、快適さ・便利さを都市に住むことで求

めつつ、気分は田舎で、という生活にふと気づきました。自ら耕す―自給の思想と消費前提の都市の生活とは並存することはできません。都市に住む限り、自分たちの自給の思想を展開しようと思っても、それは形の上では、体制側からの攻撃を常に反対する運動をしていくしかないのでは、と思うのです。都市解体は、とても無理で、それならば、自分たちの拠点を変えようと考えました。そして、幸いに、つれあいとも脱都会田舎への流れは時期を同じくし、一緒に行動をということになりました。

五年間の活動の中で、二人の子供の母親となり、育ち合いの毎日、いのちの大切さを実感します。反戦平和をいくら唱えても、侵略の基盤に立った都市に住む限り、虚しいのではないかと。都市住民の大半が中流意識を持っていますが、それはとりもなおさず、東南アジアをはじめとする海外への経済侵略―形を変えた戦争―故の繁栄のおこぼれではないか、と思います。

そのような理由で、できる限り誰をも侵さない生活をしたいと土地探しを始めました。どんな場所に住みたいのか、まず二人でイメージをふくらませてみました。

① 飲み水がきれいで豊富な所

② 田畑は基盤整備されていない所（基盤整備は機械化導入を意味するので）

③ いろいろ、かまどのスタイルをとりたいので、薪の山が近くにある所（雑木の山です）

④ 冬は、雪が根雪で残らない所（二人とも暖国育ちなので、雪の降る暮らしは厳しすぎる）

おおまかには、このようなイメージでした。つまり、現金をどう手っ取り早くもうけるかという発想に立つと、不便で、仕事もないしと皆が捨てて過疎になっていく村なのです。しかし、そのような村こそ、ほんの少し前まで、豊かに充実した自給生活が営まれていたはずです。私たちは、都市でぎりぎりの生活をしていたので、貯金はほとんどありません。買い取りはとても無理です。借りる形で、地域に根づいていこうと考えました。村探しは、最初は休日だけでしたが、仕事を辞めた後は、友人から古い車検切れのワゴン車をもらって、それにふとん、七輪、鍋、食器やらを積みこみ、自炊しながら、下の子供のおむつを車の中に干しながら、続けました。地図を頼りに、気に入った風景があれば、その近くの空家を探すという具合に、車で走り続けました。その期間も、とても楽しい時期でした。

そして、村探しを始めて五ヶ月経った昨年の三月に、本宮町の役場へ出向き、役場の方から、地元の実業家のK氏を紹介していただき、彼の強力な支援で、この町に住むことができました。私たちは、とにかくこの本宮町がとても気に入っ

ています。どの大都市からも遠く離れていて、過疎になるのも当然の地です。町内に温泉が三つもあります。小さな旅館が十軒程のひっそりとした温泉です。この一年間、どれだけ温泉のたっぷりさが、体をくつろがせてくれたかわかりません。山と川の村です。身近に川を見て育った経験のない私は、とても興味があるし、遊ぶのも魅力です。水はまだまだきれいで、どこでも泳げます。川沿いの集落と高台の集落があります。私たちは、高台の集落に住んでいて、遠く、山脈が望まれ、清々しい空気が吹き渡っています。

私たちは、引越通知に、「お金もコネもないスタート」と書きましたが、まさにその通りです。今住んでいる家も、最初は床がぬけ落ち、押し入れの屋根がないという荒れ放題でしたが、K氏らの協力で、材料持ちこみで直して下さいました。また、畳も、役場の方と、K氏の知り合いからもらい受けました。K氏のはからいで、田・畑も約一反ずつ借りることができました。家・畑・田と全て持ち主は別ですが、無料で借りています。K氏と知り合ってから、すんなりと順調にスタートしました。

引越を機に、神戸で使っていた電気製品を全てやめました。反原発の思いをこめて、ランプ生活です。洗濯は、たらいで洗っています。台所は、かまどで料理し、風呂も薪でたいています。この選択は、決して無理強いではなく、子供た

ちもすぐ慣れてくれました。私も電気製品を恋しく思ったことがありません。ランプのおかげで、夜の暗さ、星の明るさを目をみはります。

引越通知をある自然食雑誌がのせて下さり、また別の雑誌から原稿依頼があり、その二冊の本で驚く程の反響がありました。半年経った今も、問い合わせやら、多数の訪問者が来て下さっています。脱都会の波をひしひしと感じます。その動きに、意を強くしています。また、神戸からも、一ヶ月に一回の定期訪問があります。その意味で、都会からの動きが全く閉ざされてしまった訳ではなく、むしろ、同志の知り合いが、どんどん増えています。

地元の人たちも、客の多さに驚いています。この部落は、ほとんどが老人夫婦です。「自分たちは都会には住みたくない。ここで暮らしていくのが一番性に合っている」と言いつつも、どちらかが先に亡くなれば、後は、都会に住んでいる息子の所へ身を寄せるしかないのです。ここを離れねばならないと覚悟している人たちには、私たちの動きは、確実に目に止まっています。その老人たちと、私たちとは、どう結びついていけるでしょうか。この老人たちは、まだまだ消費経済に犯されていず、自給生活を体現しています。その知恵を、できる限り教えてほしいと思っています。この地域で生きていくということは、その知恵なくしては成り立ちませ

ん。具体的にいえば、山菜の見つけ方、山菜の加工、川魚を釣る法など。

また、三〇歳前後の村の人も、大勢遊びに来てくれます。都市で働いていて、Uターンで帰ってきた人たちです。やはり、田舎のリズムがいいと実感できても、世の中全てが都市志向の現実を、自分なりに消化できず、居直れない人たちがです。その人たちにとって、私たちの存在は大きいように思われます。私たちは、この地が気に入って、都市を脱し、ここで生活を始めた訳ですから。この家に遊びに来ることにより、時間の使い方も変わってきたのではないのでしょうか。とにかく、昔からの友人のようにつき合ってくれます。町で買い物をしてきてくれるし、花火、海水浴、潮干狩などには連れていってくれるし、川釣りも存分に教えてくれました。つい最近、軽自動車をもらい受けました。この家が落ち着くと言って、よく訪ねてくれて、薪割りを手伝ってくれたり、竹、木を使って、庭先で、スプーン、箸、しゃもじ、鍋敷きなどを作ったりして、時間をすごしていきます。紀南方面の反原発の会の人たちとも知り合い、うちとけた気安い交流が続いています。また地域対象に、神戸の会で扱っていた共同購入品のしょうゆ、菜種油、純米酒、石けんを、実費で分けています。食品公害も折にふれて話をして、目をむけてくれる人も増えてきました。この地域では、石けん使用派はまだまだ

少数です。釣りができ、泳げるかけがえのない川を守るためにも、合成洗剤の危険性も訴えていきたいと思っています。

私たちは、父・母・子という家族構成で引越してきました。その形態は、地域と溶けこんでいくという点で、一番無理のない構成だったのかもしれませんが。そして、つれあいとの関係の中身も、ずい分と楽になってきました。ここの暮らしでは、自分の適する仕事、男にやってほしい仕事、対立することなく、つまり、お互いが、お互いを必要とすること、で成り立っています。共に生きる同志という感じですよ。男と女の生理的な違いを、できる限り認めていこうとすること、それはとりもなおさず、自分があるがままに生きることだと、何の気負いもなく実感できるようにしました。そこから考えると、血縁、家族って何だろうと、考えてしまうこととききります。血縁を超えた新しい家族の在り方も模索していきたいものです。

現金のいらぬ暮らしをめざしていますが、過渡期の今はとても無理です。し、今後も全くゼロでは難しい状態です。そんな訳で、つれあいが、一ヶ月に七日程、地元の肉牛生産農家へバイトに行っています。田畑の生産物を、都市に売るという手段もあるのですが、私たちは、生産者の立場になりたくないのです。都市に住んだ経験から考えると、消費者から

生産者へと立場を変えても、流れは変わらないと思うのです。どう地域と結びついた形で、また、自分たちの納得できる形で、現金を得ていくか、あくまでも自分たちの側からの地域振興を、どう花開かせていくかを考えています。

本宮町は、面積のほとんどが、森林、それも植林率の高い杉と檜です。山で働く人が、多数を占めています。しかし、今、木材不況で、不景気に沈んでいます。この山を生かせることを、まず考えたい、それがなによりも、地域に根ざしやすいいと思います。そんな折に、同じ考えを持つ地元の人と知り合い、その木を生かした産業、具体的には木工品をやってみようと、話が煮つまってきました。木の暖かさは、やすらぎがあります。木を使つての工作、とても楽しみです。とりあえず、玩具、台所用品、本棚、机などを作っていこうと話合っていますが、何よりも、地元の人とやっていけることが、大きな魅力です。つれあいは、近くのチップ工場から、細工しやすい板の木を買ってきました。

さてさて、二年目は、そういう所でスタートです。三年目、四年目へ向かって、さらに大きなうねりを作っていきたいと思っています。

わが家と共働き

中里 清志・中里あや子（あや子記）

〈共働き〉

共働きの女性が増え、新聞や雑誌にも働く女性の生き方・悩み等の記事も多くなっている。

厚生省でまとめた「五十八年国民生活実態調査」では、主婦の職場進出がすすみ、三人にひとり以外で働いているとのことである。

共働き家庭は三四・三パーセント、全世帯の三分の一を超え、五十六年の調査の三一・四パーセントに比べ、二年間で二・九パーセント増えたことになる。

こうした時代の流れを背景として、テレビでは、三十代の女性の恋愛・離婚・自立を扱った新番組がふえたとし、新聞の家庭欄が倍に広がったりしている。

私自身は、働く女性の仕事そのものというよりも、家庭と仕事とどのように両立させているかに関心があり、興味をもって見たり、読んでたりしている。

私は大学では、教育学部の家庭科を専攻し、卒業後は、当然のよ

うに教職の道を選んだ。

就職して三年目仕事のおもしろさがわかり始めてきたころ結婚をしたが、迷うことなく共働きをした。今や、共働きも十年になる。

結婚した女性が仕事を持つと、必ず家庭との両立が問題にされる。女性にのみ、こうしたことがいまだに言われるのはおかしいと思う。女性も自分の能力を家庭のみでなく社会でも生かすのは、当然のことであろう。私の住んでいる市では、保育園の入所希望の理由に、母親が働くのは、家庭の経済的事情による場合しか認められない。女性の生きがいのために働くなどというのは、許されないような制度である。しかも、一定の額の収入のある場合は、保育料は格段に高くなる。私の周りでは二人の子供を保育園に入れて働くという一人分の給料は飛んでしまうというのが常識になっている。一般的に行政の福祉切りすてでこうした傾向が強くなっている。こうした中でも働く女性が増えてきているのは、社会にかかわっていくことが、女性にとっても大変に意味深いからだ。

女性が仕事と家庭との両立をはかるには、家事はいくつかの事を並行して行うことが多い。煮物をしながら洗濯機を回し、手はお茶碗を洗い、目では子供を見ている。この調子で、夕食の仕度をしながらも、頭の中は、翌日の朝食の用意、お弁当のおかず、子供の学校の用意、自分の仕事の段取りと目まぐるしく働いている。職場でも、四十人の子供一人一人の話に耳を傾け、対処し、次の授業を準備しながら、教室のごみや花びんの水にまで気を配る。このような作業は、私にとっては、大してむずかしいことではない。家事労働で培った能力は、職場でも充分に生かせるであろう。ところがわが

家に限って言えば、男性は、一つのことを集中的に深くやることはできるのだから、同時に何種類もの事を手際よくこなすのは得意でない。仕事と家庭とは、どちらを取るかという反対の物ではなく、お互いの特性を出しあい、補っているものである。

《わが家のモットーは》

特に決めている訳ではないが、しいてあげれば、肩ひじを張らずに楽に生活することだろうか。夫婦ともども、ぐうたら生活が性に合っているようだ。

家事の中で、割合に楽しながらやれるのは、食事の仕度である。こまめに動き回るのは苦手であるが、料理は流しの前に立って手先だけ動かしていればよいからであろう。掃除は、運動が大好きで、疲れていてもジョギングをしなければ氣のすまない夫がやればいい。だから、あまり責任だ、義務だと考えず、楽しみながらやっている。

後片付けがおつくな時は、翌朝にもち越したつてかまわない。

私の得意とすることは、家中ちらかし放題になつていても、来客のチャイムが鳴ると同時に、毎日きちんとやっているかのように片付けてしまう要領の良さである。花まで飾ってしまうのだから我ながらうまいものだ。だから、わざと定期的にお客様、といつても氣のおけない友人たちを招待する。家の中は片付くし、友達のおしやべりで私のストレスも解消。「今日は遅く帰って来てもいいわよ。」と機嫌のよい妻の声に、この時ばかりは、夫も思う存分仕事をしてくいたり、同僚と付き合ったりもできるというもの。子どもも、お互い子連れなので子ども同士で遊んでいる。

こんな調子で生活しているので、ご批判をいただくとは思うが、全て、手作り、愛情弁当、自然食品といった考え方はしていない。外食、店屋もの、宅配の夕食材料、インスタント食品も、わが家では活躍している。うまく使つて、主婦が疲労やイライラから解放されて、家族が楽しく過ごせれば、その効果は絶大であろう。

店屋もののカツ丼を食べながらビールを飲む夫の横で、小三になった娘がピアノを弾き、私は「お客さん一曲いかがですか」と歌つてみせるのである。そして、翌日は、野菜の煮物をたっぷり作り、焼き魚に大根おろし、酢の物といった取り合わせで、「やっぱり、お母さんの料理が一番おいしい」と言わせるのである。口に出して言つてもらうのは、とても大事なことで、心で思つていれば通じたのは、恋人時代だけのことだ。一言のねぎらいの言葉が疲れた体には、最高の励ましになる。

学童保育から帰つて来た少々おデブさんの娘が、「今日のお弁当、とってもおいしかった」と言ってくれる。「よし明日も、もう十分早く起きて頑張ろう」という気持ちになる。でも、そうは言つても、学期末の忙しいピークになると、どうしても朝起きられず、「ごめんね」とお金を持たせることもある。こんな時、母親失格と自分を責めたりはせず、まあ、たまにはいいさと明るく、買ったお弁当では不足するビタミンを考え、みかん一こ、りんご一こを持たせる。

上手に手を抜くというのは、むしろかしいことだ。正しい知識と実践する力があつて、その上で手を抜くのでなければ、あとで欠けた部分を補うこともできないし、どうしても手を抜けない部分がどこかを見分けることもできないであろう。

いま、働く人々の間では、うつ病が激増し、出勤恐怖症あるいは

出勤拒否症が目立っているとのこと。サラリーマンの一角がうつ病の前期的な症状や心身の変調などを訴えているという。うつ病の潜在予備軍である。管理職では六人に一人が予備軍だという報告がある。労働省の調査でも、働く人の半数以上が仕事や生活の上で、強い不安やストレスを感じているという。体の疲労よりも神経の疲労の方が多いとのことである。教員の社会でも同じ傾向にある。ある雑誌によると、心の変調を知るには、七つの注意信号があるとのことだ。

(一) 楽しんだり、喜んだりすることがなくなる
(二) 決断力が低下する。重要ではない物事を選択にちゅうちよするようになる

(三) バイタリティーがなくなる
(四) 社交性がなくなる

(五) 眠れない

(六) 死にたいともらす

(七) 気分の不快が二週間続く

さて、私も右の自己診断をしてみた。

(一) 毎日とっても楽しい

(二) 自信なし

(三) そこそこにある。学級通信を夜遅くまで書き、今年は何号まで出せるか、と意欲的じゃないかなあと思う

(四) 自分の好きな所でなら、あるある。何か口実を作っては、「新年会だ」「ひな祭りパーティーだ」「七夕パーティーだ」と友達と騒いでいる

(五) 毎日ぐっすり。朝の目覚ましのベルも聞こえないほど

(六) とんでもない。小さな子供を残して、とてもとても

(七) 職場で嫌なことがあると、ゆううつにはなるけれど、解決すれば、すぐ元気になる

どうやら合格、夫はここまではいかないようだ。多忙さの余り、自慢の体力とバイタリティーも、最近少々かぎりを見せている。教師のストレスにも労災が適用される時代である。気をつけなければと思う。今後共、私はおしゃべり、夫はトレーニングやジョギングなど、それぞれが自分に合ったストレスの解消法を身につけていくのは大切なことのように思える。

〈この十年間をふり返って〉

多くの女性が苦しい闘いの中から女の自立を勝ち取っていったのに比べ、私の場合は、男性Ⅱ夫によって、意識の変革と自立の道を教えられたようである。

良妻賢母の見本のような大正生まれの母に育てられた私は、女はつましやかで男性の後からついていくものと信じていた。

十年前、新婚旅行から帰って、アパートで食べる最初の朝食に、私は旅館のような和食をそろえた。ところが、それを見た夫は、「こういうのじゃない方がいい」とボツリ。その一言で肩の力がスツと抜け、翌日からは、身仕度をしながらトーストをかじる生活のスタートであった。その頃は、民間会社に勤めていた夫の帰宅時間は遅く、私も六年生の担任で、帰りは店が閉まる時間になることも度々。そんな時は、買物カゴにお弁当箱を入れ、人の流れとは逆に暗い夜道を実家へおかずをもらいに行ったこともあった。

悲しく、みじめに感じたのは、修学旅行や運動会で疲れ切って帰ってきて、自分ひとりで風呂場の掃除からやらなければならなかったことだ。何しろ、結婚するまでは、何から何まで、母にやってもらっていたのだから無理もない。こんな未熟な妻であったが、夫の帰りが遅く、家事を頼むことは無理だったので、一つずつ、何とかこなしていくようになった。

夫は、夕食の仕度をきちんとそろえて帰りを待つ私よりも、疲れ切ってひどい顔をしていても、学級の子供のことを瞳を輝かせてしゃべったり、新聞の記事について討論し合ったりする私の方が気に入っているようだ。いつしか、ビールを飲みながらの討論会は、わが家の大切な楽しい語らいの時となり、いまだに続いている。こんなことから、私の男性を見る目や家庭のあり方に対する考え方などが、徐々に変わってきたと思う。

長女の出産を機に、私の実家で母と同居することになったが、いかかわらず夫の仕事は忙しく母子家庭同様であった。年末など、近所のお父さんが、手ぬぐいをかぶって大掃除をしているのを見て、羨ましく思った。家族はみんなそろって一つのことをすることにやって家族となるのではないかと思っていた。結婚する前は、同業者とは結婚したくないなどと思っていたが、夫の転職には大賛成になっていた。こうして結婚三年目から、夫婦で教職の道をすすむことになった。しかし、夫は、子育ては母を頼りにし、長男出産後の私の産後休暇をあてにして、五十日間のアメリカホーム・ステイの旅に立ってしまった。

子育てに関して、こんな無責任な夫も、四年前に頼りきっていた

私の母が急死してからは、大きく変わった。近くに頼れる親戚や身内もなく、全くの核家族となった。生まれてまもない子供を残して外国へ行ってしまったお父さんは、今や、子どもの発熱で仕事を休んでくれるようになった。家に居る時は、子供たちをおフロに入れたり、そい寝をしてお話をしたり、子供たちは大喜びである。

夫は、民間会社をやめて、早く帰れるようになった分だけ、研究会、組合活動等と相かわらず、帰宅は十時過ぎではあるが、週末には自転車と並べ荒川土手までサイクリングに行ったり、家中の掃除をしたり、夫を中心に家族四人がそろって行動できるようになった。夫婦が同じ職であると、仕事の内容を理解し合えるので、悩みを真剣に相談し合ったり、喜びを共にわかち合ったりできる点は大変よい。新婚当初からのビール談義は、今も健在で、話題に事欠くことはない。長女も、保育園の頃は、どうしてお母さんが家にいてくれないのと私を困らせたが、今や親の仕事を理解するまでに成長してくれた。

〈生活の知恵〉

―衣―

普段は丸ごと洗濯機で洗える物のみ。アイロンがけの必要な布の衣服は買わない。クリーニング屋さんに出しては家計がもたない。独身時代好きだったデパートまわりは、ばったりやめにした。カタログなどで、本当に必要な物だけ、よく考えておき、買う時は目的の物だけをさとと買う。ちよつと油断すると、華やかな商業ベイスに乗ってしまった、家計は大変苦しい思いをしなければならぬ。見ない、買わないのが一番だ。子供の物は、なるべくよその人

のお下がりをもらったり、姉弟で共通に着られる色や形にしている。メーカーの宣伝ではないけれど、シンプルライフが一番だ。家中あきのこないシンプルな物をそろえておくようにしている。

ふだんは、飾りのない物を着せているが、夏休みだけは、毎年一着ずつ娘のお気に入りのサンドレスを作ってあげることにしている。子供の好きな色や柄にして、フリフリをつけたりして、少女マンガ風デザインにするのだ。なぜサンドレスかというと、それ以上の物を縫う技術を持ちあわせていないという単純な理由からなのだ。しかしそれは、おくびにも出さず、あたかも、いつも愛情をこめて、手をかけているかのごとく、できあがったお手製のドレスを着せ、楽しい夏休みを過ごすのである。

古くなった下着や、シーツ・カバー類は、休みの時に一定の大きさに切りそろえておく。この小さな布が、掃除の時に大活躍する。物ぐさなこの家の奥さんは雑巾がけをしたがらないから、この使い捨ての布が、トイレ掃除に、ガラスみがきに、油污れ落としにと使われる。子供が学校で版画の時にボロ布を持ってきたさいと言われるが、今は、布がない家庭が多いらしい。そんな時にも得意になって、いくらでも持っていける。又、一年に一度雑巾デーを作る。古くなったタオルをためておいて、一日中雑巾ぬいをする。ぬいあげた雑巾を高くつみ上げた時の豊かな気持ちが好きだ。台ぶきんに、子供の学校の掃除用にと、いつでもすぐ使える。

―食―

どんな物でも手早く作ることを心がけている。夕方に家に着くと子供たちはお腹を空かしている。一息つきたいところだが、ぐっと我慢して、お菓子を与えず、夕食の中の一品をまずさっと出すように

している。お芋の天ぷらなどは、子供の大好物だ。こったお料理はできないが、自分流にアレンジし、ありあわせの材料で栄養を考えて、手早く食卓を整えることに慣れた。珍しく家族全員がそろった夕食となると、心もうきうきと楽しく、全員が一斉に手伝いをし、賑やかな食事になる。

―住―

四年前に新築した。住宅ローンの支払いは大変だが、可能な限り一部屋を広くとった。家族そろって大型のわが家では、普通サイズは皆小さく見えてしまう。何よりも家に持ち帰る仕事が多いので、部屋いっぱい広げっぱなしにしても良いような場所が必要である。そうそうまめに片付けや掃除もできないので、あいている場所を次々と探しては食事ということもしばしばある。子供の遊び友達が出来ても追い帰さずに済む。夫は、「新聞は大事な情報源」だと、チリ紙交換になど決して出させてくれない。おかげで一部屋新聞に占領されてしまっている。腹を立てたいところだが、ぐっとこらえて、「好きなようにさせてあげましょう」と度量の広い所を見せられるのも、場所があつてこそその話だ。住の方もシンプルに飾りも何もなく、費用もかけないように単純な建て物だが、空間だけは、私たちにとってはできるだけだけの贅沢をした。無用なトラブルを避け、心豊かにくらすために、どうしても必要だったからだ。

―夫婦げんか―

共働き夫婦にとって、仕事がお互いに忙しくなるといらいらしく、けんかはつきものだ。そんな時に子供が病気でもしようものなら、どちらが休むかで、必ず言い争いになってしまう。子供も、親が自分の方を見ていないと本能的にわかるのか、忙しくなると熱を出す。

子供を家に寝かせ、職場と家は何往復もして、何とか乗り切った
りもした。しかし、「同じ責任ある仕事をしているのに、なぜ私だ
けが休まなければならないの」といった夫への恨みはやめにした。

休みを取った限られた時間だけは、どっぷりと子どものことだけを
考えられる幸せな時間だ。そう思ってたりとした、やさしい気
持ちで子供に接すると、子供の熱も下がってしまふ。

夫との初めての出会いは、十八歳の時だった。キャンパスの木の
陰から大学紛争のデモに加わる彼の厳しい横顔を見つめ、荒々しい
野球部の主将として練習する後姿をそっと見つめていた。うら若き
乙女であった私は、今や、「うちのお父さんと、お母さんは、けん
かしないよ。だってお母さんが強いから、お父さん黙っちゃうも
ん」と娘に言わせるまでに、たくましく成長(?)した。私たちは
絶対に陰にこもるけんかはしない。思ったことは何でもずばずば言
ってしまふ。男性の前では何もしゃべれなかった私の十年間の大き
な変化だ。私が大声を出して怒るのは、脱いだ物の後片付けをしな
さいとか、茶碗を流しにさげてといった類のことでけんかにもなら
ない。家中が、「またお母さんのヒステリーが始まった」という調
子で、言うことをきいてくれている。

考え方や生き方の根本にかかわることでは、深夜にわたって話し
合い双方とも引かないが、これはけんかではない。私は夫のこと
を、「考え方がびったり合って、私のことをすべて理解してくれる
人」と思っている。夫の方は私を、「自分とは全く違った考え方を
する理解したい異邦人」と思っている。この大きな誤解がうまく
いつている秘訣のようだ。私たちはいつも、「十年間一度もけんか
しないね。仲がいいね」と言い合っているが、多分近所の方は、「毎

日大声を出して、賑やかにけんかばかりしている夫婦」と思ってい
るに違いない。

――近所づき合い――

核家族化とともに、家庭間の交流がうすれ、「隣は何をする人ぞ」
という感じが強くなってきた。玄関のカギをかければ、外の社
会とは一切関係なく、私たちは生活できるかのごとくである。特
に、共働き家庭では、子供たちも日頃家にいないため、遊ぶ仲間が
近所に少なく、保育園や学童保育の友達と少々遠くても行き来する
ようになる。しかしながら、近所づきあいは大事である。

わが家では、子供が病気の時、保育園や学校に出せない程の時、
近所でみてくれる人がいるので大変助かっている。向かいの家に
は、星間の郵便物や小荷物を預かってもらったり、緊急の時には、
子供が世話になったりしている。

二年程前に、うちの辺は、台風で近くの川が氾濫し大きな被害に
あった。それ以来、住民の間に「水害をなくす会」がつくられ、幾
度かの話し合いの中から要求がまとめられ、市や県の行政にも働き
かけている。わが家も役員を引き受け、集まりには出るようにして
いる。こうした活動を通して、近所の家々とのふれ合いもふえた。
さらに、今年は町内会の役員にもなっている。

個人の生活がますます多忙になる中で、私たちは、日常の生活が
家庭と職場との往復で終わってしまいがちである。家庭も狭い世界
にとじ込めがちであるが、夫婦ともども、仕事をもちながら、地
域社会との交わりの中で教育やら子育てが考えられたらと思う。家
庭もこうしたふれ合いの中で成長していくのだろう。

(上尾市立西小学校) (大宮市立宮前小学校)

人間嫌いをつくらないために

櫛田 真澄

一、はじめに

今日の社会が人間嫌いを大量につくりつつあるのではないかという思いは強い。科学技術への信仰、生産第一主義競争の原理、合理性の追求、情報産業の発達など人間不信を強めてしまう方向ばかりが目についてくる。感受性の強い青少年たちが敏感にそれを感じとり、意識しないうちに、様々な問題行動を起こしてしまっている。青少年の非行問題で苦しむ中学校においては、実に深刻な問題で、人間不信を排し、人間を信じるように、またお互いに真の信頼関係をつくりあげるために、生活指導上の努力が日々なされている。しかし、後手後手となり教育面での対応が追いつけないでいるという現状がある。

このような折にもかかわらず、技術・家庭科において技術性や合理性のみが強調されるとき、私は胸が痛くなるのを覚える。家庭科の学習の中には、人間不信や人間

嫌いをとり除くことのできる内容があるのに、技術性や合理性の名の故に、その部分を切り捨ててしまう傾向が強いのである。この稿では、中学校の家庭科内容として、人間嫌いをつくらない学習、即ち、人間が好きになる学習についてのべてみたい。

人間について学んだり、人間性を理解するための学習は、家庭科では家族とか保育の分野である。しかし、中学校の学習指導要領では家族を正面から取り扱うようにはなっていないために、現場では保育の中に含めて家族の指導がなされている。しかし正しくは、家族の学習の一部が保育の学習であると解したい。

二、題材を入れかえて

中学校の教育課程の中で「人間」を直接的題材として扱うことのできる教科は、理科の生物分野、保健体育の保健分野、技術・家庭科の保育分野であろう。それぞれ視点の置き方が異なっているのだが、現在中学生が置かれている状況と、それへの対応を考えるときに、「人間」を題材とした学習は更に重視されてもよいであろう。

同じ中学三年生といっても、一年毎に、生徒の気質や状態には大きな変化がある。内容の入れ替えや、教材化の組み替えはどうしても必要となってくる。本校では、「落ち着きがない」と定評のある学年が三年生になると、学習計画を変更して先ずは保育学習からスタートすることになっている。もちろん男女共学の家庭科学習であるから、学年の問題、又は学級の問題は直接的に教科の授業に影響があり、一時間、一時間がその対応となる。

心のすさんだ生徒、落ち着きのない生徒、愛情に飢えている生徒、無気力な生徒などが最初はひどく目につき、その対応が大変な仕事

となるのだが、保育学習の進行に伴い、全体的に沈静化され、しつとりと落ちてきて、学習態度が改善されてくるのを何度も体験している。また、学習意欲のない生徒たちが、幼児という題材については意欲を示す点も見のがすことはできない。競争社会の中に身を置かされている生徒たちが、未熟なるが故になす幼児の行動に触れるとき、また小さいながら個性を持った人間の子どもと心を交わすとき、更に自分が人のために何かをなすことが出来たと感じたときに、ほっとした安堵感や心のやすらぎや豊かさを体験できるからであろう。

この学習を通しての情意面での良き変容と同時に、生徒たちが人間に好意を持つようになる点に、人間を題材とすることの意義がある。即ち、知的な理解が最も優先されがちで、競争の原理に支配されている今の中学生にとって、保育学習は、彼らの情意を刺激し、豊かな心を味わわせることのできる数少ない学習内容なのである。実際の授業では彼らの興味を喚起するために、多角的に教材を準備しながら学習を進めているのだが、保育学習の展開やその詳細については稿を改めて記したい。ここでは、すべての生徒に「人間が好きだ」と言わせてみたいという教師の願いに焦点を置いて記してみようと思う。

三、「幼児と遊ぶ」ということ

きょうだいの数が少なく、しかもその年齢差が小さいという、きょうだい関係の中では、中学生たちが幼児に触れることができるチャンスはほとんどない。課題を出されて、それに取り組むことでもなければ、男子生徒も女子生徒も幼児を「うるさい餓鬼めら」とい

う意識のまま大人になってしまう危険がある。中学校の保育学習の重要なポイントとは、保育の理論でも幼児に関する知識でもなく、幼児との人的交流の体験なのである。そのために、毎年「幼児と一緒に遊んでみよう」という課題を出し、レポートを提出させている。

以前は「幼児を観察しよう」という課題を出していたのだが、観察となるとどうしても彼らは自分自身を上方の位置に置いて冷やかな目で幼児をながめがちになり、実験的な面が強く出てしまう点に気が付いたためである。「幼児と一緒に遊ぶ」となると、中学生たちは自分自身を幼児の位置まで下げて、心をひとつにしないと遊びは成立しないことを体験的に知ることができ、心を共有する。もちろん、年齢が小さな幼児の場合には、どちらかというと観察的な要素が多くなってしまうようだが、この場合は、人間のこどもが人間らしくなってゆく過程を見ることができて、その意義はまた大きい。次にこの課題によるレポートを紹介したい。

みきよちゃんの遊びの工夫

三年 楠本 佐智子

みきよちゃんは二歳七ヶ月で私のいとこの娘にあたります。二時三十分から七時三十分の間に、みきよちゃんは七つの浮き輪と一つのビーチボールを使って八種類の遊びを考え出しました。場所は家の廊下です。

①投げっこ

最初にみきよちゃんは二メートルぐらい離れて浮き輪を投げ始めました。手かげんされるのがいやなようで、大きく投げたり、二、三個いっぺんに投げると喜びました。

② だるま

浮き輪を重ねて、その中に入り、私に押さえるという遊びです。あぶないのでやめさせようと思うと、「お姉ちゃんの番」といって浮き輪を押してくれました。

⑧ ボール入れ Aタイプ

浮き輪を重ねて、その中にボールを入れるという遊びです。はいらなくて落ちてしまったボールを取りに行くのをよろこんでいました。

④ ボール入れ Bタイプ

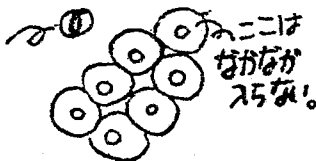
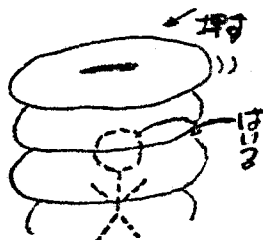
浮き輪を並べて、その中にボールを入れるという遊びです。これはすぐに入るので拍手をしてあげると喜びました。

⑤ とびとび

④ で使った形のままで、ケンケンパみたいなことをするのですが、みきよちゃんはケンケンができないので両足で一生懸命とんでいました。

⑥ ぐしやぐしや

積み重なっている浮き輪に休あたりし



て、その上で泳ぐような格好をして、「うみー」と叫ぶ遊びです。この遊び

は一回だけでなく、遊びにとだえた時何回もやっていました。

⑦ イス

壁と壁との間に浮き輪を立てて並べ、みきよちゃんがその上に乗ってゆれる遊びです。これにはしばらくあきなくて、たまに浮き輪から落ちると声を出して笑っていました。

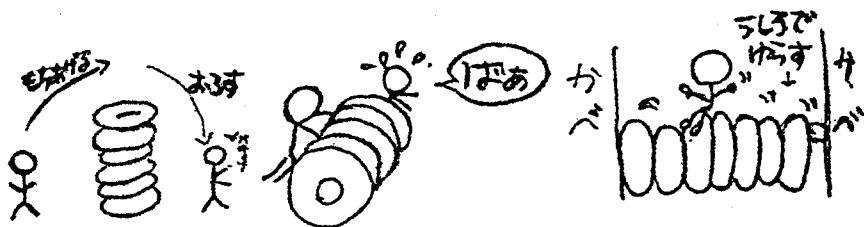
⑧ トンネル

浮き輪を立てて、その中をみきよちゃんが通る遊びでした。でも一回通っただけで疲れたらしく、もう通ろうとはしませんでした。

そこで私がはしの浮き輪からのぞいて、「ばあー」というと、もう一方からのぞいてキャッキヤツと喜びました。10回位繰り返ししましたが、その度に喜びました。

⑨ とび浮き輪

もう遅くなったので私が最後にやっであげたもので、みきよちゃんが考えたものではありません。それなのに大変喜んで何度も「やって」とせがむの



で困りました。

へまとめ」七つの浮き輪から、こんなにいろいろな遊びができるなんて、みきちゃんに限らず、幼児はすごい創造力をもっていて、素晴らしいと思いました。また、単純で何んでもないことによく笑っていましたが、とても生き生きしててうらやましかったです。幼児と遊ぶのは面白くて、楽しいのでたまには一日をこのように費すのもいいものだと思います。

約五時間、幼児と一緒にいて、遊び相手となりながら、「幼児はすごい創造力をもっていて、素晴らしい」「とても生き生きしててうらやましい」というような膚で感じた感想がのべられ、貴重な体験をしたことになる。課題に取り組む中学生の意欲と人的交流の体験が彼らにとっていかに意味があり、教育的であるかを注意して読みとっていただきたい。

四、人的交流の大切さ

前節の生徒レポートからもわかるように、中学生たちが課題に取り組むことで、人的な接触を通じて心を通わせ、人間を素晴らしい存在と思い、人間を信ずる態度が芽生え、人間を見る目が開かれ、次第に情意の面でのよき変容がみられるようになる。それに対して、教科書の記述の解説や参考資料の解説、または映画やVTRを使っただけの授業では、人的なふれ合いが欠けてしまつて、良い題材が十分に生かされない点が残念である。なぜならば、そのような学習形態からは「客観的に事実を認識する」「冷静に判断する」「知識を得る」という方向が強調されがちで、心を通わせることで得ら

れる豊かな体験をしないで学習が終わるという危険がある。まわりくどいかもしれないし、時間的なロスもあるかもしれないが、今の中学生にとって必要なことは、人的交流を通して学ぶ体験、人間に対する態度や考え方、更には自分自身の生き方の問題なのである。

このことを教師側が心に留めるならば、彼らにとって適切で、しかも、教育的で有効な課題が用意される必要がある。例えば、

①近所の幼児や親戚の幼児と一緒に遊んでみよう

②近所に住む高齢者やひとり暮らしの老人を訪問してみよう

というような課題を出し、そのレポートを提出させてみる。私の場合、この二つは常にペアとして用意してあるのだが、「家族」という大テーマで学習する場合は①と②の両方を、また「保育」という小テーマで学習する場合は①のみを課している。家庭科としての理想は、「家族」という大テーマを取り上げ生徒には①か②のどちらかを選択させる方向なのだが、学習時間数の制限などから現在では「家族」の一部としての「保育」が中心になっている。そのため①のみを課することが多い。「家族」で扱った実践例は拙著『男女共学の中学家庭科』P147（家政教育社）に収録してあるので参考にしたい。

夏休み前に、「幼児と遊ぶう」という課題に諸注意とレポートの書き方やまとめ方をプリントにして配布した。意欲を喚起させるように先輩の良いレポートを示したりしながら、どんなレポートでもよいから全員が幼児と一緒に遊んでその記録を九月の初めに提出するように述べたのである。

「はじめ、先生は変な宿題を出すなあーと思いました。レポートを書かなければならないので、どうやって遊ぶうかといろいろ考えま

した。魚釣りの道具を作ったり、ダンボールで乗りものを作ったりして一緒に遊びました。疲れたけれど楽しくとてもよい経験になりました。宿題の意味がよくわかりました。」(三年 福井一久)

男子生徒のこのような感想文の中からも、課題に対する積極的な取り組みがよく表現されている。「プールで一緒に泳いだ」とか、「花火と一緒にした」「海岸で砂山をつくって遊んだ」というように、ごく自然な形で気楽に課題をやっていたようである。そして、心を通わすという点での成果が非常に大きいことから考えても、無理のない中学生向きの課題であったと思っている。「幼児が好きになった」「とても素晴らしいところがあった」「また、いろいろな子供と遊んでみたい」という感想が多く記されていることを特に記しておきたい。

幼児の行動とその様子

三年 荻野 剛

ぼくは前から赤ん坊や動物の行動というものに興味を持っていました。小学校の担任の先生の家をみんなで訪ねたとき、ぼくは目的を持っていなかったのですが、その日に起きたことをまとめることにします。先生の息子さんの名前は文治、通称文ちゃんといいます。二歳です。

その日の文ちゃんの様子

先生の家に着くと先生が文ちゃんを抱いて出てきました。とてもうれしそうに笑っていました。家の中ではかなり興奮して、しきりに顔を動かしたり、立ったり、座ったり、またゲラゲラ笑っ

てみたり、とにかく落ち着きがないのです。それからぼくは文ちゃんとして遊びました。側にあった絵本を使って絵の名をたずねるとしっかりと答えてくれました。この位の子どもは本当によく動きまわります。外に出て縁側を行ったり来たり、部屋をぐるぐる回ったり、じっとしていることがありません。

そしてこのあと、面白いことが起きました。ぼくより先に友達が気付いたのですが、文ちゃんの様子が何んだかおかしいのです。「どうしたの?」と聞くと、文ちゃんは一言ポツリと「オシッコ」と言いました。「エッ」と文ちゃんを見ると、ズボンも畳もぐちよぐちよです。近くに母親がいたのでどうするかと見ていると、まず最初によく注意しました。

「これは、誰がしたの?」と母親が聞くとうつむいて「文ちゃん」と答えました。こうして、自分のしたことが悪いことだとわからせると、パンツを取り替えはじめました。母親が畳をふいていると文ちゃんは何もはかずに「キヤツキヤツ」と走り回っていました。そしてなんと文ちゃんは、ぼくらにいろいろ愛嬌を振りまいてごまかそうとしますのです。

二時間ぐらいたつと随分なれて、ぼくたちの中にも入ってきます。みんなにかまってもらってうれしそうでした。そして、また、面白いことが起きました。ほんの冗談のつもりだったのですが、母親のところへ行こうとする文ちゃんをぼくが足で突いてみたのです。ところが力を入れ過ぎてしまい文ちゃんは大きく尻餅をつき、転んだショックから泣き出してしまいました。ぼくはとても慌ててしまったのですが、母親がすぐにあやしてくれました。しばらくすると文ちゃんは泣きやみましたが、母親の膝の上

の文ちゃんは、ものすごく甘えん坊でした。

へまとめ）先生の家で文ちゃんの様子から、幼児というのは人間として、まだ発達の途上にあつて身体的にも、精神的にもこれから伸びてゆくものだと思います。ある面では不完全で未熟だが、他の面ではいろいろなことのできる可能性をたくさん持った存在だとわかりました。ぼくは子どもというのはとても面白くて、興味深いものだと感じました。文ちゃんとの接触はよかったと思うし、素直な心がいいなあと思いました。

五、人間とは素晴らしい存在

人を思いやる心とか、人間を愛するという心情は育てられるべきものだと思う。それは人間に先天的に備わっているものではなく、学習するものであり、育てられるものである。人間不信が広がり、人間嫌いがつくられつつある昨今、人間を大切にする教育は、もつと強調されなければならないであろう。人間が人間の心に直接触れ合うことによって得られる心の広がり大きく尊いものである。特に自尊心の高い中学生が、自らの年齢的精神的な位置を幼児と同じところまで下げて、「幼児と一緒遊ぶ」ことができた体験は貴重である。高い位置から幼児を観察したのではなく、幼児と心を「共有」したことになるからである。「疲れたけれど楽しかった」「幼児が好きになった」「人間とは素晴らしい存在だと思った」とも語る。これこそ、人間性尊重の精神を育てるための基本的要件である。これこそ正に福祉社会を築くための土台であることを強調しておきたい。

また、中学生期が青年前期として、自分の存在や人間自体に興味を持つ時期であるから、このような学習の適時と考えている。人間嫌いが育ってしまうのも、人間好きが育つのも中学三年生頃に分岐点があるのではないかとさえ思う。また、非行問題で苦勞の多い日々を過ごしながら、彼らの人格的な破壊は、根本的には人間的関係の崩壊が原因であると思われる。それ故に、幼き者に対する理解、幼きものへの愛情、自分が彼らに何かをなし得た満足感や喜び（有意観）を体験させながら、健康な価値体系を彼らの中に育ててゆかなければならないと考える。現に、本校においては「落ち着きがない」と評判な学年が三年生になったとき、学習計画を変更してでも保育学習から始めるが、全体的に落ち着きをとるもどし、学習態度が改善され、情意における良き変容が期待できるというメリットは見逃すことができない。

最後に、現在では人類の存続のために「共有」「共存」「共に生きる」教育の方向が打ち出されてきている。皆の幸せのために、皆が共に生きるためにどうしたらよいかの方策が求められる時代となってきたのである。人間を題材とした人間性理解のための教育は、ますます重要を増すことになるであろう。家庭科の「家族」や「保育」の学習の意義は、この点からも強調され得るであろう。

（武蔵野市立第四中学校）

「学ぶ」力を育てるために

合成洗剤残留実験Ⅱ

福島 澄香

学校は生徒が主体的・自主的に「学ぶ」場でないといけない。「子ども」の目を輝かせるために学校を、どうよみがえらすか?は(Weが昨年の夏、江の島で開いたフオーラムのテーマであった)、教師ならば、親ならば、誰だってそうしたいと思っている。生徒だって「目を輝かせ」て「学ぶ」ことに出逢いたいと思っているだろう。前回の授業での生徒が持った関心・興味も「家に帰って母に注意した」「(男生徒)、「結婚したら気をつけます」(女生徒)などで軽くけりをつけられてしまう。「合成洗剤の残留は気持ち悪いから、よくすすぐ」「洗剤の使う量を少なく」「ふきさんは蛍光のない市販のふきんを買って、もらいもののタオルや手拭いは使わない」「ふきさんは蛍光剤の入っていない洗剤で洗う」などは第一回合成洗剤残留実験で生徒がノートにまとめたものである。

まだまだ不十分な生活の知恵に

止まって、今の自分とのかかわりや問題を深め発展させるような「学び」方にはなっていない。

そこで再び「目を輝かせて」生徒が「学ぶ」場を組織するため、しつこく同じテーマで授業にいとむところを述べてみたい。

生徒の手

前回集めたノートを返しながら生徒の手を見る。長く伸ばした爪(無精なのではなく彼女らのおしゃれなのである。スポーツなど、この長い爪で怪我することも多い)、時々マニキュアの爪も混ざる。「爪も呼吸しているのヨ」「ヘー。ウフフ」。

でも私が一番気になるのは、薄皮の剥げた指、指紋のない指先、手の湿疹などである。ひどく荒れた手をしているのは、家で炊事をやっている生徒(クラスで二、三人位か)や血洗いのバイトをしている生徒たちである。「病院へ行って薬もらってぬってやるけどなかなか治らない」という生徒も多い。「原因はなんだって?」「わからない」「お医者さんに聞かないの?」「うん」「あなたに治す気があるの?」つまりまずい皮肉をいってしまふ。「水仕事をするなって……」「洗剤のこと聞かれなかった?」「石けん使っちゃって」「清潔にしなさいっていわれなかった?」「いわれない」。

どうも頼りない。他の生徒に聞いてみても大体同じような答が返ってくる。アレルギー性皮膚炎で苦しんでいる生徒も二、三人は必ずいる(洗剤残留実験を始めた十年ほど前はクラスに一人いたかしら?)。

「みなさんがお風呂に入って石けんで顔や身体を洗って出てくると皮膚がすべすべして、いい男・いい女になったような気分になるで

しよう。なぜだと思う?」「……」「保健の授業で学んだと思うけど、表皮の角質化されたものが皮脂や皮膚についた汚れと一緒に石けんに溶けて洗い流されるからよネ。合成洗剤がやたらに多く使われているけれど、それらは主に物を洗淨するのが目的で、今のところ人間の身体を洗うのは石けんですが……」「先生。シャンプーも石けんですか?」「するどい! 表示がないのに良く知ってるわネ(『みんなの洗剤読本』読んでるナ)。生徒はニイと笑う。「今、指摘があったように市販のシャンプー剤は髪の毛を洗うもので、頭の地肌を洗うものじゃないって、消費者団体に追及された合成洗剤業者の一人が言ったそうヨ」「イヤダー」「ごまかすナヨ。先生は正確なことを教えないきあー」。

朝からねむそうな顔の男子生徒が鎌首をもたげて一過性に目を輝かせる。どつと笑いがきて教室が活気づく。「ウフフ。すみません。歯みがき剤にも合成洗剤が入っているの知ってる?」「うそオ」「本当ヨ。うそだと思ふなら実験してごらんさいナ。話は元へもどるけど、石けんもアルカリの強い洗濯石けんになると脱脂力が強いから手も荒れてガサガサになるし、皮膚が弱っている時は医者のいわれるようにお湯だけできれいに洗って化粧石けんは使わない方がいい場合もあるでしょう。香料の強い化粧石けんは皮膚炎をひどくするでしょうしネ。でも合成洗剤は、化学構造上、石けんよりもずっと脱脂力が強いから石けんのように手にやさしくないのネ。その上石けんにない浸透性もある。だから合成洗剤は皮膚の蛋白質を変性させて皮膚を肥厚させ、ガサガサにしたり、指の皮がポロポロ剥ける。また皮膚の抵抗力が低下してぶどう状球菌など(最もありふれた化膿菌)が付着すると湿疹性皮膚炎になるそうヨ」「薬だけぬっ

てたんじゃあだめなんだ」……

「先生、頭は毎日洗わないと気持ちが悪いら主婦になったら朝晩水仕事をしないではいられないのにどうするの?」「だからお母さんの手の被害は大きいよ(資料1)。きょう家に帰ったらお母さんの手をなでたりしてよく見てきて下さい。美容師や飲食店・学校・病院の給食施設で働く人々はもっと深刻よネ(資料2)。そんな人が身近にいたら手を見せてもらったり、話を聞いてみてほしい。これ宿題にしましょう」「どうしてそんなに被害がでているのに合成洗剤売るんです?」「そんなもの厚生省はなぜ許可してんだ」疑わしきもの使わず」だよネ」

「手荒れだけではすまないようですヨ。さっき合成洗剤には石けんにない浸透性があると言ったけど、皮膚から浸透したLASの多くは尿などになって体外に排泄されるでしょうが、そのために働く臓器(肝臓・腎臓・膀胱)などが影響を受けて組織が変化するという研究もある。このつぎの授業で研究者の制作した『合成洗剤の安全性』や『水と魚と人』の映画を見てもらうから、その中でどんな問題点があるか注意して見て下さい」

「さて、今、みんなが疑問に思っていることについて、つぎの三時間続きの授業で取り組んでみない?」といったみて、進路指導の始まる忙しい三年生ともなれば、そうやすやすとは乗ってこないのが普通である。やああって、ひょうきん族の一人が「おいしいもん食いたいけど、まあいいでしょう」の発言に、どつときた笑いが了解のサインとなる。

快い了解が得られなければ、生徒の生活状況など考えて一度でも二度でも生徒にアタックするまで。「学ぶ」のは生徒なのだから教

合成洗剤による
手あれ
皮膚科患者の
三〇・六五%

[illegible]

ワースト3

洗剂

クレス

手袋

30 (東京新聞) 8
／＼ コピ



	A B S濃度 (ppm)		1日の排泄量 (mg)	
	調理師(23人)	保健所職員(15人)	調 理 師	保健所職員
最 低	0.3	0.7	0.3	0.7
最 高	8.1	2.1	13.0	3.2
平 均	4.3	1.3		

生徒の自由研究

(38)

時間の終わりに私にも見せて下さい」。

各班とも次第に声高に賑やかになっていく。

次に生徒たちが取り組んだ自由実験の一部を紹介しよう。

(1) シャンプー剤の残留テスト

家事労働に参加することの少ない最近の生徒に最も身近な洗剤は、頭髪を洗うシャンプー剤である。シャンプー剤にはやりがあるらしく、昨年度は「恋コロ」がどのクラスもトップだった。C Mの女の子のようにサラッとゆれる髪にあこがれ、冬でも毎日洗う生徒が多い。中には学校に遅刻しても毎朝シャンプーとドライヤーをかけないと学校へ現れない生徒もいる。従ってシャンプー剤をテーマにする班が多い。面倒くさがり屋の彼らが各自のすすぎ水を幾つかの小瓶に入れて持ってくる。中には学校の近くの銭湯にくり出す班もある。

(1) シャンプーの残留テスト(飛田、坂本、高橋)

シャンプー名 ゆすぎ 回数				PH	M.B法 青色 反応	残留	シャンプー名 ゆすぎ 回数				PH	M.B法 青色 反応	残留	
恋 コロ	2回	5.6	卅	あり	メリ ット	2回	5.8	卅	あり	エ フ セン シ ヤ ル	2回	6.0	卅	あり
	3回	5.8	卅	あり		3回	5.8	卅	あり		3回	6.0	+	あり
	6回	6.0	卅	あり		6回	6.0	卅	あり		6回	6.0	+	あり
エ メ ロ ン	2回	5.8	+	あり	エ フ セン シ ヤ ル	2回	6.0	卅	あり	エ フ セン シ ヤ ル	2回	6.0	卅	あり
	3回	5.8	+	あり		3回	6.0	+	あり		3回	6.0	+	あり
	6回	6.0	+	あり		6回	6.0	+	あり		6回	6.0	+	あり

1回は洗面器1杯。普段は3回ゆすぐ。酒井、益子、の実験によればシャワーでは2分で残留、3分てようやく0になった。普段は30秒位。

ど 恋コロとエメロンは、多かれ少



(2) 洗剤使用後、手に洗剤が残るか

(2) 「洗剤使用後の皮膚への残留」(伊藤、岸田、三田、高山、谷唄)

〈実験方法〉 洗剤を手につけ、自分が落ちたと思うところまで流水で洗い、その後50mlの純水で洗流し、その液を試験液とする。

使用洗剤名	PH	MB法による クロロホルム層青色	LAS, AS などの残留	商 品 名
純 水	7	—	無	
台所用石けん	5.8	—	無	200番太陽油脂
台所用高級アルコール	5.5	卅	有	生協 Coop
台所用粉石けん	6.2	—	無	
シャンプー	5.6	卅	有	エメロンシャンプー
シャンプー	5.4	卅	有	Coopオイルシャンプー
洗顔クリームソープ	5.4	—	無	カネボーシルクレディ
+	5.6	—	無	花王ピオン洗顔クリーム
ボディクリーム洗剤	5.3	卅	有	資 生 堂 ？

手を良く水で洗ったつもりなのに、合成洗剤のAES、ASなど残留が多いのに驚く。手荒れなど起こすはずだ。皮膚から浸透したLAS、AS、AESなどは身体に入ってしまうのだろうか。

(3) 繊維別すすぎ回数による残留（下田中、大沼、高橋、矢部）

洗濯物の種類	テスト項目	実験前すすぎ回数	+ 2 回すすぎ後	+ 5 回すすぎ後	+ 7 回すすぎ後	観察
綿	P H	5.8	6.0	6.2	6.2	綿のように、吸水性の高いものほど、LASなどの残留も多い。
	MB法青色残留	有	有	有	有	
	残留	有	有	有	有	
ナイロン	P H	5.4	5.8	6.0	6.0	
	青色	有	有	有	有	
	残留	有	有	有	有	
アクリル	P H	5.6	6.0	6.0	6.2	
ナイロン 混紡	青色	有	有	有	有	
	残留	有	有	有	有	

（使用洗剤 全濃度チェアー）

肌着、運動着、Tシャツなどは吸水性の高い綿布が良いが合成洗剤の残留が多い。汗でぬれてLASなどが溶出し、皮膚から浸透するのではない。

また、おむつがぬれるとLASが浸出して赤ちゃんの弱い膚がかぶれたり、膚から浸透したりするのではない。

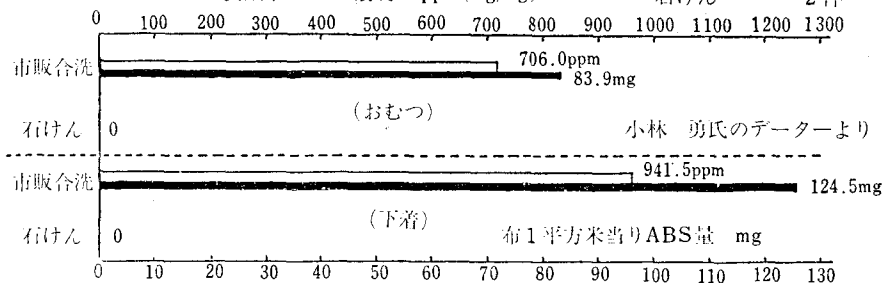
(3) 繊維別すすぎ回数による残留テスト
よくすすげば合成洗剤は残らないのではない。どの位すすげば良いかという考えから取り組む。

衣類に残留するABS（1974年11月）

おむつ 15件 下着 16件

使用洗剤：市販合成洗剤 13件

石けん 2件

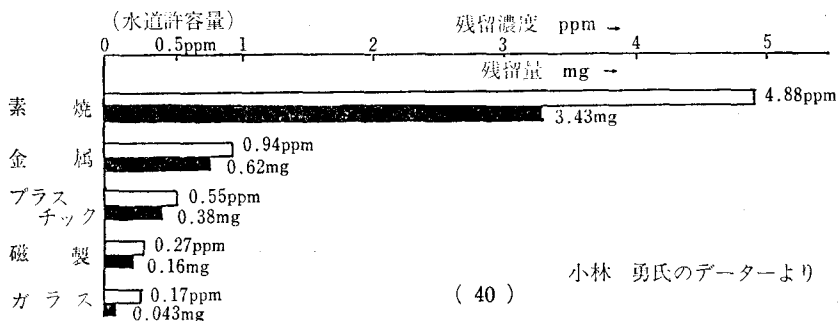


(4) 食器の種類別残留（矢部、山口、山崎、鈴木、星）

各家庭で洗った日常食器を持ち寄ってテストする。

食器の種類	青色	残留	使用洗剤	食器の種類	青色	残留	使用洗剤
純水	-	無	/	スプーン(金属)	+	有	チェリーナ
コップ(ガラス)	+	有	ママレモン	フォーク(金)	+	有	ママレモン
皿(プラスチック)	+	有	ママレモン	おわん(ペクライト)	+	有	ママレモン
はし(金)	+	有	チェリーナ	茶碗(磁器)	+	有	チェリーナ
				コーヒーカップ(金)	+	有	ママレモン

食器材質別平均ABS残留濃度及び量



(4) 各家庭で洗った食器の洗剤残留濃度は水道水のLAS残留濃度は0.5ppm以下と規定されている。自分たちの実験結果と比較してみたい男

小林 勇氏のデータより

(5) 歯みがき剤の残留テスト(田村、中川、平井、茂手木)

はみがき剤 ゆすぎ回 数	PH	M.B法 青色 反応	残留	はみがき剤 ゆすぎ回 数	PH	M.B法 青色 反応	残留		
デンター ライオン	5回目	7.0	+++	あり	ザクト ライオン	5回目	7.0	+	あり
	10回目	7.0	+	あり		10回目	7.0	+	あり
リズム はみがき	5回目	8.0	+	あり	アクア フレッシュ	5回目	6.0	+++	あり
	10回目	6.0	-	なし		10回目	6.0	+	なし

ゆすぎ1回36ml位。コップ1杯(5回)。普段は3~5回ゆすぐ。原田たちの実験によれば、30回ゆすいでやっと残留反応が出なくなったという報告もある。

台所用合成洗剤の使用規制は、0.1%以下にうすめて使うようになっています。しかし、歯みがきはこの10倍以上濃厚なものを口に入れることになるそうですが、大丈夫なのですか。

(6) 柔軟剤の吸水実験

(林、佐藤教、三須、曾根、中島ユ、菅原)

ガーゼのハンカチを利用の高いハミング、ソフランSを使って洗い風乾したものに3mlのインクを落した。

	合成洗剤 ハミング	合成洗剤 ソフラン	合成洗剤 のみ	石けん のみ
布にし み込む 時間	21分14秒	30分でまだ しみ込まず 0.85ml布の 表面に残る	21秒	21秒

柔軟剤は風合がやわらかになってよいが、吸水性が悪く汗、尿を吸わないので、下着、赤ちゃんのおむつには使わない方がよいことがわかった。なお柔軟剤に含まれる陽イオン系は界面活性剤の中でも毒性が強いという資料もあるがどうか。

- ①安全性の高
い粉せっけん
や台所洗剤な
ど買いたくて
も市販されて
いないという
声があるが現
状はどうか。
- ②洗濯用粉
末・液体洗
剤・A店は
15種類中純
粉石けんは
2種類。B

生徒が突然ツバを飛ばして話し出した。「俺サ。飲食店でバイトしてるけどヨ、ひどいぞ。合成洗剤入れてブクブクにしようヨ、その中へ食器ボンボンつけてサ、水道の水じゃーと流すだけだぜ。洗わないもん。ヤバイヨ」

(5) 歯みがき剤の残留テスト
ぐじゅぐじゅプイ。多い班は五、六人真剣な顔してやっている。反応がなかなかなくなるので大さわぎである。

(6) 柔軟剤の吸水実験
家庭一般の教科書に「乳幼児の衣類やはだの弱いひとの下着などには、用いないほうがよい」(実教)との記述がある。この班の生徒はなぜ「用いないほうがよい」のか疑問を持ってこの実験に取り組んだのである。

合は、一般にすぎは簡単でもよいが、せっけんを用いたときは、じゅうぶんすすぐ」とある。「なぜ合成洗剤を使った場合、すぎは簡単でよいのか」実験した生徒たちの間では大いに問題になっていた。

(7) 市場調査の報告
学校の近くに大きなスーパーが二つある。授業中、外出許可証を持って、あらかじめ調査事項、質問することを話し合って五、六人の班員が市場調査に出かける。お天気のよい日など友達と一緒に大変楽しそう。

生徒の報告レポートより

店は16種類中3種類。両店とも複合石けんが1種類置かれていた。以上のようにA・B店とも売場面積はほとんど合成洗剤で占められている。

⑥ 台所用洗剤―A店5種類、B店8種類置いているが石けんは零。これでは消費者の「選ぶ権利は保障」されない。

⑦ 売り場主任への質問

⑧ 「なぜ安全性の高い石けん類をもっと売り場に置かないのか」A店「洗剤を置くスペースがせまいので」B店「本社から商品の種類・量が決められているので支店の自由にならない」

⑨ 「どんな商品をすすめているのか」B店「ブランド商品、お徳用サイズ、無リン洗剤」

⑩ 「一番売れている商品は？」A・B店とも「お徳用サイズ」（ほんとに徳用なのか）

⑪ 「粉石けんは売れているか」A店「特別の方」B店「変わっている人」が買っています（報告の時、生徒、大憤慨）

⑫ 有りん無りんの売れ行きは半々。無りんも河・湖の富栄養化に影響がないだけで人体・環境に対する影響は有りんと変わらないことを売っている人も知らない。

⑬ 「合成洗剤の人体に対する影響を消費者は知っていると思うか」B店「Yes」夏でもゴム手袋が売れているので手荒れについては知っていると思う（認識不足）

⑭ 「消費者はわかっているのになぜ使うのでしょうか」「安くて汚れが落ちるものが他にないからでしょう」（粉せっけんは、高値で汚れが落ちないのだろうか）

昨年、ちょうど授業で洗剤問題を取り上げている時に神奈川県

自治体から洗剤対策推進方針の素案が提起された。各班の自由研究の報告交流が終わったところで市民自治の話をし、県民の立場から県行政の素案について意見を出そうと提案した。以下は生徒の意見を集約したものである。

(1) 生徒が素案を評価した点

① 県民の健康と自然環境の保護を考えている

② 純石けんだけを、はっきりと石けんとした

③ りんと特にLASを製造・販売・使用しないようにし、石けんの使用拡大を考えている

④ 県民に洗剤に関する情報を提供する、など

(2) 素案について疑問に思うこと

① 適応範囲を洗濯・台所用洗剤に限って、なぜシャンプー・歯みがき、住宅用洗剤を対象にしないのか

② 蛍光増白剤をなぜ取り上げなかったか

③ 柔軟剤の問題を取り上げないのか

(3) 素案に対する生徒の提案

(市場調査にもとづいて)

① 「無りん」のように「石けん」「LASを含まず」のように明確な表示を付けさせ、消費者が選び易いようにして下さい。

私たちが市場調査したところ、大きいスーパーには、洗濯用、台所用の石けんが置いてあった。しかし、LASを含む合成洗剤が大きな売場スペースを占め、石けんは、店の人に聞かなければ、どこにあるのか、どれなのか、わかりませんでした。表示を大きく、はっきり付けさせるべきです。

② 合成洗剤について、身近で学ぶ機会を、沢山つくって下さい。

あるスーパーの人は、夏でもゴム手袋の売れ行きが下らないこと

を根拠に消費者は、合成洗剤の害を知って買っているのだといっている。しかし、私たちの学習体験から消費者が問題点について充分知っているとは思えない。大量宣伝の中で合成洗剤の「便利さ」「安価」につられて買わされているのが現状です。便利さ安価に勝つのは大変なことです。i 映画、テレビなどを使い、ii 学校で実験などを入れて洗剤の問題点を教える。iii 町ごとに学習会をもって安全な洗剤を選び、洗うことについて考え直すようにすべきです。なお、素案について、一般県民参加で検討されていないのは、県民が関心をもつよい機会だったのに残念です。

③ CM について正しい商品知識を伝えるように厳しく規制して下さい。

売るために良いことづくめの誇大宣伝ではなく「汚れが落ちて白くなるのではなく染めて白くする」「蛍光剤入の洗濯洗剤で、ふきんやガーゼを洗ってはいけない」など問題点、注意を CM に入れたり、パッケージに大きく書かせたりすべきです。

④ 石けん使用、拡大をはかるには、臭、汚れ落ちの悪さなど、品質向上も研究させてほしい。

⑤ 「業界への指導」「調査研究」というのは日本全体に関係するので国にも強い姿勢で要請して下さい。

このように生徒がまとめた意見は、県知事に送る約束になっていたが果たせなかった。幸い？ 合成洗剤業界から LAS の規制に強い反対があつて、県会は素案に対し「泡立ち」中であるとか、今年こそ生徒と相談して生徒自身に考えて送ってもらおうと思つてゐる。

追記

(1) 夏休み全員参加のグループによる自由研究テーマは、約半数が洗剤に関するテーマになる。水道局の浄水場を訪問したり、わが家の排水が流れ込む川・海をたどり、水の調査、市・消費者センター、近所の主婦を対象に聞き取り調査をしたり、男子生徒が母親たちの石けん使用への抵抗を排除するために洗淨実習をやったり、皿が洗つてピカッと光るのはあやしいと疑ったり、幼稚であっても教えられることが多い。

(2) 実生活を変える力になっているか頼りないが、卒業後の父母懇談会で、「洗剤では子どもに突つかれて大変だった」と母親ににらまれ一しきり笑い話になった。

(3) 生徒に好評なこの授業づくりも、学校のある町の起きよう会（消費者）のお母さんたちが合成洗剤研究会に私を引っ張り出し、ずつと援助して下さっていること。研究会の小林・半谷先生など研究者の方々やお母さん方の援助のおかげを感謝している。

(4) 洗淨は水の洗淨力が中心であること。洗淨における石けんも含めて洗剤の補助的位置を明確にし、CM の洗淨Ⅱ洗剤のまがった影響に対抗しているところを報告できなかったのが残念である。

身近な問題から地域・自然環境問題へ、被害者意識から加害者にもされていることへの認識を深め学べるよう、具体的手だてを創っていたことがこのテーマ授業の今後の課題である。

その意味では（私は体力の限界で参加できないでいるが）、研究者・消費者・教師で作られている『水と食からの出発』、くらしと環境を考える会の市民読本に期待している。

（神奈川県立相原高等学校）

地域の自立をめざして

佐藤 慶子

地方の時代と言われだして大分たつが、いったい地方の時代とはどんな時代、どんな社会を指すのか必ずしも明らかではない。私の呑み込みの悪さもあるが、行政や産業（企業側）の言うところの開発や展開は、地方と都市とがどのように支え合って発展するよう考えているのか、地方の主体性をどのように尊重しようとしているのか、イメージが迫ってこない。ひが目かも知れないが、高度経済成長も終わり、都市へ参入してくる人々に生活や福祉を保障することとは困難になっているから（雇用機会は必ずしも限界でなくとも）、地方は地方で経済的自立の方策を考えて下さい、とか、都市では労働力や土地などの資源に限界があるから、地方でそれを引き受けて下さい、とか、いわば都市側の矛盾のハケ口としてのみ地方を考えているのではないかと思われて仕方ないのである。

◇ 地域経済と後継者

私はおしんで著名になった（？）山形へ大学教師として赴任して三年目を迎えるが、都市と地方との経済力の格差は想像以上に大きなものであった。

たとえば大学生の生活を見てみよう。山形は地域の基幹的な産業が農業であるが、ここでも農業収入だけで農家経営を再生産してゆくことが困難になっており、できれば息子はサラリーマンにして兼業化したいというのが多くの親の願いである。その意味で、一握りのエリートを除けば、大学生は一流企業へ入社するよりは、地域の後継者になることが期待されている存在である。しかし、農家世帯が担う子どもは高等教育費の負担は重く、米作による一ヘクタールの純益約六十万円からすれば、地方大学へ子どもを進学させてさえない年間二ヘクタール近い米の純益を振り向けてやることになる。

このような事情を背景に大学への進学率は二割、全国平均の約半分にとどまっており、今後も飛躍的に上昇するとは考えられない。しかし、地域ではこの大卒者さえ全部吸収できる雇用機会をもたない。

そうして、一方県外へ雇用機会を求めようとする高校卒業生は、単純労働の機械化、低成長による企業の採用縮小によって、次第に就職難に陥ってきている。

つまり、都市での労働力の需要は、新規労働力に対しては知的・技術的能力を、それ以外の単純・安価な労働力は女性を中心とする中年労働力に向かいつつあり、次第に地方からの労働力移動に戸戸を閉ざしつつあると言えるのである。

その点で、労働力需要についてこそ、「地方の時代」は逆に都市から強制されつつあるように思われる。だが、私が問いたいのはそればかりではない。

◇地域のくらし

読者の方々は地方の町を歩かれると、どこもミニ東京、ミニ銀座があり、どこにもスーパーマーケットがあり、似たような商品、画一的な消費生活があると思われるであろう。そして、地方の人たちさえ、今は便利になり都会風であることが、何が生活革新の指標だと錯覚しているようである。

私も恥ずかしながら、近所に八時まで営業しているスーパーマーケットがあり、何て便利なんだろうと感心したものである。

しかし、町の中心街さえ七時に閉店する市で、八時まで営業するのは、八時まで開いてなければ買ひもの出来ない農家の主婦があり、共働きの多きなのだとやがてわかってきた。

地域の世話役が調整する休耕の割当ての前では、農家は米以外にキュウリ、キク、ホウレンソウと作目を殖やさざるを得ない。そうでなければ夫のみか主婦も賃仕事に出る。そのように労働が重複すれば、主婦は年中忙しく、特に夏の農繁期には、朝は四時からキュウリをもち、夕方のキュウリを箱づめし終わるのは夜の十一時にもなる。農繁期の労働は十一時間、多い人は十六時間にも及び、その間、本人の健康管理はもちろん、子どもや老人との人間関係が空疎になる、と徳永キク米沢短大教授は報告している。

都会と同じようなスーパーマーケットや商品、しかし、その裏側にある地域の人びとの労働や生活は、都市とはまた違った意味で矛

盾をかかえている。

◇根の深い婦人問題

忙しい夏から秋を終えると、地域は冬の一休みに入る。漬物を出し、お茶を入れ、人々は団らんし、骨休めをする。身づくろいした女性たちが夏とは違って美しく見える頃雪がやってくる。とけては積るこの雪は、老人を家々に閉じ込める。後継者の同居しない老人には、雪のかたづけや雪降ろしはどんな負担であろうかと思われる。足の弱った老人には、半年間の運動不足は痛手であろう。

春のある日、市役所の近くでバスを降りると二人の老人が前を歩いていて。一人は足をひきずり、一人は腰を丸めてはうように歩いてゆく。愚かにも私は、腰の曲がるほど働くのはおばあさんばかりと思っていたのに、どちらも老農夫であった。厳しい風土の中で足や腰を痛めるほどに働いて作った食糧を、都市で食べた人々は、この老農夫の身体の痛みを知ることがあるだろうか、思わず胸が熱くなった。

バスの中では、いろいろな話が聞こえてくる。三世代同居の家では、まだまだ老人が経済権を握っていることも少なくない。お嫁さんたちは、子どもが中学生ともなると、自分のもらっている小遣いだけでは、子どものものも十分買ひ与えられないと嘆く。夫も妻も五十歳近くまで小遣いだけもらって、舅姑に給料を全部あずける生活――、都会の女性には信じられない家計管理がまだまだ残されている。東北の中でも最も共働きが多く、賃金水準が低く、最低賃金を知らない人も少なくない地域。気の遠くなるような婦人問題がある。

◇限界の中から

結局のところ、技術革新や高度経済成長がこの東北の農業地帯にもたらしたものは何であつたらうか。確かに農薬や農業機械の導入、農業団地の整備などは、米作の安定性に貢献している。しかし、機械貧乏とよばれる農業機械の負担の大きさは、一般の農家の経済性を上昇させるものではなかった。労働が軽減された、兼業しやすくなった、出稼ぎに出やすくなったということはある。しかし、この間他産業の技術革新、生産性の上昇からみればささやかなものであり、同じ農業地帯でも年間を通じて農業生産の可能な地域とは大きな収益の差を生じてしまっている。米作の就農日数が減るに従つて、機械の購入資金が巨額になるに従つて、世間なみの生活水準を実施するに従つて、ますます多角経営や出稼ぎをせざるを得ないという構造ができ上がる。

だが、このような限界的な状況の中でこそ、また新たな試みが始まる。

◇三つの試み

たとえば、私が最近知ったいくつかの例を見てみよう。

ひとつは、置賜地区（県南）を中心とする有機農業の試みである。高島町で有機農業グループを組織している星寛治氏は、山形の雪の多さこそ、土づくりの貴重な条件であることに気づく。雪は降っても土を一定の温度に保ち凍結させない。そこでは微生物が適切に保存・抑制され、農薬を使わない有機農業のひとつの条件を成立させる。このことに着目して、農家のあり方を機械化・大規模化・

単作化ではなく、家族総ばたらきの有畜複合農業による自給自足に転換し、食糧を自給し、余剰を消費者グループに提供する方式をみだしている。経済的には大きな困難がつきまとうが、食物が人間の健康を守るためのものでありたいという願いは感銘を受ける。

また、流通部門でも、地域の限界を転化させようという試みがある。鶴岡生協は灯油の共同購入を始め、地域に根づいた生協活動を行っているが、地域にある零細な小生産者が廃業してゆくのを惜しみ、これを生協組織で流通することを試みている。たとえば、庄内麴は伝統的な家内工業で、長らく京都の料理屋などへ出荷されていたが、近代化に遅れジリ貧を続けていた。これを生協が引受け、全国を生協商品として送り出すことに成功、地域の産業を下支えする機能を果たす実践を行っている。代替産業のない地域の伝統産業は、いわば地域全体の死活問題であり、その場合流通産業がきわめて重要な役割にあることを示すものである。

身近な生活改善運動としては、農家の五十万円自給運動による食生活の見なおしがある。つまり、土地を持つ農家さえも、際限なく食品を購入するようになり、しかもその商品の安全性には多様な問題が生じている。せめて年間五十万円ぐらいは食品を自給して食生活の安全を見なおしてゆこうというわけである。そこでは、かつて家庭でつくられていた郷土のさまざまな料理や食品があり、それを掘りおこしてゆく過程は、老人と若い世代が経験や技能を交流させてゆく意義も持っているというのが、この活動のもうひとつの側面である。都市のように女性の労働がすぐ市場化しない地域では、手づくりの持つ意義はなお重要なものであることを示唆している。

◇地域に生きる主体性を

これらはいずれも経済・家計の問題であるとともに文化の問題である。

産業全体が激しい技術革新を展開している中で、生産性の低い食糧生産分野がこの流れに準ずるとすれば、食物は次第に安全性を犯されざるを得ない。地域の特性を生かし、労働のあり方を問い直し、生活を見直してゆくことは、実は大きな文化的挑戦でもある。そして、何よりも地域を愛し、他地域との共生を志す視野と意識に裏打ちされている。

＊　　＊

「新しい家庭科を創るために」

——中学校では——の

榎田真澄さん

桜。数百メートルの並木、隣接の競技場の土手すべて桜。満開の桜。榎田さんがこの日を選んで下さったわけがわかりました。

子供が変わった原因——

「テレビによる情報の多さ、親もふれあいをつくりながら育てるのがなくテレビにおまかせが多いんじゃないかしら。お母さん方も中学へ行ったらパートに出ようと考えていて、パートと離してしまおう。離し方が子供に合っていないければ問題行動という形であらわ

学校教育は、長らく卒業証書が雇用機会を得る条件であった。その場合、教師はカリキュラムを消化すれば役割を全うできたかも知れない。

しかし、低成長化、情報化、高齢化、国際化などの厳しい状況変化の中で、地域の中で主体的に生きてゆく子どもたちを育ててゆくためには、何よりも教師は敏感に時の流れを感じ、深く地域に下りてゆくことを始めなければならないのではなからうか。抽象的に陥りやすい大学も、そのアンテナだけは高く立たいものと思うのである。

(山形大学)

れますからね。中学生時代はそういう危険を

伴いながら成長する時期であることを知って、親は子供の心を掴んでいて下さいってお願いしたいですね。まず家族の団欒の時間をつくってほしいです、テレビを消して。

私は仕事を手離したくなかったから、保育園も使いながらお手伝いさんをお願いしていました。お給料の半分以上はそちらにと覚悟してね」

成人近い上の方が赤ちゃんの時からずっと、月曜から金曜まで泊り込みで、下の方で中二になった今では家族同様。

「つれあいは父母会にも行きますし、家庭訪問も受けます」

中学校の家庭科の先生方がもう少しWeのほ

うに向いて下さるといいのですが……。

「荒れている学校では、教科指導どころかほとんどが生活指導、その対応に夜の父母会。疲れきってしまうんですね。それで退職する先生もおりますよ。私なんか転勤がこわいですよ。教科をしつかりやろうと思っても、二の次、三の次になる場合だってあるでしょう」。一年生担任。クラブはテニス。

「スポーツが一番いいですね。全部捨ててストレス解消。ハッハッハッ」。さわやかな汗を流した時と同じさわやかな笑い！

それにしてもこんなに自然にとりかこまれた学校を「四中」と呼ぶだけでいいのかしら。もっと個性的な名前前で呼びたいですね、私は。

(中野敬子)

視 点

《まなび》の文化の発想を》

長谷川 孝



まったく見当ちがいの展開だった

戦後教育史が、日教組と文部省という

《中央》の対立の構造として描かれたのは。

いや、こうしたとらえ方こそが

もののみごとに照らし出しているのか

《教育革命》とさえいわれた

あの再出発の初心を

紙クズのように廃棄してきた

戦後教育史の流れを。

《初心》を担うものたちが《中央》にしか

じつは、いなかったのが、その出発だった

自治（分権）と自由という《初心》は

良心的な《中央》の官僚に担われた。

いつしか官僚的良心が責任を負いたがり

日教組との対立をエネルギーにして

《初心》の棚ざらしを完成させていった。

あの再出発のとき、《初心》は

その自治と自由にふさわしい担い手を

ついに得られなかったのだった。

ようやく、ふさわしい担い手が

育ちはじめたとき、

「教育」は社会を覆い、子たちをむさぼり

《初心》そのものの矛盾や欠如さえも

浮きぼりにする状況に至っていた。

*

「教える」という発想からの

自治と自由とは、しよせん

ほんものの主体を育てられはしない。

「教える」ための自治と自由は

しよせん《中央》が分かち与えるものだ。

自治と自由とは、ほんらい

《まなぶ》のためにこそ

《まなび》のなかにこそ

——ある。あるはずのもの。

「教育」のために「教える」なんてこと

ふつうの気持ちじゃできないんじゃないの？

自信をもって「教える」なんて

できるわけもないことなんだよね

「解^わかりなさい」なんて《まなぶ》人に

シラフで言えるはずもない

ふつうの人間が「教育」のために、と。

だって——テレくさいじゃないの

心細いもの 不安だもの

ワタシ、オシエテ、イイノ？

「教える」ほどのものを持っていたのかな

こんなこと「教えて」いいのかな。

だからいつも逃げ腰で言い訳をする私

——聞いてられなかったら

出ていってもいいよ

大あくびしてもいいよ

つまんねエって叫んでもいいんだよ

——ごめんね、話を聞かせちゃって

三年生の君にも五年生のあなたにも

すぐくキョーシユクしています。

私がけんめいに考えていることを、ただだ

だ

けんめいに話すことができるだけ。

*

『異文化としての子ども』*という本がある

すばらしい本だけど、でも私は、ふと思う

◎ほんとに、子どもが「異文化」なのか？
じつは、おとなのほうこそが

文化をつくり出したことで

（政治や経済や社会制度も、学問や芸術や武

道、労働や生活や遊びも、どれも文化だ）

自ずから「異」になった存在なのではないか

◎おそらく、おとなこそが「異文化」*なのだ。

おとなは、子どもという「異文化」に

不安をもつのではなく、じつは

自分のなかの「異文化」にたいして

自分のなかの「異」なる部分にたいして

不安をもつではあるまいか。

だって自分のなかに「異」があり

自分が「異」なる存在だと

けっして認めたくはないのだから。

子どもを「異文化」としておいたほうが

安心だし、安易だし、だれもが認めるもの

子どもって、じゃまなんだよね

うるさいし、やっかいだし。

狂気、非常識、変人、精神異常……

おとなたちは、「異」なるものへの

おそれを抱いている

自分のなかの「異」と

つきあいきれない不安があるのだ。

「自然」にたいして「異」なる存在となり
文化は「異」であることを「常識」と化す。
おとなは「異」なる存在をつくりだし
「常」に従わせてみることで
己の「異」への不安を押さえこむ。
「教育」——その役割を果たすもの
おとながつくり出した「常」の体系
子どもにおしつけられた異文化の秩序
「常」を押しつける「異」化の作用。
——オアメモ、ハヤク「異」ニナレヨ
常識になじむことが「異」になること
狂気をおそれることが「異」なのさ
「異」こそが正常なのだよ。

「教育」とは、それゆえに

子どものいのちにとつての

非自然的な過程としてある。

「教育」をする教師とは、だから

「異文化からの化かし人」なのです。

*

「教育」という機能^{はたらき}が、まだ

生活や労働や遊びのなかに未分化の

不可分の部分としてあったとき。

人々は、ふつうの

おじさん、おばさん、姉さん、兄さん

として、なにげなく

「おしえて」いたのにちがいない。

「教える」人でも「教える」ためでもなく

ともに暮らし働き遊ぶ「仲間」として。

いつの間にか世の中には

「教え」たがる人たちが

「教えられ」たがる人たちが

なんと多くなってしまったことか。

またぞろ「中央」で、「教える」発想で

「教育」いじりを始めた

古い容器^{いれぶ}に新しい呪文をぬりたくろうと。

「中央」でやることがまちがいのだから

いじればいじるほど「初心」は死んでいく。

「教える」という発想には「中央」が似合う

「教育する」という発想は支配の発想

「教えたがる」人たちのご都合主義

わたし教える人・あなた教わる人

役割分業のなかのお山の大将たち。

「初心」を醸すための

新しい容器を創りたい

どうせ「異」になってしまった

この人間の世のために、せめて

ともに「まなび」とともに「そだつ」

「まなび」の文化の発想を。

* 本田和子著、紀伊国屋書店、*「異」としての文化をもつ存在（教育評論家）

一現場から一

「直面する」その1

児玉 すみ子

counsellingの応用counsellingの応用counsellingの応用counsellingの応用counsellingの応用

Tの場合

空手部に所属し、図体もでかいTは、いつも精力^{ちから}をもてあましていて、かっとなると、すぐ手が出てしまう、いわば、要注意の生徒であった。二年生の彼を担任していた時、授業を終えた数学のK先生が、血相を変えて職員室にもどって来た。二、三の言葉のやりとりの後、Tがすくっと立ち上がって、今にも先生をなぐりからんばかりになったというのである。穏和で、面倒みのよいK先生は、「僕は励ますつもりだったのに」と言う。放課後、私は、Tからじっくり話を聞いた。

「頭にきたんですよ。『君、数学は、なかなかいける、じゃないか。大学目指してがんばれ』なんておだてるから、『僕は、大学なんか行きませんよ』と言ってやったら、『普通科の生徒は、大学行かなきゃ、意味ないよ。大学、行かないんなら、工業とか商業で、技術を身につけるべきだよ』って、きめつけるんです。すごく腹が立って、『普通科入って、悪かったね』って言ってやった」。

「俺、今、ほんと、将来どうしようかつ

てすごく迷っていて、いらいらしてるんです。K先生なんか、お節介^{せうけい}してもらいたくないんだ。普通科に入ったから、大学行かなきゃならないって法律、ないでしょ！」

彼は、三時間近くも、自分の心の内のもやもやしたものを吐いていった。しかし、K先生への怒りをぶちまけていたのは、最初の20分程度で、K先生の言葉が適切なものでなかったことが、Tと私の間で確認されると、すっかり怒りは納まって、後は、進路^{しんろ}に関する自分自身の千々に乱れる思い、家族の想いとの相剋、社会通念への抗がい、などがとめどもなく出てきた。

私は、その混乱の交通整理をしながら、Tが、今、自分の大切な人生を選びとっていく困難な過程に在ること、苦しいが、納得のいく答を出すまで、逃げずに生き抜かねばならないこと、その間、必要ならいつでも相談にのること、を伝えた。

「先生、俺、自分のことで堂々めぐりして、ちっとも整理してないから、他人の言うことにいちいち腹が立っていたんですね。K先生も、善意で言ったのかもしれないのに、それを参考意見として、俺、聴く耳もたなかったんだな」。

やがて、Tは三年生になり、私の担任ではなくなり、授業でも教えなくなり、かわりがなくなつた。

卒業式が終わり、新年度が始まるうとしていた頃、Tが、友達と一緒に我が家を訪れた。

今、スナックレストランの見習いコックをしているという。「サラダの盛りつけは、食欲をそそるような工夫がある」「スパゲティ

はバターと、塩・コショウで味つけするのが最高」とか講釈しながら、料理してくれる。その間、Tは、次のように語ったのである。

「俺は勉強が嫌いで、ちっともやらないくせに、皆と同じように大学行つてやる、と思つてたんです。どの学部なんてお構いなしに俺でも受かりそうところ、四つほど探して受けたんです。大学で四年間遊べる、好きな軽音やる時間もたっぷりある、それだけが目的だったんです。

将来、何やるかは、その四年間のうち、ぼちぼち決めよと思つて、後回しにし、それでも、レストランのウェイターのアルバイトだけは、まじめに続けて、ともかく受験日を迎えました。立て続けに三つ落ちて、最後の四つ目、はるばる千葉まで受験に行く電車の中で、ふと、考えたんです。(俺、何しに行くんだらう) っつて。(親に金出して貰つて、四年間も遊ぶために、毎日、二時間も、この電車にゆられて行くのか) っつて。でも、(まあ、いいや、受かりや儲けもの) っつて割り切った。でも、何一つろくに答えられない試験問題を前にして、又、考えた。(今度もだめた。落ちたらどうする)、いや、まぐれでということも捨て切れず、答は、先延ばしにした。不合格の通知を受け取った時です。はつきりと決断できたのは。

(よし、働こう。働いて、自立して、自分の好きな軽音をやらう、好きでもない勉強して親に金を出させるより、ずっとすつきりしてやるや)。そう思つたら、ほんとに、すつきりしたんです。何だか、長い間身につけていたしこりが、さっぱり取れた思いがしたんです。

「親父に決意を話したら、仏壇から何か持つて来て、俺に渡すんです。『お前の大学の費用にと貯めてきた貯金通帳だ。お前が本当に

必要な時、使え』 っつて。俺、ほろりとしちゃいましたよ。今まで散々悪態ついて、暴れてきましたからね。親つてありがたいものだなんで、古風に思っちゃいましたよ」。

その貯金通帳に、今は、自分が、毎月三万円ずつ、給料から貯金しているという。二十五歳になったら、自分の店が持てるよう頑張りたいのだと言う。「レストランで働くと、食費はただですからね。アパート借りて、親から独立して暮らしていますが、ちゃんとやっていたいけるんです」。

「たくましくなったのね。立派ね」。私は、ただもう、感嘆して、見事な手さばきで、フライパンを、ぽーん、ぽーんと回して、スパゲティをいためているTを、見守るのであった。

「T君、いつの間に、そんなにしつかりしてきたのか、自分でわかる?」

私は、興味をもって、そう尋ねた。

「いや、高校三年間のうちにですよ。俺、確かに、いろいろやって暴れたけれど、その度に何か考えたもの。あの高校、生徒にもの考えさせてくれる学校だったものね!」。

私は、こうして、(又一つ、かけがえのないものを、生徒から実地に学び得た) と、おいしいスパゲティを味わいながら、しみじみと感じていた。

風の便りによると、Tは、今、勤めていた店を任せられ、店長になったという。二十三歳である。(つづく)

秘 密

武田 秀夫



私はこのごろ、国語教室をはじめたばかりのころのことをよく思い出します。新しいなにかを始めようとしているのだという気分と不安が交錯して、心が微熱に冒されたようだったあの夏の初めの日々。そこへ思いが立ち戻りたがるのはどういうわけなのか。

このところ重症の花粉症にやられて、来る日も来る日も霞のかかったような頭をもてあまし散漫に過ごしているために、心が現在への関心を離れて過去へと浮遊しがちなのか。それとも、二年目にしてどうにか国語教室を生活の基盤とする見通しが立った安心から、いろいろなつらくもあったあのころをなつかしむ余裕が出てきたのか。あるいはまた、早くも今の生活に倦んだとするものが私の心の奥所^{おくところ}に芽生えかけているのか。とにかくある種の停滞が私の生活を訪れている。

こういうときはじたばたしないですとやりすごすにかぎると永年の経験が私に教えます。それにまた、こうした停滞には一種甘味な味わいがないわけではありません。

そんなこのごろの私の気分にも最も適うひとつの情景が、セピア色の写真よろしく浮かんできます。

あのころ、私は、夕暮になると、奥多摩の山々に沈む夏の夕日を教室の窓からながめるのを日課としていました。やがて火照ったような西の空の色もさめかけるところ、コロコロとよく太った小柄なＪさんが白い大きな犬を引いて通りかかります。教室の生徒になったばかりの五年生のＪさんは「こんばんわ」と私に声をかけ、それから「玲ちゃん、遊ぼう」と同級生の私の娘を呼び出し、しばらく家の前の空き地で立ち話をしています。

前へ行こうと綱を引く白い大きな犬。引かれまいと反り身になって娘の玲子と話をしているＪさん。それらをつつむ夏草のしげみ、夕暮の光。一幅の童画です。「Ｊさんとあのコロは全くよく似合う。ちよっとした女金時だね」と、そのあとの夕食の席で、ビールをのみながら家族とよく笑い合ったものです。

夏の夕暮の水のような光の中、草叢に白い犬を引いて立たせると絵になるＪさんも、教室の中では、はじめのうちはしつくりいきませんでした。他の生徒が朗読している間中、天井を見上げた本棚をぐるっと見回したり、いま消しゴムをコトコトいじっていたかと思うと、次にはテーブルを指でトントン叩きはじめるといった具合。一刻も身体の動いていない時がありません。私は素知らぬ顔で本に眼を落しながらも、そんなＪさんをはらはらす思いで眼の端に意識しつつ、「この子はこんな小さな部屋の中でコツコツ本を読みつづけるという、考えてみれば辛気くさい時間をこれからはたして耐えていけるのかな。おさまり切らず、はみ出してしまいたいそう

だなど不安に思ったものです。

しかし、そんな私の思いとはかわりなく、Ｊさんは、自分の読む番になると、「エート、どこだっけ」と友達に聞いてから元氣よく読みはじめます。が、それは恐れを知らぬ全く大胆な読み方で、少しぐらい間違えたって気にするどころか適当にどんどん読みすすんでいってしまいます。呆氣にとられてる私や友達を置き去りにしてどんどんどんどん先に行ってしまう。「おい、おい、Ｊさん。ちょっと待ってよ。もう少し正確に読んでよ」と私がブレーキをかけてやっと思ひついた勢い。いったいこの子はこれからどうなるのかと、Ｊさんのあつげらかんとした顔をしばし私は見守ったものです。

そんなふうだったＪさんが、結局一日も休まずに通いつづけてもう中学生になるというのですから、子どもというのはほんとうにわからないものです。

やや肥満ぎみだったＪさんは、しかしその溢れるばかりの生命力にものを言わせて、一夏で泳ぎをマスターし、かけ足も速くなり、「漢字大相撲」ではクラスで三番になったと大喜び。「お願いしまあす」と教室に入ってくるＪさんの頬はあいかわらず健康そのもの。そんなＪさんが、裏も表も全くない（子ども）の固まりみたいなＪさんが、ですから、「私にも、秘密があるんだ」とある日つぶやいたとき、私はほんとうにびっくりしてしまいました。

あれは、はじめたばかりの私の教室にＪさんたちが最初の生徒として通うようになってしばらくたった夏休みの午前のこと。佐藤さとの「誰も知らない小さな国」を読んでいるときでした。

とりもちをつくるために繭（も）の木をさがしに出かけた少年がしいん

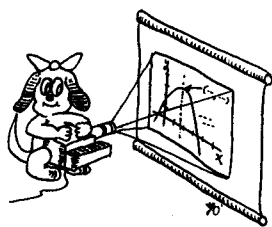
と静まりかえった杉林の先にとがった小山がかくしていた奇妙な三角形の平地を見つめます。その平地へ通ずる唯一の道は、もちろん、「どんぐりと山猫」の一郎が辿った暗いトンネルのような小川。その小川の先にひらける「誰も知らない小さな国」で独り過ごすことを覚えた少年の心の姿を、佐藤さとは次のように書きます。

「家の近くで、なかまとさわぎながら、ときどきふっと暗い木かげや、つめたいいづみの水を思い出すことがあった。そんなとき、ぼくは、むねをどきどきさせながら、なかまの顔をそっとながめた」。

ある年ごろの少年が、はじめてなにかひんやりしたものを内部に抱えこむことによって仲間からの乖離を果たすという消息、それが微妙な筆致でとらえられているように私には思われ感銘深かったのだ、Ｊさんたち五年生の女の子たちに、「あなたたちも、もうそろそろ、この少年のような氣持になったことあるでしょう」と、読んでいる途中で声がかけました。すると、Ｊさんが、ふっと、「私にも、秘密があるんだ」とつぶやいたのです。そうつぶやいたＪさんのその時みせた深い表情は、いまでも美しい宝物のように私の記憶の抽斗（くちう）に蔵（かく）ってあります。

その時を境にして、私はもうＪさんをはらはらした思いで見守るということがなくなりました。同時にまた、はじめたばかりの国語教室の可能性について抱いていた不安も消えました。大丈夫だ、やっつけていける。子どもたちのだれもが（深い表情）を秘めているのだ。おれはただ、その（深い表情）が生まれてくる子どもたちの心の奥所に、垂鉛を下ろしていけばいいのだ、そう私は思うようになったのです。

（つづく）



＊ 学習の主人公たち ＊

きんじょのこと

福井県敦賀市立西浦小学校の子供たち

でとらえています。

(高嶋みどり)

〈三年〉

男子

- 魚がたくさんとれた時もらった。
- お正月に角まつを立ててもらった。
- お寺だから法事をする用意をしてもらった。

いた。

○お年玉をたくさんもらった。

○おかずがたくさんあまったとき、きんじょの人にあげた。

女子

○水あめをもらった。

○魚がたくさんとれたときに魚をもらう。

○とれた魚を、うおいちばにもっていつてくれる。

○船をひいてあげたりしたことがある。

○あみにかかったも、や魚をはずしてあげたことがある。

○きんじょの人が、もらいものをくれるときがある。

○となりの子を遊んであげたら、おかしをくれました。

男子

○魚をもらった(魚が多くとれたとき)。

敦賀半島東側先端に位置する本校は、'61年三つの分校を統合し、西浦小・中学校として発足しました。当時は全く陸の孤島で自転車さえ通行不能のため、船便のみに頼っていました。ところが'66年日本原電KKが原子力発電所を建設するため、2車線の原電道路を完成

し、バスも日に三回運行。漁業補償もあり、いわゆる「原電成金」で、各家は増築改築新築され、船を新造し、町に土地を買って家を建て、という具合で家並がすっかり近代的になってしまいました。それまでは貧しい漁村で戸数制限も厳しく(現在も残っている)、他から移ってくるのは、お寺の住職と駐在所のおまわりさんくらいのものでした。

学年別児童生徒数は〈小学校〉一年2人、二年4人、三年4人、四年1人、五年3人、六年4人、計18人、〈中学校〉一年2人、二

○船置き場に船をあげてくれた。

○入れられないでこまっているときに、自転車を入れてくれた。

○たばこを自動はんばいきに入れるのをてっだつてあげた。

○水あめを遊んでいたらくれた。

男子

○魚がたくさん取れる時……魚をもらう。

○ぼくの所は、お寺だからおそうしきのじゅんぴをします。

○りょうしの人の手つだいをしました。あみのはこを船につみうつす時、そのはこをもつてあげました。

○しかうら（四ヶ浦）でしんせんなかにをもらったりしたら、村の人にわけてあげます。

〈四年〉

男子

○お父さんのつごうが悪いと、魚を、魚市場にやってくる。

○あみをてつだつてもらう。

○いろいろとくれる（えびや魚）。

〈五年〉

女子

私たちの近所には、やさしくていい人もいるけど、むすつとしていやな人もいます。で

もだいたいいい人ばかりです。

女子

近所の人は、魚つりに行ったときに、よくあまつた魚をくれます。近所の人でぞうりを作る人もいます。

男子

○つきあいがいい。

○おかずをくれる（あまり物）。

○子供とよくあそぶ。

○あまりおこらない。

○おそうしきにきてくれる。

○お祝をしてくれる。

〈六年〉

女子

近所の人は、みんな漁師です。でも、私のところはそうじゃないので、たくさん魚をくれます。もし、もつてきてくれたときに、私たちの守の時は、冷ぞう庫に入れておいでくれたり、とても親切です。

都会では、雪どけをしないところが多いようだけど、ここでは、みんな雪どけをしります。共同で、道路のわきの草かりとかごみひろいもしります。みんないい人です。

女子

私の家は村の真ん中にあります。だから犬がほしくてほえるし、うるさいからだめと言われます。また村の人はみんな知っています。いろんなものを貸してもらったり、貸したりしながらくらしています。時々、なぜ近所はあるんだろうと思う時もあるけれど、いざとなったら必要なものです。みんなが協力しているからこそ、平和な地域になるんだと思います。

男子

○おつき合いが多い。

○物を共同で使う。大きい、魚を入れるための冷凍庫。

○やさしい人が多い。ガラスをわった時あまり怒らなかつた。パットを作ってくれた。

○助け合っている。あみの仕事を手伝ってくれる。

女子

私は、近所の人でも、しゃべる人としやべらない人がいます。しゃべる人は、切手やがきを売っている家の人です。父や母は、よく近所の人と話していることがあります。でも、私は、話が合わないから、あまり話をしません。

雪の地方に住んで

田 直子

新潟県の南部、東頸城郡の東端にある松代町。国鉄飯山線の十日町市より約二十km上越方面へ入った標高二百六十mに及ぶ、四方を山に囲まれた盆地の町は自然に恵まれている反面、冬は年間平均積雪量が三・五mという我が国でも有数の豪雪地帯です。東京から昨年この町に初めて来た時、住宅への小路にやっとブルトーザーが入って、道路脇に二・五mもの雪の壁ができ、「きのうまであの雪の上を歩いていたのよ」と二階の窓のあたりを指さされ、新潟育ちの私もそのすごさに、まさに「北越雪譜」の世界だと驚いたものです。

雪がすっかりとけたのは五月でした。一年のうち四か月以上も雪に閉ざされた厳しい生活を送ります。三年前の五六豪雪の時には外灯が足元を照らし、電話線を股いで歩いたといひます。七月中旬まで残雪があったそう、さんざん驚かされて初めて迎えた松代のこの冬は、五六豪雪をしのぐ、聞きしに勝る厳しいものでした。三月一日には積雪四m八十八cmを記録し、三月末までに累計降雪二十一m八十八cmにもなりました。

この町の主な産業は農業です。平均斜度二十度という傾斜地を山の頂上まで耕やして、機械も入らないような棚田で米をつくってきました。四月の苗代づくりは一m以上の雪を掘りあげ、田ごしらえをします。「山の田は雪水を利用してゐるから雪が少ないと、四月に干ばつになることもあるので、この雪も米作りには必要なんだ」とお年寄りは言ひます。

農業では食べていけないこの地方は昔からの出稼ぎ地帯です。期間が長く大半は六か月（失業保険をもらうためには六か月は働かなければならない）です。一年のうち半分は男たちのいない家が多くなります。松代高校の生徒の父親の六割が冬場、出稼ぎでいなくなります。その間生徒たちは父親のかわりに屋根の雪掘り（雪おろしのこと）、雪かたづけや家の仕事を引き受けて母親を助けて働きます。近年、除雪機動力とその技術によって、町が雪のために閉ざされるといふことはなくなり、雪に対する住民の考え方は変化してきていますが、それでも家々は雪に閉ざされ、一家総出で屋根の雪掘りをします。屋根からおろした雪をかたづけするのも大変な仕

事です。だんだんおろす場所がなくなるのです。町内では日取りを決めて交通止めにして、ブルトーンザーで雪を流雪溝や空き地へ押しやり、協力しあってかたづけていきます。

六十年代の高度成長、七十年代からの減反政策により過疎化がすすみ、町から山に入ると、挙家離村が相つぎ廃家だけになった部落が点在しています。五十年代、六十代の人が多くなり、お年寄りの一人住まいも増えてきています。過疎が進行するなかで生徒の家庭生活はいっそう困難になってきています。冷害や豪雪で除雪費がかかった上、田植えの遅れによる不作等、経済事情のために進学するのも大変です。就職するにも地元には働く場所もなく、ほとんどの卒業生が関東地方へと出ていきます。「いつそのこと東京都立松代高校とすればいいのに」という冗談のするほど東京へ就職します。進路指導を熱心にやればやるほど、生徒たちを親元から、町から引き離すことになり、複雑な気持ちになっていきます。

一七の小学校・分校のうち、松代小学校が全学年単式なのを除いてあとは全部複式学級です。集団訓練も受けずに少人数の小学校とは環境のまったくちがう、一挙に二百人以上の、町でただ一つの松代中学校に入学してくるのです。弱い子の中にはいじめっ子グループにたたか

れるとそのショックでたち直れない子もいます。そして松代高校へは、その中学校の卒業生がそのまま入学してくるため、学力差や進路指導、クラスの集団づくりなど大変です。

いわゆる輪切りにされないで入学してくる生徒たちの、地域の学校として弾力的な教育課程（普通科）が組まれてきています。野菜、作物という授業もあり、四十アールの学校実習田において田植え、稲刈りの全校生徒の一日体験学習もしています。逐年減少する生徒数は、一学年三学級全校九学級で二九三名です。今後学級減が予想され、さらに国の基準で決まっている独立高校の条件は生徒数が二七〇人ですが、それを切るのが六十一年とあと数年後に迫ってきています。生徒たちは雪道をバスや、一時間以上もかけて歩いて学校に來ます。将来ずっとこの松代に定住したいという生徒が七割近くいます。子どもたちの素朴でたくましい姿にふれるたびに、地域に光のあたる農政を願わずにはいられません。

この自然豊かな松代で、風土が無言の教育力をもっていることをまさに知らされました。自分自身を問い直しつつ、身近な人たちとの出会いを大切にしていきたいと思っています。

（新潟県立松代高等学校）

地域で仕事をして

新井 恭子

二月も末のある日、一昨晩、突然自ら命を断とうとした少女を目の前にした。地下の閑散とした、壁にしみのあるうそ寒い会議室で、その少女は母と姉に付き添われて坐っていた。家出して二日目の夜、スーパ一のトイレで手首を切っているところを巡回の警備員の知るところとなり、命をとりとめたという。「痛かった？」ときくと、私を凝視してうなづく。そこまで十四歳の少女を追いつめていったのはなんだろうと思いつながら、生き続ける価値がないと断定して、ガス栓のコックをひねった自分の十六歳のときを重ねていた。

各市に家庭児童相談室が設置されていて、家庭相談員が子供の養育に関する相談を受けている。親に虐待されたり、置き去りにされる子供たち、夫子や妻子を残して行方不明になる女たち・男たち。母が病に倒れるや施設に里親にと連れてこられる子供たち。夫の暴力や不行跡にたえかねて着のまぎまぎ逃げとくる妻と子、いとおしまれつつ育てられていないと思える子供たち。相談内容を見ていねいにみていくと、子供やおとなの呻きがきこ

えてくる。そして今の私たちの暮らし方にふつふつと疑問が湧いてくる。

一つには、このようなことに行政が対応することが望ましいのかということ。そうだとしたら、どこまで手を貸せるのだろうか。公民館等で学習し、今のままの社会ではいけないとか、自分のもてる力を社会に役立てたいとか、思いながら逡巡している数多い人々の力を頼みにできないものだろうか。子供を育てあうことを通して、地域のそここに熱い連帯の輪をつくっていくことは不可能だろうか。

次には、相談ごとの奥に見え隠れする家庭のありよう。つまり夫と妻……男と女の確執や、反対に関係のなさ――毎日の暮らしの中でつみ重ね育てられるべきもののなさ――が感じられたりする。かつての農業社会における大家族の時代には不問に付されていたことが、クローズアップされてきているように思う。アクシデントやトラブルも乗り越えられないばかりか、家族の存在が瀕死の状態に陥ることもまれではない。外見上夫婦としての体裁は保たれていても、潜在離婚ともいふべき状況がみえてくる。そのあたりが子供にしわ寄せされ

ているのだ。

いのちを生き育て、ヒトから人間への人格形成の基盤である家庭が病んでいると言われるが、それを支える男と女の暮らし方、かわり方。いやそのもとをたどれば一人一人の存在そのものが揺れているのだ。あたかも社会という海の大きなうねりに翻弄される一飛沫のようだ。憲法によって国民に基本的人権が保障され、この自由と権利は不断の努力によって保持する責任が明記された。民主主義を支えるのは人であり、その人間の育成については教育に負うところが大きいとされているが、その教育が萎えている結果として、罪のない子供をこんなにも苦しめているのだと思えてしまう。

「私たちのまちの中心は？」。小学校の社会科の時間の先生の問いかけだった。否応なく点在化されている私たちの、精神の交流する場、心あたためあう場を、まちを形成する要素としてつくる必要があるのではないだろうか。自分のねぐらの周辺で共に生きるとの実感を、今どれ程の人がもっているだろう。子供を一人前に育てるには、ねぐら近くの人との関係を大切に紡ぐ必要がある。

それは互いが成長しあう関係づくり、精神的な血縁関係をつくっていくことである。生きる力をひきだしあい、同じ時に在る喜びをわかちあえるような暮らしをつくる

ていきたい。それには自分としっかり向き合い、自らを育てる仕事を自身に課さなければならない。

人は何によって自分を支えるのだろうかとか心に問うてみる。人が人として生きていく時、己を支えるのは、やはり人であろうか。ある日曜の朝、ラジオを聞いていて「死を望んだが、チャイコフスキーの曲を聞いて思いとどまった」投書を耳にし、心動かされた。自分の中からしぼりだすように自分をつくっていききたいし、気持の通じあう人と四つに組んで、現状に対する主体的なかかわりを起こしていきたい。

家族の問題などで悩み苦しみながら、この三月に卒業していった子供たち。衣料品の売場にたつMちゃん、大工見習のM君、念願の美容院に住込みで働くFちゃん、いつかその働く姿をまちで見かけることがあったら、「オーイ」と手をあげよう。彼らの姿に励まされて、今押しつぶされそうになっている子供たちの叫びに耳を傾けながら、一緒に生きていきたいと思う。

(S市役所児童家庭課)

地域から、地域を考える

—生活地図で語る「家族の地域」—

若竹キミイ

地図を広げて家族を考える——唐突と思われるでしょうけれど、私たちが、私たちの足元から、私たちの問題を把握し、問題解決の手だても私たち流で見出せるように——生活地図作りを思いついた発端は、こんなところがありました。

六年を重ねる婦人学級（公民館・児童館共催、保育付）の今回のテーマは「家族」。83年は家族や地域の絆が危ないという警鐘が各方面から鳴らされ、学級参加者たちは、それぞれに他人ごとでない気持で集まっていました。

誰が考えてもこれは大きなテーマなのですが、私たちにとつての重さは、専ら「言われる側」であり、「しろうとの世界」で、「解決の当事者」視されている現実です。

20時間、10回を限りの共同学習が、講師の懐を借りながら相互学習に至れるか。生活をひきずっている者の学びが「受」講であつてはならじという思いが、冒頭の私たち、ぶりなわけでした。手続き的には、相手と自分を突き合わせ、自分の問題を客体化して再把握できること、という個別の学びが第一で、最低のステップ、ここをど

うするか……。

困った欲ばりたちの考えたことは、最も単純なところから、深いも浅いもなく、まっ平らな生活の地平に、どう生きていく「わたし」なのか、地図にスケッチしてみる手でした。

東西4km、南北3kmに多少の凹凸という小金井市を、A4サイズに納めてコピーし、まず自分の住まいに印を入れました。記入上の細かい約束ごとは一切なし、二週間、まるで小学生の気分で、思い思いの生活地図を描きます。自分のいたところを点に落とす者、通った路をなぞる者、面を切る、誰のためか、何時頃かと色分けする……それぞれの「わたし」の半月分は、平らな地図に山盛りの話題を溢れさせました。

K 私の動きは子どもを幼稚園に送り届け、迎えに行つて、その間や、ついで、残りの部分で他の用事をこなす生活なわけ。コマ切れがシャクだけど、幼稚園は歩いて通わせたかったし、今は割り切つて、幼稚園の行き帰りを家事のついでじゃなく、子どもの相手になれる時間と考えるようにしている。友達とも会えるし、親の顔や家も知り合えるので、自

然、子どもの足で行き来できるエリアの耕しになった。泊りも含めて、子どもを預け合える間柄の家庭が何軒かできてみると、これ以上心強いことはないように思う。

A 私は毎日の行動が誰のためなのか、興味を持った。若い人たちはやはり子どもの用が多く、先輩たちは親のための日があったりする。病院の付き添いのために電車で出かけるという話にハッとした。私の地域も家庭医は足りているけど総合病院がない。病気が難しくなったらいられないところなんですね。

Z 夫の姿が出て来ない。夫と共にというのも夫のためというの。変にあっても困るけど、とに角生活万般タダ乗り、子どもとコミにされてことが運んでいるという感じがまる見え。地域での足跡が、玄関のドアからガレージまでという人もいるんじゃないか。だから職場コミュニティと言った人があるけど、それは甘いし、まちがっている。

O PTA活動が自分のためと子どものために分かれるのが面白い。社会教育活動一般は自分のためとする人が多いけど、中で子どもを媒体にする地域活動等が、自分のためと自覚が変わる境目はどこなのか。子どものことでも、市の施策まで視界に入れている人の動きを見ると、地域づくりにタダ乗りしている人って多いナと思う。

K 買物によく出歩いている人ほとんど出歩かない人で地図の彩りがずい分違う。主に食料品購入として、個人商店重点に、子どものための地域づくりを意識している人がある一方で、やはり子どものために安全な食品をと、厳格に生協や共同購入に努力している人がいる。安全なものが普通に入手できる街が理想だけど、目覚めた人たちが共同で目的を達すると、要求の声が静まってしまうところが怖い。となりの子のことも視野に入れた活動というなら、一工夫必要と思う。

U 生活の動きを点で落としながら、友人知人の家も入れてみた。ほとんどの人が公民館や児童館を仲立ちにした出会い。遠くの親戚より近くの他人という実感がウソじゃない。雑誌の座談会で中野区の人が言っていた。血縁より地縁、それも知縁を意識的に培うことで、現代の家族は地域に生かされるって。事実上私は近くに親戚もないし、自分も「誰かのよい知縁の人」として生きたい。

行きつもどりつの、老大なお喋りの量でした。その後も何かのついでに交わされる続きを含めて……ちよつとまとめすぎたかもしれません。けど、どれも、構えずに足元を見つめ合うことのできたクラスメートの発言、返す肯きにつながっています。学びの出会いから、お喋りで耕していく地域、まだ白い地図は、いろいろな色が、また点されて行くでしょう。

地域で教育を考える

小野美智子

この佐倉の地で、初めて子供が小学校に入ったころ、教室に貼られたシールの輝きに不気味さを感じて、身近な人に話してみると、「子供たちにも励みになっていいわね」なんて言われてしまう。中学校が荒れているという話が出れば、「悪いのは三人だけなんだってヨ、イヤーネエ」とくる。PTA一年生としては、ちよつと違うんじゃない……と思いつつも迷ってしまう。学校の会合で、小学生に成績表はいらさないんじゃないかと疑問を投げかけると、まるで変人扱いされて記録にも残らない。抛を求めて地域で開かれる講演会を覗いてみる。判で押したように、「お母さん、あなたがしつかりしていれば、お宅のお子さんは大丈夫」「今日ここに來ているような熱心なお母さんの子供は大丈夫」——講演やさんの甘い言葉に幸せそうに上氣して会場を出ていく人たちを見て、ますます孤立する。こりゃあ、何もかも母親のせいにして、今の子供たちの苦しみを家庭の中に封じ込めようとする陰謀に違いない。なのに、皆乗せられちゃうなんて、まったく田舎なんだから——と諦めかけたこ

ろ、半田先生との出会いがあった。

近くの公民館主催で、一回きりでなく六回連続のセミナーがあるというので、ちよつと興味をそそられて、でもほとんど絶望のまま参加した。ところがそこに永いこと私が探していたものがあつた。半田先生や他の参加者と話をし、紹介された本を読んでいくうちに、今までずつとモヤモヤしたまま整理できずにいたものがすこし見えてきた。いちばん大きな発見は、私自身がまるで解放されていないのがわかつたこと。自分が解放されてなくて、何で子供や学校を解放することなんてできるだろうか。学校の過剰管理を批判しながら、自分は恐いほど子供や夫さえも管理しようとしていたのを知つた。私の中でいろんなものも崩れていくのを感じ、ハハア、これが世に言うカルチャーショックというヤツだと思つたものだ。やつと話の通じる仲間を見つけたこともできた。

次の年には企画から参加して、グループ制をとり入れた十回のセミナーを開いた。人事異動で公民館の担当者が替わつてしまつたり、インフルエンザの大流行で欠席者が多かつたりで、決して立派な結果を生むようなセミナーではなかつ

たけれど、武田秀夫先生と出会い、新しい友人を得ることもできた。グループの人と地域の学校へ話を聞きに行つて、先生たちが必死になつて学力テストを拒んでいる事実や、教員採用の実情なども聞くことができた。そこにはまた、PTAの場では決して見ることもない、解放されたいとあがいている若い先生の姿もあった。私にとつては、その年も得るところが多かつた。

ところが、三年目は公民館の都合であつさりと打ち切りになつてしまつた。私たちに跳ね返す熱意があれば何とか継続することもできたのだらうけれど、それは無理だつた。平日の午前中に公民館で開かれるセミナーというのは、暇な奥様のサロンになつてしまふ危険性も多く孕んでいる。お花やヨガよりちよつと知的なお集まりになつてしまつては、あのカルチャーセンターへ通う人たちと何も変わらないという部分もあるのだ。

こんな時、活動家なら強力なリーダーシップを発揮して皆をまとめるのだらうけれど、私にはできない。一人一人の気持や都合を考えていたら何もできないという人もいるけれど、私は、一人一人の気持や都合を大事にしなかつたら、何も本物は生まれてこないと思う。ことに地域では、そこに各人各様の生活があるのだ。私たちは教育評論家ではないから、各人各様の生活をしていく中

で、教育の問題もまた生活の一部としてキチンと考え、話合つていかなくてはと思う。子供の教育というけれど、大人が目を開き、地に足を付けた生活をしているかどうかを子供は鋭い眼で見ているのだから。

この際、セミナーから離れて自分の足元を固めてから、今度は行政に頼らずに、先生や父親や子供たちとも連帯できる場を作りたいと考えていた矢先、先生と親が話し合う会を開くと聞いて、子供の学校の先生方を誘い、五年生の娘を連れて参加した。市の内外から三百人ほどが集まり、林竹二氏の映画を見た後、助言者を交じえて話し合いがあつた。第一回ということもあつて、活発な討議とはいかなかつたが、連帯への兆しが見えたような気がした。どんな反応を示すか期待して連れていった娘はひどく退屈していたけれど、一方でこういう会を続けていくことによって、PTAや井戸端会議での孤立にも耐えて、しつこくやっていけるんじゃないかと思う。地域で働き、生活する普通のオバサンとしては、革命は無理だけど、シブトク生きていかなくちや。

佐倉子育ての会(旧称「家庭教育」映画の集い)

連絡先 中村 ○四三四(八六)五四三〇

地域に生きる「かつばの家」

木崎志江香

ダツダツダ、ゴロゴロゴロ……きょうもまたコンクリートの狭い路地に、子どもたちの乗り物の音が派手に響きます。一歳から三歳の子ども総勢十二名、時にはハイハイの赤ん坊も混じっています。ドレーン、あつ、転んだ、ギャーッと泣き出す子どものまわりで、他の子たちは相変わらず、ダツダツダ、ゴロゴロ……。ここは花の吉祥寺の下真中。住宅と商店の密集するこの地で保育をはじめて早いものでもう五年たちます。同じ武蔵野市でも女子大前の閑静な住宅街から移ってきた当初、「こんなところで保育ができるのだろうか」と頭をかかえてしまいましたが、それももうなつかしい思い出になってしまいました。

かつばの家保育所は、一九七〇年に保育所を切実に必要とする親たちの手でつくられた無認可共同保育所です。以来十四年間で、二回の移転を経験し、運営の厳しさから何回も存続の危機に見舞われながらも、親と保育者の総意と努力で何とか乗り越え今日まで維持してくることができました。(しかし、無認可保育所は、親の高額な

保育料負担と保育者の劣悪な労働条件によってかろうじて支えられているという、まったく危うい基盤の上になりました。いることは、十四年前から今日まで少しも変わっていませんしこの点で冷たい行政に対して憤りや不満がいつぱいあるのですが、主題とはずれますので今回はふれません。)

現在子どもは産休あけ(生後一ヶ月)から三歳まで一八名、保育者は七名(うち二名は男)。〇歳の赤ん坊から六〇代の保育者まで、個性も歴史も価値感もちがう人間たちがウジャウジャと庭もない狭い保育室にいるわけで(これに送り迎える親たちも加わると、その数たるや!)、毎日がハプニングの連続。人間臭さがプンプンした中で毎日の生活がくりひろげられています。

かつばの保育の中でずっと追求してきたこととして次の四点があります。①親と保育者が、子どもを預ける、預かるという関係ではなく、お互いもう一步ふみこんで子どもを共に育てる関係でありたい。②保育者は個性を持った一人の大人として子どもとつきあいたい。③現実にはここに存在する子どもから学ぶ姿勢を持ちたい。杓子定規に子どもをみるので

はなく、一人一人の子どもの個性やペースを大事にした
い。④地域に開かれた場としてありたい。

実際の保育は天気が悪くなければともかく毎日外に出ることを基本にしています。さんぽ車を使ったり歩いてブラブラと街を行く「かっぱのさんぽ」は、もうすっかり御近所の名物となっていて「あつ、きたきた」「おはよう、きょうも元気だね」「まあまあ、こんな薄着で」と色々声がかかります。商店のおじさんが忙しい仕事の手をとめてお菓子をくれて、朝から親との別れがつらくて泣いていた子がピタッと泣きやんだなんていうこともあったりします。さんぽ先は、その日の天気や子どもたちの様子、保育者の気分等で千変万化、井の頭公園やその他の小さな公園、小学校の庭、デパート、時には電車に乗って遠出、時には意味もなく近所をブラブラ歩くだけというのもあったりして、ともかく地域を徘徊する毎日です。

地域を徘徊することを当たり前の保育として毎日やってきたことが、結果として地域の人たちと私たちを仲良くさせてくれたようです。外に出るといつでもどこでも色々な人たちにみられています。まして目につきやすい異様な（？）大人と子どもとの集団。最初のうちは好奇の視線も浴びていたようですが、それはほんの数ヶ月。中

にはよくみている人がいるもので、「あら、あんなに泣いていた子が、こんなに笑っているのね」「毎日外に出られていいわね」。

私たちの保育がどんなものか難しい言葉はいりません。小さい子どもを持つお母さんが「ウチの子病気なんだけど」と話しにきてそのまま井戸端会議になったりもします。最初に書いたように前の道路が袋小路であるのをよいことに、かっぱ専用の庭にしています。夏は水遊びもここで、ニユーヨークのハーレムみたいに盛大にやります。「よく苦情がでないわね」と見学に来る人に言われるほどすごい騒音なのに、一度も苦情を言われたことがありません。それどころか、ヤレ、バザーだ、もちつきだと行事のたびに色々協力してもらって、本当にこんなにしてもらってよいのだろうかと思ってしまう。

たった五年間の生活で、「地域に生きる」などと大きな事は言えないだろうし、まだまだこの街で私たちは異端者だろうと思いますが、声をかけ声をかけられ、ジャマをしてジャマをされて、そんな生活をこれからも続けて行きたいと思っています。

(「かっぱの家」)



五月号の本欄の梶原さんの問題提起に対して、二・三月号まで「テレビ残像」を連載してこられた野村康子さんのお考えをうかがいました。あなたのテレビ観もお寄せ下さい。(編集部)

◆同じ映画でも劇場でみると、茶の間でテレビでみるのとはひどく違う印象を受けることがある。まず画面の大きさが違うし、テレビの場合、途中何回も挿入されるCMによって流れが中断され、著しく感興が殺がれてしまう。しかしもっと決定的に違うのは、映画の場合、周囲が暗くなった途端に日常的なものが消され、容易に映像の世界に入りこむことができる

が、テレビでは全く事情が違う。小さな画面から少し視線をそらせば、たちまちに生活臭ふんぷんたる茶の間の様子がとびこんでくるし、電話のベルに現実にはききもどされ、メロドラマに涙を流そうものなら子どもの失笑をあびるといった具合で、日常と非日常の間をたえず往きつもとどりつしなければならぬ。映画が終わって暮色に塗り変えられた街に一步踏み出す一瞬の落差からくる身心のゆらめきを、テレビでは味わうことができない。そのことに私はもどかしさや苛立たしさを感じてしまうが、このことはテレビを見る場合、見る側に相対化できる軸があることを示している。チャンネルを回すこと、消すことが個人の自由に任されている点と合わせて、テレビ文化がいつも実際の生活にさらされていることは、テレビを考える時の重要な一つのポイントだろう。

私がテレビをみる時、大事にす

るのは自分の感性である。「おしん」がテレビ視聴率の限界に達したといわれる「オバケ番組」であろうとも、あのおしつけがましきやご都合主義に我慢できなかったからみなかった。尊大な鈴木サンが嫌いだからクイズ面白ゼミナールもみない。ファッショナブルでテンポの早いシティ派ドラマは、この好みを人に押しつけようとは毛頭思わないが、私は好きだ。運命のいたずら、すれちがいに翻弄されて涙にくれる女ではなくて、いきいきと働く女性がクローズアップされているのがいい(もともとその職業は、イラストレーター、デザイナー、ジャーナリストといったカタカナ表記のカッコイイ職業が多く、その描き方も表面的でワンパターンだという批判はいくらでもできるが)。

暗く重ったるい所に現実の自分があるから、明るく華やいだからやかもものに心惹かれるのだから。その意味で、TVドラマにひと

きの「逃避」をしているのだといわれればその通り。でも娯楽としてテレビをみちやいけなの？いつも何か学んでなければいけないの？たかがテレビじゃないの。といつて「おもしろくなければテレビじゃない」と思いこむほどには私は過激ではない。でも見栄はつていえば、おもしろさぐらいはわかる人間でありたい。だからはじめて「オレたちひょうきん族」を見た時その面白さが全くわからずうろたえてしまった。子どもは？とみれば小学校の四年生の彼は画面をみてニヤニヤ笑っているではないか。ムムツ……

ここでは事実を報道するニュースも、歌謡番組も、朗読の時間も、等価値にパロディ化されてしまっている。新潟で一騎打ちをした田中角栄・野坂昭如両候補者を選挙前夜に笑いの標的にしてしまった大胆さ。そして最近人気のある「懺悔の室」のおかしさ。NGシ

ーンが再録されNGを出した人間は、教会の祭壇の前に額つきザングする。牧師もどきがやさしげにその告白を聞き、十字架にかけられた半身裸の太ったキリストもどきの審判によって、罪を犯した人間の頭上に大水が降ってきたり、あるいは紙吹雪が舞う。通常ブラウン管に姿を現さないディレクター、カメラマン、スターの付き人も容赦されない。従来マイナス点として葬り去られるしかなかったNG場面だけを堂々とつなぎ合わせて、テレビ界の裏表をアケスケにみせて笑いとばしてしまう——

もちろんここにもフィクションや計算はあるにちがいないが——この発想の転換は中々面白い。ナンテ分析して「ひょうきん族」には現実を撃つ視点があるなどと理屈をつけないと落ち着けないヒトは、本当にはこの番組を楽しんでいるとはいえない。

このパロディも所詮表層を一刺ししたにすぎない「軽佻浮薄」な

番組だと批判することは容易だろう。だがこの番組をスナリ受け入れる人々には彼ら独自の表現とフィードバックがあるのだ。それは異文化といってもいいほどだ。それを軽薄とケイベツして何になろう。そこから対話が生まれてくるとは考えられない。

テレビを批判する人の意見を聞いていると余りにも正論すぎて反論のしようもないことが多いのだが、ひつかかるのは、番組を見ずに、仮にみていたとしても「わからない」で批判していることがあるのではということ。「わからない」ものを悪として切りすてるのはいささかゴウマンじやないかなア。第二に、テレビが子どもの欲望を過度に刺激しているという点。テレビがあおっている部分があるにしても、テレビも又、現実の社会文化を鋭敏に反映しているのだから、テレビを一方的に悪者にしても始まらない。テレビに子守りをさせなければならぬ状況をこ

そ問題にすべきだし、柔らかな子どもの精神をテレビが侵しているとするれば、それに対抗すべき文化を大人たちが持っていないことを問うべきじゃないかしらん。

第三に、テレビが一家団らんを奪ったとのことだが、テレビ番組を話題に辛うじて気持の交流ができるという家族も多いのでは？

第四に、外国に比べて日本は放映時間が異常に長いという説。長い短いというよりむしろ、私はテレビ（ラジオもだが）が使いすて文化であること——一度見逃すと

その番組をみるのがほとんど不可能に近いというところの方が残念に思える。ビデオ・ライブラリーとかリクエストに応える時間があれば、製作者と視聴者を直接的に結びつけるパイプになるのではないだろうか。

最後にCMの問題。私が恐ろしいと思うのはサブリミナルな広告——ある特定の意図をもって、視聴者には気づかれないように、ド

ラマとは無関係な映像や音響をくり返しめぐりこませることによって、視聴者に暗示をかけ先脳する効果を秘めているもの——これは非常にこわい。何か商品を選ぶ時、テレビの片隅に見たことが潜在意識になって働く場合があることは、誰しも経験しているのではないか。ソフトにクリップしてくるものに気づいた時は、すでに手遅れだろう。やっぱりテレビはあれどテレビ」なのである。

で、第一の点にもどるのだが、批判するときは自分の目で見て、自分の感情を大切にしていきたいものだ。なにしろ、イレブンPMが大マジメ路線の教育特集をくみ、NHKのニュースが大韓機撃墜のニュース報道の中でたくみに反共宣伝を行い、プロ野球放映を通して日本国民総道徳教育を行っているのだから、レッテルできめつけるのはヤバイと思うのデス。

(東京・野村康子)



We公開ゼミナールを かえりみて

半田たつ子

Weは、いつも結論の出ない難問を抱えています。83年春には「学校をよみがえらせよう―家庭科の窓から―」、83年夏には「学校はよみがえり得るか」と取り組んできたものの、学校をよみがえらせたほうがいいのか、学校はもうダメなのか、ますます難しくなってきました。

現実に子どもたちは学校に通っており、学校を子どもたちの「居場所」にするために、ひたむきに取り組んでいる先生もある。学校をこわせばいいとばかりも言えない。なによりも「管理教育」をどうにかしなくてはならないのではないか。こんなことがぼんやりと浮かんできたのです。

そこで、Weの会とウイ書房共催「84年春の公開ゼミナール」では「管理教育を超えるには」をテーマにしよう、ということになりました。昨年十二月十一日の第一回実行委員会で、テーマを決めた後、夏のフォーラムを振り返りながらアウトラインを描いていきましました。様々の論議を生んだ「公開授業」に、もう一度方法を変えてチャレンジしたい。シンポジウムの講師だった佐々木賢さんに、もう少しつつこんだお話を聞きたい。そんな願いから、公開授業とパネルディスカッションの二部構成とする。授業の先生役を中嶋里美さんが引き受けて下さり、パネラーとしては、佐々木さんの他に、アメリカに一年留学し、彼の地の教育や女性解放運動をつぶさに見聞し、体験してこられた三井マリ子さんをお願いすることになりました。

公開授業は、いわゆる教科の枠を超えるという意味で（現行の教育課程でいえば、高等学校のロング・ホームルームに相当するものを、生徒は「大人が高校生のつもりになる」のではなく、現実の

年齢・立場のまま生徒になることにしました。管理教育を超えるには同年齢の人間だけでクラスを構成するという常識を捨てたいし、社会人の高校再入学も当然あってよい、と思っただけです。

生徒の数は二十人程度。もちろん男女共学。教師が教えたいことを一方的に注入するのではなく、生徒の考えを引き出しながら、教師も生徒も共に学び合う、というスタイルにしよう、と話し合いました。

教師役の中嶋さんは「男と女の生き方」をテーマに、生徒さんたちとコンタクトをとり、レポートを書いてもらうなど、着々と準備を進められました。パネルディスカッションは、「当日に期するところ大」という性格を持っています。しかし、両者が混然大テーマに溶け合うものでありたいと願い、実行委員会も四回目、最終打ち合わせの段階で、当日役割を持つ全員が顔を合わせました。

佐々木さんは、定時制高校で、「学校」によって深く傷つけられてきた生徒たちと、いかにコミュニケーションを切り結ぶか、死闘をくり返していらいやいます。佐々木さんにとっては、問題・生徒と喫茶店でダべることや、バイクの免許停止をくらった生徒と、戦術を練ることこそが「授業」だといわれます。一方、中嶋さんは、学校という制度は認めた上で、前述のように自由な発想から、意欲的な授業を展開してみようと心を砕き、手はずを整えてこられました。お二人のよって立つところの違いをめぐって、話し合いはまことにケンケンガクガクでした。

・管理教育を超えるには、をテーマにしながら、生徒にレポートを書かせるといことが、管理ではないか。

・管理は人間性を抑圧する時に悪となる。一切の管理を否定するな

ら、たとえば今日、時間と場所を指定されて、私たちがここに集まるとい行為さえ成り立たなくなる。

・レポートを出さない生徒がいたとしても、その人を問題・生徒として切り捨てないでほしい。切り捨てれば、いまの学校現場と同じになってしまいうだろう。

・男と女の関係ということでは、定時制高校生たちは、男女のカップルができると、表情がおだやかになり、心も安定してくる。

・全日制高校でも底辺校というコンプレックスを持って入学した子たちは、年内にボーイフレンドを作ろうと必死になる。もしできなければ〇〇（校名）ブスのレッテルを貼られたことになり、それは彼女らにとって最大の恥辱なのだ。たとえカップルができて表情がよくなったとしても、こうした状況を肯定することはできない……などなど

三月三十一日に、このように白熱した討論を行えたらどんなにいいだろうと思うほど、ストリートに意見をぶつけ合いました。

私自身は、バーンと二つに分かれてしまったように見えるけれど、両者は決して対立するものではない、と思っていました。男と女の関係も、輪切りにされた底辺に位置づけられている子どもたちの問題も、ともに「差別」と「分断」によって人間性が抑圧され、歪められている意味において、根は一つだと受けとめました。

公開ゼミで「根は一つ」ということを浮かび上がらせることができれば大成功だ、と思いました。ただ、百人規模の集会で、論議を尽くすには、時間が足りないことが心配でした。残念でした。「根は一つ」というところまで行きつけぬまま、時間切れになった時、参加された方は、男女の役割分業を問い直すことと、学校制度や授

業すら否定すること、二つの大きな問題提起を受けて、どちらも消化しきれぬ不満を感じられるのではないかと危惧しました。

佐々木さんがパネラーを降りる、と言いだされ、一同驚き、こんな観点から話していただけないかと色々な提案をしました。佐々木さんも一度は翻意されたのですが、やはり「テーマが二つに分かれる」という見方が強く、佐々木さんは公開ゼミに参加はなさるが、パネラーにはならない、ということになったのです。

この時は、三月十一日。すでに本誌上やチラシで、ご案内が広がっていました。佐々木さんがパネラーなら話を聞きたい、「管理教育を超えるには」のテーマだから参加したいと思っていられしやる方たちに、以上の経緯をお知らせする方法がありませんでした。特に申込みを受けつけず、自由な当日参加でしたから。

パネラー二人のうち一人が降りられたのでは、パネルディスカッションは成立しません。もう一人のパネラー三井さんと、司会の芦谷薫さん・山下文明さんがコメンテーターとして「公開授業」を参観した上での感想と共に、ご自身の「管理教育を超える」ための提案を述べ、参加された方たちのご意見をひき出すことにしました。このような形に変わったことを、当日司会者が説明する、ということになりました。中嶋さんは、参加者にさし上げた資料の中に、このいきさつを書いて下さいました。

でも、私は今、参加された方たちに、もっときちんと経過をお話しすべきだった、と悔やんでいます。その後悔がこの文を書かせました。準備の最終段階で生じた大問題を、私はまだひきずっています。乗り越えられずにいます。

初めから「男女の役割分業の固定化を突き崩すには」をテーマに

していれば、公開ゼミは成功でした。しかし、当日のテーマは「管理教育を超えるには」でした。不満を持たれた方も多かったと思います。

三月十一日、えんえんと続く議論の中で、私は、人は誰でもいくつかのテーマを抱えて生きているけれど、その第一テーマは容易に譲れないのだ、と痛感しました。私にも、決して「まあまあ、なあなあ」におとしたくない第一テーマがあるゆえに。

中嶋さんにとっての第一テーマは「この日本の社会で、どうしたら、男女の役割分業を変え、一人一人が自立した人間として生活出来るようになるか」ということ。中嶋さんは公開ゼミの資料に「多分、生涯をかけて取り組む課題になるだろう」と述べています。

佐々木さんにとっての第一のテーマは「本来学校はいいところなのだろうか。同年齢のものを一堂に集め、大人が勝手に『よかれ』と思ったことを子どもに与え、そして資格を与えるこのシステムが、果たしていいものなのだろうか。そもそも教える、ことそのものが、いいことなのだろうか」(We⁸³年4月号)ということ。

第一テーマが、その人にとって重ければ重いほど、他のテーマとのかかわりにおいて第一テーマをとらえ直すのは至難なのだ、ということを目のあたりにして、私は今回の公開ゼミを一つの問題に絞らざるを得ないと決断したのでした。ここで残した問題を、夏のフォーラムにどう生かすか。それが今、私にとって最大の課題です。

公開ゼミについては、本号で生徒さんたちのレポートの一部を紹介し、当日の様子は次号で報告します。結論の容易に出ない難問を少しずつ解きながら共に歩むのがWe⁸³のWe⁸³たるゆえんです。あなたもどうぞご意見をお寄せ下さい。

先生役の中嶋さんからは、生徒役の方たちに、次の呼びかけがありました。

21世紀にむけて、新しい女と男の関係どう築く？

築く？

―性別役割分業を変えるために、女から男へ、男から女への提言―

「やっぱり男は仕事第一よね」「女の子だもの、短大ぐらいで嫁にいいはいんだよ」「今日も愛妻弁当か」「早く君も結婚して作ってやれよ」

職場の中で、電車の中で、人が集まると、どこからともなく聞こえてくる言葉です。人を性別によって考える性別役割分業は、こんなにも日常生活に定着してしまっているのです。

(M・マグレディ『主夫と生活』より夫婦の会話の引用、省略)

私たちが女に生まれるか、男に生まれるか、それは自分の意志では決められないのです。どちらの性に生まれても平等に扱われ、十分個性を伸ばせる社会を作り、自らの生を楽しみ、次の世代にもプレゼントしていきたいものです。

さあ、あなたは日々どんな風に役割分業を変えていつているか話し合いませんか。

「私、仕事で忙しいのでよろしくね」「僕、そんなの恥ずかしいから」では、いつまでも男女差別―等国の汚名は返上出来ません。「あなたも私も、みんな変える人」になりましょう。

三月三十一日のWe公開セミナーでは、こうした役割分業をどう変えるか。その先にどんな女と男の関係が生まれるのか、一緒に考えていきたいと思います。

それはまた、あなたの未来図でもあります。

生徒になる方にはあらかじめ、次のレポートを出していただきます。その上で討論をつみ上げていきたいと思います。

- 1、役割分業があるために悩んだこと、くやしかったこと、議論したことについて(家庭、学校、職場、マスコミ等を通じて)
- 2、役割分業を変えるために、これから取り組みたいこと(同右)
- 3、役割分業を変えるために、男性に注文したいこと、女性に注文したいこと

〈レポート・ハイライト集〉

このメッセージに答え、力のこもったレポートが寄せられました。そのハイライトを紹介します。名簿はアイウエオ順。同姓の方三組、坂上さんは夫婦、長谷川さんは兄妹、前田さんは親子です。三人の女子高校生が、当日欠席だったのは残念。レポートは出さなかったが、授業には参加された方が二人ありました。

秋山 節子

1、自宅では年三回のどぶそうじと二回の草むしりがあります。どういう訳でなかったのかわかりませんが、いずれも日曜日に行われるにもかかわらず、女性がその役目を引き受けます。特に草むしりは重労働で、自宅の中心庭や周りに生えた草を午前中半日かけて刈り取ります。奥さんたちも当然のこととして受けとめているようで、私が「男の人も一緒にやればいいのにね」という言葉に、肯定的な答が返ってきません。(料理教室)

石澤 千尋

男は男である前に人間です。

あたしも女である前に人間です。

あたしは男性たちへ言う前に、まず女性（私も含めて）に「女であることに甘えずに、人間としてやっていこうぜ！」と――

そして、これを書いてできたムジュン、ギモンをひとつひとつ解いて（それは永遠の問いかもしれないが）、自分の血（知）にしていきたい。
（高校生）

大嶋 せい

1、今、一番に思うのは、現在自分（男）が性によって教育の機会がうばわれているということ。（中略）今家政学部を持つ大学というのは、日本に沢山あって、短大を入れるとかなりの数になるのだけれど、その中で男性を受け入れている学校は、ほんのわずか。

思うに、このことは「家政学」というものが女性に向いているから」というのではなく、「女には家のことをさせておくのが適当だ」というのからではないだろうか。だとしたら、何重にも差別的だなあ。

3、女性に注文したいことより、男性への注文がはるかに多いのだけれど、強いて女性に訴えたいことは（一般論なんだけど）もっとメカに強くなってほしい。
（電工）

奥田 真理

2、まず、運動をひろめるといった意気込みは、相手に嫌悪感、恐怖感さえ引きおこしかねない。ゆえにこういった気負いは捨てる。ようは、相手を理解し、そして自分を知ってもらいたい……その結果、私が以前と違った意見を持つ私になれたら……相手との関係性に創造的な何かがこしらえられたら……そんな期待をもって話すのである。あくまで話すのである。説得しようと思うと、いけないと思う。説得とは、裏面において、人を上から啓蒙する姿勢につながると思う。（中略）

従来の男性特権を女性が半分にたたくことに目標を置いて話されているのに時々危惧の念をいだく時がある。これでは産業社会の望む能力を開発するのに、人間らしさをおいて励んできた女性のみが、男性だけのものと考えられてきた特権の枠を広げることになってしまふ。日常の日々の生活において自分の人間らしさをとりもどしたく思う。

男女の自己変革のプロセスが、この運動の目的である。女性差別を撤回させるべく制度は必要である。しかし、制度で全て解決されるとは思われない。むしろ制度をつくるべく互いのコミュニケーションを活発にさせた、

その時点での人間関係形成プロセスに、私たちのユートピアはつくられているのではないだろうか。
（学生）

落合 伸江

2、まず自分の中にすでに作られてしまった「性別役割分業」を解体し、自分たちの判断軸を持つことだと思っています。ただ単に、文字の上、理論の上だけで「わかる」のではなく、実感を通してわかってゆきたいと考えます。
（看護婦）

河口 真理子

1、その(3)、先日、勤務先の小学校で、卒業を祝う会というものがあり、そこで六年生の子どもたちが劇をしました。その中の台詞にあった言葉です。

女の子の長いおさげ髪をひっぱってとってしまった男の子に、回りの女の子たちが「髪は女の命よ、どうするの、責任とってお嫁さんにしてあげなさい！」

なまいき盛りの子どもが母親に向かって「洗たくは母さんの仕事なんだからね、たのむよ！」

立派に成長した青年が「そろそろ、嫁さん

でももうか」

と、まあ、こんな具合です。劇の中の台詞とはいえ、次代をなう子供たちの口から、当然のように出てきた時はびっくりしてしまいました。

(教員)

坂上 真理

1、私は、特別に男女平等意識を持って育ってきたわけではなく、高校生だった頃には「結婚したら、夫につくしたい」などと言っていたほどである。「ニッコリと感じ良く、主張はひかえめに、ある程度わがままで無邪気」といった、男に好まれる女のポイントをよくつかんで振舞っていた。学校の勉強が結構できていたので、そのことで敬遠されるのではないかなどと、妙に意識したりもしていたように思う（おかしいような悲しい話でしょう）。(中略)

結婚した相手は、無理なく家事育児を手伝う男性であった。対等につき合っている相手であると思っていたが、基本的には夫婦はペアでワンセットであると思っていた(中略)。その間、さらに家事の平等分担を目指してかなり議論し、形態としては、相当平等になっていたと思う。しかし、そのように

形態を平等にしてもなお、性別役割分業は心の中に巣をつくっている。そして、それこそが、最も克服しにくいことであると思う。

(中略) 自分というものが確立していないために誰かと支えあう形でしかやっていけないのではないかと思う。私自身どんな事にでも「自分」で四つに組むという気迫がなかった。

(中略)

夫だということ、非常に甘えた要求を当然のようにしたり、相手の時間をあたりまえのように奪ったりして平気だった。それが信頼しあった関係であるかのように思っていた。しかし、いろいろな局面を自分で切り開くということをしていないために、肝心の「自分」というものに自信がもてないでいた。「自分」を「自分が生きること」の核にできていなかった私たちは、依存しあい補いあうといった性別役割分業の奴隷であったと思う。

(教員)

坂上 義雄

1、(1)外食・カレーライスの時代 要するにこの時代の私たちの生活は、得意なものをそれぞれが分担し、不得意なものはそのままにしておくという形態をとっていました。

(中略) 彼女が不在の時には、食事はカレーライスか外食ということになってしまいうわけです。(中略) こうして意地のつっぱり合いから、次の「曜日による完全分担制」となっていたのです。

今考えてみると、当時の彼女には、私たちが一緒に生活し、よりよい関係をつくっていくことについて、私が無関心であることへの不満と苛立ちがあり、私の方には、自分がずい分努力しているのに全く評価されないばかりか、要求のみつきつけられることへの不満があるという状態だったのです。したがって事の本質をとらえず、感情的に始めた完全分担保の時代は惨たんたるものでした。

(2) 曜日による完全分担制の時代 この方法は、ウィークデイを三日ずつ(土曜は交代)分担し、当番の日は一人で家事の全てをや、もう一人は完全にフリーにし、家事には一切手を出さないというものです。(中略) しばらくの間は、新しい生活に対する興奮もあり、かなり楽しかったのですが、だんだん「何かおかしい」と思うようになりました。それは一言でいえば、家族がバラバラになっていくような感じとでもいうようなものでした。(中略) もともと家事分担は、お互いの

関係をよりよくし、互いに自立するための手段であったのに、それを目的化してしまった

(これは私が過去の自分を肯定するために故意にそうしたのですが) 結果だったのです。したがってこの制度は、方法としても結果としても全く誤ったものだったのですが、この経験の中で、本質的な問題がかなり明確になったという点と、かなり料理がつくれるようになったという点で得たものも大きかったと思います。

(3) 自然な役割分担の時代 現在はこの段階なのですが、機械的に役割分担をするのではなく、そのときの都合でどちらがどちらをやってもよい(というよりも、どちらもが何でもやる)ということをやっています。つまり代替不可能な妊娠、出産、授乳が終わった現在、役割分担というようなのはナンセンスであり、どちらか一方でも何でもやれるが、二人でやればよりよいものができる。別れると困るから一緒に生活するのではなく、よりよい関係をつくるために一緒に生活していくことが、めざすべきあり方だと思っています。

(教員)

柴田 奈己

3、女性が男性と同じことをして、なぜなまいきだと言うのですか。それはきっと女性も男性よりも能力的に劣っていると考えているからだと思う。それは完全な間違いであるとかかってほしいです。(中略)

女は家事をやっている! という男の人。女の人だって人間です。生きがいが欲しい。だからそういう自分中心の考えは捨ててほしいです。それよりも第一に、これからのこの厳しい世の中で、自分一人で家族みんなを養っていけるわけがない……という問題があるのでは……。

(高校生)

杉本 有理

2、"女子は男子より劣っている"という考えをなくすためにたくさん勉強したい。そして、そんなことはないということを示したい。また、ほんとうに自分の望んでいる職業に就き、ずっと仕事を続けたい。結婚したからといって、専業主婦になる気は全くない。また、どんな様にやしなってもらおうというのもしやだ。自立するためにも、がんばって勉強して、女だからということと言われないようになりたいと思う。

(高校生)

長谷川 公一

2・3 性別の定型化圧力を支えているのは、人々の常識とそのような規範にしたがって生きたときに、獲得しうる恩恵です。あらゆる常識を疑ってみること、その根拠を問い直してみることに、また内発的な欲求やうながしと常識との間のギャップを、冷静にみつめ直してみることが大事ではないでしょうか。とくに様々な人々の生き方を知る、国や民族が異なる人々の生き方などを知り、定型的な人生や自分の人生を相対化することが肝要だと思います。

(教員)

長谷川 陽子

1、「女は結婚してあたりまえ、妻となり、母となつてやつと一人前」と親も地域社会も女性にこんな性別役割を期待し、その年齢についてさえも押しつけてくるのだ。この期待に応じて行動しないことへ加えられる非難はおまへはまちがっている、おまへは変だというメッセーじになり、自分がこれからどう生きていこうかと手さぐりしている最中の娘自身を疎外します。

2・3 男が女かということではなく、人間として、個人が原点であるということをも、

人々がはつきりと実感し、認識することへの働きかけが必要だと思う。
(学校職員)

福田 緑

1、彼は、常識的には「家事をしなくても当たり前の男」、ゴミの片付けや、買い物、食器洗い、食事の仕度のさわりの部分をしただけでも、相当なプラスの評価を受ける。しかし、私は「全ての家事をやって当たり前の女」、夫の家事のやり方に不満をもつのでゼいたくだとされてきた。(中略)

そうこうしているうちに長男が誕生。まがりなりにも家事分担を少しは引き受けていた彼が、一時的専業主婦の出現で退行したあと産休明けがやってきたわけだ。ここで今までの不満が爆発し、クーデターを起こすことになる。

育児時間が女にしか与えられていないから(中略)私が迎えに行くことがまず大前提となる。朝も勤務先の近い私が送っていくわけだ。学級の事務をゆつくりとすることもできず、朝はいつもすべり込みセーフで、ゆとりがなく、マラソンでかけつけて迎えに行く、すでに一日のエネルギーマの大半は消費してしまっている。おまけにクラスの仕事はじ

わりじわりとたまり、頭の中がいつもスツキリしない。

早く帰れば、まず洗たくをし、夕食の準備、必要に応じて買い物、啓の相手と息つく間もない。彼は自分のクラスの仕事をある程度すませ、同僚としゃべったり、スポーツもできたりして帰宅するのである。私にはこの差が一番くやしかった。(中略)子育て期の女にもゆつくり仕事をする権利はあるぞ! 遊ぶ権利もあるぞ! おしゃべりする権利もあるぞ!(中略)その中で、六月頃のある日、大げんかが起きたのである。(中略)

今考えると、この時、自分をなだめてしまっていたら我家はずいぶん違っていたかもしれないと思う。(中略)お互いを人間としていたわり合い尊重し合いながら家庭を営んでいくには、どこかにムリがかかったままではいけないということを理解し合うと、彼の実践はどんどん進んだ。その努力には頭が下がると、尊敬している。

3、(1)妻が留守したり、寝込んだりしても全く動じないだけの生活技術を身につけるべし(2)今、どちらがより動ける状態にあるかをよく見きわめ、家庭でも職場でも、お互いの思いやりをもって行動すべし (教員)

前田 敦子

3、愛という名のもとに、自分専用の世話係のように女性を思わないでほしい。そう言ってもピンとこない男性なら、あなたもまた単身赴任の夫に遺書を残して自殺した方が書いたように「結婚なんかすべきでない人」なのです。(中略)

21世紀に向かって、私たちがプレゼントしなければならぬのは、きれいな水、空気、平和、そしてすてきな女と男の関係がごく普通であることです。女と男にとつての幸せの中身とは、男女が役割として存在するのでないことです。分かっているつもりでいて、長い間かかって身についた亡霊のような意識を自分自身の中から追い出すことが先決なのだと思います。(教員)

前田 英樹

2、最近特に、真に美味しい料理を食べますと、こういう物が作れる人は何て幸せなんだろうと思うようになりました。しかし今までは料理(味の創造)の重要性を知りつつ作ってくれる人がいるという甘えから、あまり積極的でなかったのですが、これからは一週間に最低一つは新しい料理を覚え、自分の能

力を開拓してゆきたいと思います。(学生)

山田 昌弘

1、もし性別文化がなければ、男女の出会いには、単に体の構造の違いの確認、つまり性行為に還元されてしまうでしょう。看護婦の半分以上が男性になったとしたら、相撲とりの半分が女性になったとしたら、「相手の役割」という世界との出会いについての感動が薄れる。つまり、男らしい文化、女らしい文化がなくなることは、男女の出会いを単にセックスの出会いに変えてしまいます。正に、現代社会はそうなりつつあるのです。

2、では、どのようにすればいいんだ。おまえは何をしているのか、と言われると本当に困ります。いわゆる近代的な性的分業(男は外・女は内)にもどるべきではないと思います。といって、ユニセックス、分業廃止に行くのは、男女関係の豊かさを損います。

そこで僕が考えるのは、役割の内容を平等化させる一方で、役割を遂行する仕方の男女差を強化することです。同じ仕事をすることでも、男らしいやり方、女らしいやり方を確立することです。女性の新聞記者は「女言葉」で記事を書けばよい(イバン・イリッチ

は言葉の差が、男性・女性文化を支える基礎であったと述べています)。男性看護士は、男性らしく看護をすればよい。

3、女性が仕事につくこと、男性が家事をすることは賛成です。(僕の家では、母が病気のため、父と僕で家事を分担しています)それは、女らしさ・男らしさをお互いに身につけた上で、初めて有意義なものとなるに違いありません。女性のみなさん、女らしく仕事をしましょう。男のみなさん、男らしく家事をしましょう。(学生)

吉田 清彦

1、(6)最近「がんこな親父の会」など「たくましい」「きびしい」父親像が期待され、父性ならいざしらず、父権の回復が云々されていますが、必要なのは、他人をも自分をも大切に生きて生きる人間としてのたくましさでこそありましように。

2、(1)男も子供も仕事を(略)

(2)身近な場でのこだわりを大きな力に(略)
(3)たくましく生きる「弱者」とこそ連帯を政府が発表した母子家庭に対する児童扶養手当制度の「改正」案は、福祉切り捨て、女切り捨てのとてもひどい内容ですが、その中

に、いわゆる「未婚の母」に対して、今後支給を止めるという項があります。弱者に対してこそ手が差しのべられなければならないのに、まず弱者から切り捨てる中曽根内閣の分断政策の本質を見抜く必要があります。昨年の「優生保護法」改悪の動きとあわせて考えると、「堕ろすこともまかりならず、生み育てることもまかりならず」。妊娠、そして産むという女にとってはきわめて自然な営みが、どうして戸籍という名のもとに、国家によって管理されなければならないのでしょうか。(また、母性の問題がテーマなのに、その取扱いを検討する議事運営委員会とやらが、全員男性議員で占められ、女性が一人もいない、というのはどう考えてもおかしなことです)。

(4)新しい家族のあり方を(略)

3、(3)女も男も、お互いにみずからをもっともつと語り合い、伝えあうべく努力すべきだと思います。(男と女の間には深く暗い河がある)などという台詞は、理解しあう努力を自ら放棄した、イヤラシイナルシシズムでしかありません。(フリーライター)



病みし娘

病みし娘を
われに託して
勤め行く妻は
星降る夜道に消えり

まさ鏡持てれど吾はしるし無し 君が徒歩^{かみ}よりなづみ行くみれば (三三一六)

馬買はば妹徒歩ならむよし多やし 石は踏むとも吾は二人行かむ (三三一七)

鏡と馬と 人生の大きなテーマは愛と別れです。このことは今も昔も変わりません。萬葉びとは、これを高らかに謳いあげました。それ故に、その歌は若々しく今に生きているのです。

この問答歌もそうです。当時は、鏡や馬が大変貴重な物でした。妻の歌——よく澄んだ鏡を持っていても何の甲斐もない。あなたが難儀して歩いて旅に行くのを見ると。鏡を賣って馬を買いましたよ、あなた。夫が応えた歌——馬を買ったらお前さんだけ歩くことになる。ままよ、石は踏んでも二人で一緒に歩いて行こうよ。まことに素朴で思いやりに充ちた歌です。私は結婚祝いのスピーチに、よくこれを引用します。夫婦の愛情と信頼の原型がここにあると思うからです。

長歌と反歌 萬葉集の特色の一つは、すぐれた長歌をもっていることです。萬葉のあと、この長歌は急速に衰えて姿を消します。長歌には原則として反歌（短歌）がついています。反歌は長歌が訴えようとするポイントをまとめたものです。

さきほどの問答歌も、二つとも巻第一三の中の長歌の反歌です。この長歌は次のとおりです。

つぎねふ山城道^{ちみち}を 他夫^{ほかう}の馬より行くに おの夫し徒歩より行

けば見る毎にねのみし泣かゆ そ思ふに心し痛し たらちねの母が形見と 吾が持てるまそみ鏡に蜻蛉^{あまふ}領巾^{りやうきん}負ひ並め持ちて 馬買へ吾が背 (三三一四)

夫を想う妻の心がこもっていますね。

巻第一三は、このような長歌ばかりから成っています。しかもそのほとんどが名もない人びとの古い歌です。もう一つあげます。

人二人ありしと思はば 敷島の日本の国は 人多^{おほ}に満ちてあれども 藤浪の思ひまつはり 若草の思ひつきにし 君が目恋ひや明かさむ 長きこの夜を (三二四八)

反歌 敷島の日本の国に人二人 ありとし思はば何か嘆かむ (三二四九)

敷島の、藤浪の、若草の、はみな枕詞ですが、それぞれほのかな意味を漂わせています。この歌は反歌の方がよく知られています。

これを、愛しあっている二人だからとても幸せ、という意味にとる人があります。例の佐良直美の「二人のために世界はあるの」と同じ発想です。この歌は実はそうではないのです。この国に私が思う人が二人あつたら、こんなに嘆きはしないものを、あなた一人だけでしかも自由に逢えないのでつらい、という切実な歌なのです。

嘆きを超えたところに真のよるこびがあります。時は晩春、若草が萌え藤浪が美しくゆれていきます。相思相愛、幾多の障害をのり越えてめでたくゴールインした人へのお祝いとして、この歌はいかがでしょう。

中高年男性の死亡率の高さ、特にノイローゼや自殺の多発が話題になっているが、私も仕事柄これを痛感している。先日二十歳前後の少女少女が大勢逮捕された覚えい刑取締法違反事件で刑事裁判が行われたが、情状証人として出廷したのは父親たちであった。会社員あり、自営業あり、息子を集団就職で都会に送り出した地方の農家ありで、生活状況はさまざまだけれど、その人も息子・娘を充分監督して育てられなかった不徳を詫び、気の弱いお人良しのわが子なので何とか悪友から切り離して更正させたい旨を切々と訴える。

この日は裁判官も検察官も詰問口調でなくしんみりとうとうしてこんなことになってしまったかを聞いてくれて、私の依頼人の保護司さん（年輩の女性）も、「めずらしく暖かい雰囲気法廷でしたね」と感激して下さった。私も法曹関係者の不遜な態度に恥ずかしい思いをしなくてすんだことにほっとすると共に、今日の法廷のメンバーは同年輩の子をもつ同志たちだという気がした。その証拠に私の隣席の若い男性弁護士だけは、純法律的な明快な弁論をして元氣一杯である。聞いてみると子供はまだ幼くて非行少年になる心配など全くないという。ご本人も優秀なエリートである。「先生もあと二十年たったらあのお父さんたちの気持が身にしてみてわかるようになりますよ」と私は彼に言ったものである。

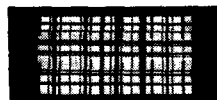
ところでこの日は、これら少女少女の母親も、病氣や遠方の人以外顔をそろえていた。どの家庭も実際は奥さんがとりききっており、子どもの内実もよく知っているのである。一見平均的家庭であ

り、しかもよくみると、夫婦の仲に微妙なすき間が見られる。それでも困難にぶつかって何とか表面をつくろい、勇をふるって夫婦で出てきている。そして父親がそこに居るかぎり、代表して証言するのは母親でなく父親である。日頃あまり頼りにならないお父さんが衆目注視の慣れぬ場で嫌な役を演ずる。母親は複雑な思いでそれを見ている。これはまことに象徴的な風景であった。

考えてみれば子供が成長して夫婦が中高年となった家庭では、どこでもさまざまな形でこういう問題がおこっているのである。子供をめぐる苦勞やトラブル、いざという時は日本ではまだまだ父親の出番であり、父親に出番のくるとき大抵あまり良い話ではない。受験期や思春期の子をもつ父親は嫌でも家庭に顔を向けざるを得なくなる。教育費をはじめ家計を支えるために仕事にも精出さざるを得ないし、その仕事上の悩みを累積していく。長い間の仕事の上の、あるいは妻子との間の小さな失敗の積み重ねが表面化していく。その上忍びよる体力の衰えが受身の気分にはさせる。こういう鬱々たる気分を忘れるべくどこに慰めを見出すのか、これこそ人さまざまであって個性が発揮されるときである。

ところで今の日本では、男と女の中高年における悩みや淋しさの質は相当異なっている。解決の仕方も男女でずいぶん違いがみられる。男女共仕事をもち同じような責任を負うようになった時代には、悩みの質も似てくるのだろうか。中高年男女の孤独と責任と苦悩について、次回もひきつづき考えてみたい。

スカートめくりする側　される側



中嶋 里美

あれは人前で話す機会を初めて与えられた時だった。今から八年前吉武輝子さんに紹介されて杉並区の社会教育の講座へ出掛けた時である。私のつたない話の後の参加者とのやりとりの中で、今でも忘れられない発言がある。「私たち一家は最近カナダから帰ってきました。カナダの小学校では男女仲良く、パーティをよくやりました。ところが日本に帰って、娘がされたことはスカートめくり。娘は学校に行かないと言います。父母会に問題を出しても、男の子ですもの、そのくらいはやりますわという反応、日本の社会は男の子に甘いんですね」。

3・31の公開ゼミナールの時、教師役の私は冒頭に「女と男の関係のなかにあらゆる人類の問題は含まれているのではないか。例えば小学校で男の子が女の子のスカートめくりをする。いやがる妻に夫がお前を養っているんだぞと性交を迫る、大国が小国を武力で支配しようとする、これらには共通点がある……」と話した。それに対して生徒役をやった下さったUさんは「スカートめくりと、性交を強要する男とを結びつけるのは大変飛躍した考え……」と話された。私にとっては少しも飛躍していないことが、一人の男の人にとっては飛躍とうつる。この点をこそ私は話したい。

私には小学生の娘を持つ友人が何人かいて彼等を通じて少女たちの言葉が伝わってくる。

「怪我をしてほうたいをまいてるところをわざと男の子が蹴りくるの」「スカートめくりされるのがいやだからズボンをはいていく」「男の子って乱暴だから嫌い」「男の子たちがスカートめくりしたら、アタシたちもオチンチン蹴るの」等々。

異性への興味はいい。しかしだからといって何でも許されるという訳ではない。もっと相手への関心を言葉で表す訓練をさせる必要があり、相手のいやがることはしない節度は持たせたい。

高校教師の友人Sさんから聞いた話。職員旅行に行った翌朝、従業員の女の人から、「あなた方と一緒にきた男の人たちの何人かが、酔った勢いでお風呂をのぞいた」と告げられた。

私が通勤途中でみかける中学生の列、誰一人として異性と楽しく語らって通学していない。

卒業記念、入学記念の写真、左右にびったりと分かれて写っている男女、一体どうなっているのだろうか。

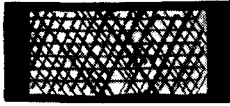
こうした男女別々の習慣はまさに利潤を追求する側の思うツボ。両者は違うのだから賃金も別といわれても誰も反論出来ない。

新学期、新しいクラスを前に教師は何を語る？

私は自立する生き方と人とのコミュニケーションの大切さを訴えたい。そして常に教室を論争の場にしよう。それには、従来の男女の役割を超えたところでの協力関係をどう築くのか思案中である。

男女平等の観点に立ったクラス作り、やってみませんか。スカートめくりをやる側やられる側思い切ってぶつかり合わせたりして。職員会議も「女風呂を何故のぞいたのか」という実態を取り上げた方が人間らしい。

「女性であること」を考える



盛川 華代

はじめに、私が置かれている位置についてお話しいたします。

私は'78年に某養護学校を卒業し、幾つかの過程（訓練施設、全くの在宅生活）を経て、現在の地域授産施設に通うことになり、はや丸四年になります。体の状態と言え、脳性麻痺による四肢障害とあって、ほとんどの事に介助を要するといった状態です。この原稿の依頼を受け、私と「女性であること」との接点はどこにあるのだろうか、考えを進めてみることにしました。

客観的に見る女性像、女性であることの決定的な裏付けとして、生命を宿すことのできる身体的機能、子宮を持つということがあり、大人になるという過程で、その証とも言える生理が始まり、老いて子を生めなくなるまで周期的に続くというのがその原理です。次に、女性の役割ということが出てきますが、やはり私は家事（炊事、洗濯、掃除、子育てなど）が女性本来の役割だと思うのです。女性として男性を愛し、又、男性から愛されることができて、一緒に生き、本来の役割に少し工夫をこらしているたいというのが今の私の願望のような気がします。私にも女性の機能がちゃんとあります。子宮を持っているし、生理もあり、子供を生む可能性を体秘めています。女性である自分の体を自覚することによって男性を男性として見る事ができるとい

ことは大きな事実です。これは、病気などで子宮を取らざるをえない女性は女性ではないということではありません。ただ、身辺処理もできない障害者が、生理の処理を人に委ねなければならないという事で、収容施設などでは入所者と介護職員との間にドロドロした澱みがあって、ぼんやりしていると子宮摘出まで簡単に進んでしまうということをよく耳にするの頃です。生きる上で自分で自分のことができないということが最大の弱身なのではないでしょうか。もし私が、他人に全介助をしてもらわなければならない立場にあったならば、使わぬことの方が大きいと思われる子宮を守り通すことができるかと考えた時、絶対にできるとは今でも言い切れないというのが、気持ちの裏側にいつも存在しています。私は若いという事で、どうにかしてあたり前の経路（男性、セックス、結婚、子供、家庭）を歩みたいと願っています。役割を果たすことはもちろん、身辺処理が満足にできない私にとって、これは願ってはいけないことなのでしょうか。何もできない者は、その上に性別までもなくして、それによって異性を思い切り愛することを阻まれ、女性としての大役を終えた老女が余生を送るのかごく過ごしていればよいのでしょうか。私はいやです。せめて若い内は、思い切り男性を愛せる時が来るのを期待して生きたいのです。

女性であることが子宮があるということのみにあるとしたら、どんないやな目に会おうとも、守って行かなくてはいいけません。女性の役割を果たせない自分を卑下するのではなく、それに代わる女性の私にしかできない何かを見つけていけばいいのです。これから私はもっともつと障害を持つ女性として、自分を鍛えなければと感じています。

中村智子氏の著書『『風流夢譚』事件以後』を読むまで、迂闊にも私はこの事件のことを知りませんでした。「嶋中事件」といった方が分かりやすいでしょうか。雑誌『中央公論』が深沢七郎の小説『風流夢譚』を載せた途端、「天皇家を侮辱する小説だ」と右翼から抗議や脅しが相次ぎ、ついに中央公論社の嶋中社長宅が一少年によって襲われ、お手伝いさんが刺殺され、夫人も重傷を負ったという事件です。一九六一年というから、もう二十三年も前のことです。「編集者の自分史」と副題にある通り、中央公論社の一編集者であった中村氏が事件とそれに続く「思想の科学」事件の一部始終を証言しています。

あまりの怒りと憤りで、普段ぼつぼつしか本を読まない私も、一気に全部読んでしまいました。まさに「無理が通れば道理がひっこむ」の世界の話です。言論・表現の自由の原則からいえば、『風流夢譚』に文句があれば同じく言論で戦うべきで、人の命を奪うテロ行為などとてもない話です。ところが、中央公論社は「不適当な作品を掲載し、世間をお騒がせした上に殺傷事件までひきおこしたことをお詫び」しているのですね。殺傷された側がどうして謝るのだ、えっ？



ほん

『風流夢譚』
事件以後』
その2
小田亜佐子

と思っていたところ、当時の中公編集部次長京谷秀夫氏の著書『一九六一年冬』が出たので、これもすぐ買って読みました。こちらの方は、浅沼社党委員長暗殺、六〇年安保闘争などを背景として、この事件が、中公の編集方針の「偏向」に対する攻撃にすり変わっていったことが書かれています。またしても、偏向、です。何より、自分たちの価値観・正義観を振りかざし、力で相手の口を封じて傲然としている人びとが、昔も今も絶えないことは本当に頭にきます。一度犠牲者が出ると、もうその事はタブーとなって容易に口に出せなくなり、「殺れば勝ち」となる理不尽さ！おかげでマスコミはこういうクレームに萎縮しちゃって、徹底的に自主規制するようで

すな。最近の例では、少女雑誌のセックス記事に対して、ナカソネ君がクレームつけたところ、版元側はさっさとひっこめたとか。「我々の編集方針に干渉しないでほしい」とつぶねる位したらどうなのでしょう。

中村氏、京谷氏の『編集者として言論の自由を守りたいという真摯な思いには大いに心を打たれました。前者は労組員として、会社を鋭く批判する立場から書いた怒りの書であるのに対し、後者はテロ事件の責任の一端は自分にもあるとする痛恨の書とれました。実際、京谷氏はこの本の原稿を書いたあとも逡巡し、六年たった後ようやく出版にふみきたとあとがきにありました。人間の命が失われたことと、右翼の攻撃に言論機関として立ち向かえなかったことに対する深い悲しみと苦悩がにじみ出ています。当事者自身が、戦後史上の重大な一事件について記録を残すという中村氏、京谷氏の勇氣は大変なものだとつくづく感じました。『言論の自由』を守る第一歩は自分が考えていることを率直に言う自由を行使することだと思ふ』という中村氏の言葉が忘れられません。／中村智子『『風流夢譚』事件以後』田畑書店、一二〇〇円・京谷秀夫『一九六一年冬』晩聲社、一八〇〇円。

「エレンディラ」のイレネ・パパスは凄い迫力と存在感で、彼女を見るだけでも、千五百円の入場料の元はとれるのではないかしら。

以前、岩波ホールで「イフゲニア」が上映されていたとき、見たい見たいと思いながらついに見ずじまいだ。見ればよかった。後悔先にたたずである。「イフゲニア」には、イレネ・パパスがでていたのだった。

彼女は、十四歳の孫娘（エレンディラ）に売春させて砂漠を旅して回る老女を演じている。少女を演じているのはクラウディア・オハナという黒髪の少女。

彼女は祖母と暮らしていた大きな屋敷を、不注意から全焼させてしまう。

おばあさんは「これ全部償うには、お前の人生すべてがかつてもムリだよ」と身一つで孫を売春させながら一緒に旅して回る。孫娘は人気があり、たちまち金はたまつてゆく。

二人の行くところ旅芸人が集まり、祭りを運んで砂漠を旅する。そのうち、少女に恋する少年があらわれ、少女を助けるためいろいろと画策する。「おばあさんを殺せる？」と少女にたのまれる少年。

こうやってあらすじを書くと、悲惨な話だけれども、少女自身は悲しいとか、みじめだ

とか、あわれだとか、つらいとか憎いとかもろもろ一切感じないで情況を受け入れているにすぎないので、映画はエレンディラに群がる男たちの滑稽さの方が目立つのだ。

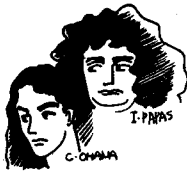
またそうであるから、イレネ・パパス演ずるおばあさんも残酷だとか、憎たらしいとか感じない。ただその迫力だけが際だつ。杖を片手に焼けあとからただ一つもってきた椅子に常にふんぞり返っている。

エレンディラが修道司によって砂漠の修道院につれていかれても、修道院の壁を睨みつけて砂の上に置いた椅子に座り続ける。

目をあけたまま眠る。眠りながら叫ぶ。寝言で過去に殺した男のことを語る。歌う。

少年に贈られた毒入りバースデーケーキを

シネマ



エレンディラ

遠藤 由紀 (カットも)

手づかみでむさぼり食う。多量の毒が入っているにもかかわらず死なない。死なないばかりか「久しぶりによくねた」などと言ってケロッとおきる。その結果髪の毛がバサバサと抜けおちる。

弾いているピアノに爆薬をしかけられて小屋ごと爆破しても、何ごともなかったように椅子にかけている。

祖母を殺そうと孤軍奮闘している少年は、傍観している少女に「人一人満足に殺せないのネ」と迫られ、直接的な手段をとり、祖母をナイフでメッタ刺しにする。

飛びちる血はなんと緑色。緑にそまる少年。最後までイレネ・パパスは強かった。

少女はどうするか。

金の延棒をぬいつけたチョッキをつかむと少年には見むきもせず砂漠を走りぬけてゆくのだ。

かけぬけてゆく少女の足跡が赤くそまつてゆくのはなぜだろう。赤い色は妙に少女にとって生々しく、それまでの神話的世界が徐々にくずれてゆくように現実的なのである。少女は王子様を利用して一人で強く生きつづけるようである。

〈家庭科男女共修問題、国会審議をめぐって〉

半田 たつ子



桜はないのち一ぱい咲くからに
生命をかけてわが眺めたり

岡本かの子

厳しく長い冬の後に訪れた春。まさに百花繚乱。目を奪うばかり。長い冬の時代をかこつてきた家庭科は、一九八四年、一気に花を咲かすことができるだろうか。家庭科の男女共修運動は、いよいよ正念場である。

差別撤廃条約批准を来夏に控え、文部省がやっと「家庭科女子必修は教育的配慮であつて差別ではない」との前言を翻し、「批准の妨げになることはできない」と言い出したことは、本誌でも紹介してきた。ここに及んでも「女子必修、男子選択という線を堅持して」と働きかけたり、「文部省の意図はいったいどこにあるのだろう」と臆測し、思案するばかりでは、家庭科が教科としての市民権を得、積極的に男女の役割分担の固定化をつき崩し、生活をたいせつにする力を育てる教科として生まれ変わるための千載一遇の好機を逸してしまふ。職場で「男女とも必修教科として……」の要望書に署名を頼むと、「家庭科教師が職を失わないための運動か」とヤユされた、という声も聞かぬが、怯んではいけないのだ。流言飛語にまどわされることな

く、あなたの考えを確立し、行動してほしい、と願う。

国民が選挙した議員によって構成される国権の最高機関―国会―で、この問題がどう語られているか、議事録と、私が傍聴した事実から報告したい。

一月二十五日、参議院決算委員会で、久保田真苗氏の質問に、遠藤哲也外務大臣官房審議官は「一昨年秋、八カ国を調査した。各国政府の教育課程への関与の仕方は一律ではないが、カリキュラムの指針になるものは、すべての調査対象国が男女平等に取り扱っている。家庭科、体育についても、男女同一の機会を確保している」と答えた。

久保田氏が、文部省はどういう検討や対応を考えているか、と尋ねたところ、高石邦男初等中等教育局長は「今日まで国内的にはいまのような家庭科の取り扱いが男女平等に反するとか、機会均等に反するという論議を一度も受けたことはなかったわけです。しかし、今回、条約批准という問題に直面して、いま議論の行われているような問題が提起されたわけです。そういう状況でございますので、教育内容を改定するに当たりましては、少なくとも十年がかりの期間をかけていまままで改定をしてきたわけです。先回改定いたしましたのが五十二年度、そして高等学校で完成するのが五十九年度と、それくらいの長い期間をかけて教育内容の移行を図ってきている、慎重にやってきているという、いわば教育の持つ特殊性というのが今日あるわけでございます。したがって、条約の批准に妨げにならないようにという一方の要請がありますので、われわれとしては中教審の答申を踏まえまして方向づけが出されるということで、その方向で作業が着手されるということが国内でとり得る最大

の努力ではないかというふうに思っているわけでございます。そういうようなわが国の特殊な事情を御了解いただければ、そのこと自体が条約に対する抵触であると言って国際的に非難を受けることはなからう、こう言う感じで大臣は先ほど基本的な態度を説明申し上げたわけでございます」(議事録より)と述べている。

私たちは、十年前から家庭科男女共修運動を続けてきた。これはテレビ・新聞・雑誌でも大きく取り上げられたのみならず、永井道雄文相、奥田真文審議官を初め、教育課程審議会委員、担当の文部官僚とも会ってきた。国会でも故市川房枝氏が再三質問されたというのに、なんとという認識不足! さらにこの答弁には、中教審にゲタを預けようとする文部省の姿勢がミエミエである。

次いで三月二十四日、参議院予算委員会で粕谷照美氏が質問。森喜朗文部大臣は「日本の高等学校におきます家庭科というのは、これは長い伝統の中から出てきたものでございます。これは粕谷さんの方が御専門ですから、よくおわかりのとおりでございます。しかしながら、そのことが差別撤廃条約を批准するために妨げになるという、こういう御指摘があるわけでございますので、この制度を妨げにならないようにどのように改善をしたらいいのか、大変大事な問題でございます。しかしながら、一方では家庭科の先生方からは、この家庭科というのは子供たちの教育の基本につながることであって、これはやはり揺るぎなきものであるから、ぜひきちっと残してほしいという御陳情や、そういう運動もあることも、これも先生御承知だと思います。非常に難しい問題でございまして、したがいまして、この必修科目をどうするかということについては、教科全体の問題にもなるわけでございますので、それぞれの関係方面と

も十分調整をし、意見を聞きながら、条約批准の妨げにならない方向をぜひ見出したい、こういうふうに今考えているところでございます」(議事録より)と答えている。

粕谷氏は続けて「一月二十五日に、第十四期中教審で論議をしてもらう、と答弁しているが、中教審が三年間凍結になった今、来年度の世界会議までに批准するには、具体的にどうするつもりか」と質問。高石氏は「……少なくとも今年中にある方向を出さなければならぬと思います。そうしますと、そのためにどういう形でその結論を出すかというための関係者から成る検討機関を設けまして、そして論議を重ねまして、方向の結論を出してもらうということになろうと思うんです。その結果が具体的に改正されるのは、次の教育課程全体が改定される際に具体的内容として出てくるというようなスケジュールで考えるわけでございます」(議事録より)と述べた。

これが三月二十五日から二十八日にかけての各新聞のニュースソースである。

・家庭科の女子必修見直し、近く検討機関設置、文部省(3・25毎日)
・高校女子の『家庭科』必修廃止の方針(3・25東京)

……
・高校家庭科、女子だけでよいのか、文部省が見直し検討(3・28読売)

・高校家庭科、女子だけ必修は差別か、“役割”決めつけないで、『教育の平等』問題に(3・28サンケイ)など

文部省の意図は、差別撤廃条約批准の妨げにならない方向を、検討機関で論議、教育課程が変わるのは次期改定、というわけだ。

「そうしますと、来年の夏までには間に合わない、こういう心配を持っていますけれども、どうですか」と重ねる粕谷氏に、高石氏は「先生も御存じのように、教育課程を改定する際には、具体的な作業を始めて現場で実行するのは十年かかるわけなんです。したがって、この論議が起きた段階で到底六十年代までに間に合わないということはわかり切っていたことだと思います。しかし、そうはいっても条約との関係が残るわけでございますので、少なくとも批准するまでは一定の方針を出すということを決めれば、それによっての方向づけが行われるということになりまして、具体的仕事はその上に立って進めていくという手順になるかと思えます」(議事録より)と答えている。

つまり、文部省には、男女平等教育をすすめるようとか、性別役割分担をつき崩すとかいう考えは一切なく、条約批准という外圧のために対応するだけなのである。

四月十一日には、衆議院文教委員会で江田五月氏が質問。私は、「共修の会」の仲間とともに、再三お会いし、会議を傍聴することができた。氏は実地的に問題を把握されており、選挙区の岡山で、家庭科の先生にも会い、学習指導要領はもちろん、中学・高校の教科書も入手して勉強されていた。

この日、緒戦の成果は、江田氏が外務省の遠藤氏から「家庭科の学習について男女間の取り扱いを異にしているのが批准に当たっている問題。高等学校だけでなく、中学もあわせてという見解だ」の答弁をひき出したことだ。中学の皆さん、がんばろう！

有識者による検討会議はどういう構成か、との質問に、高石氏は「家庭科関係者、婦人問題の専門家、一般の学者」と答え「一つ提

案ですが、女性を半分入れたらどうですか」との江田氏の要望には、ザワザワ、ニヤニヤ……の波が広がる。一緒に傍聴した娘は、これが一番腹立たしかったと言う。

江田氏が堂々と展開された家庭科論の、要点だけを紹介しよう。

- ・核家族の時代、高齢化社会を迎えるいま、身辺自立の学問としての家庭科を男女ともきちんと学ばなければならない時代が来ている
- ・性による役割の固定化をしてはいけないというのが差別撤廃条約の基本。「男性の女性化」との大臣の答弁は問題だ

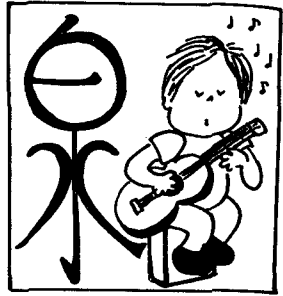
- ・人間としての自立、家庭と社会の役割、家庭の構成員としての役割、セックスを人間として位置づけて扱う、エコロジーの基本的考え方、経済活動の中で家庭が果たす役割、これらを基本に踏まえた生活教育として家庭科をとらえたい

- ・父性不在がひき起こす状況からみても、家庭経営に参加する資格を男に与えよ

森文相は、男子の家庭一般履修者が五十五年度〇・三九%から、五十八年度〇・七八%にふえたといひ「いささか男性の女性化という傾向」との失言をし、江田氏にたしなめられたが、「家庭科を多岐多様にわたる学問をやっているという意味で、とても大事な学問。示唆に富むすばらしい御意見」「男女がお互いに理解し、尊敬し合っていくということが家庭科教育の原点」とはっきり述べた。

家庭科教師の力量がいよいよ問われている。女子必修城を明け渡し、生徒・親・市民……広く世界の女たちとも手をつないで、家庭科を根底から考え直してみよう。新しい地平を切り開くこんなすてきな時代によろぞ生まれた私たち。いのち一ぱい咲こうではないか。

(議事録の傍点は筆者)



汲めど尽き
せぬ「泉」の
ような情報
の頁にした
いのです。
あなたの情
報、お寄せ
下さい。

◆映画―「海盗リ―下北半島・浜間根」

- ・日・所 5月23日(水)日仏会館ホール、同24日(木)東京都児童会館ホール、同25日(金)四谷公会堂、同26日(土)中野文化センターホール
- ・内容 下北半島で昨年5月からのべ百日間の現地ロケを敢行し、ついに完成。東京を皮切りに全国縦断ロードショウ。原子力船「むつ」の母港建設で揺れる関根浜の、漁民たちの物語を背景として、下北半島全域に展開する国策による「海盗リ」のからくりを、そこで揺れ、そこで生きる人々の姿と共に克明に記録した長編記録映画
- ・前売千二百円、当日千五百円、中・高校生六百円(当日のみ)
- ・連絡先 青林舎☎03-504-1706
- ◆映画―81年タイ映画作品「周辺の人びと」
- ・日時・所 5月25日(金)pm5時30分、品川勤

労福祉会館3F、同26日(土)pm4時30分、千秋ヶ谷区民会館ホール

- ・内容 タイの農村とバンコクで草の根を生きる人びとから届いたメッセージ
- 「鉛の時代」上映会からの第二弾
- ・前売八百円 当日千円
- ・連絡先 につぼんハテナ!?!の会☎03-801-6740(昼)、(39)7047(夜)

◆連続シンポジウム―「ドイツ・青ざめた母」

- を見て女の生き方を考える「女の土曜日」
- ・日時・内容 6月9日pm2時〜4時「母性について」津島佑子、松本侑壬子、同16日「女と戦争」井手文子、小藤田千栄子、同23日「男と女の関係」円より子、吉田真由美、同30日「女の心と身体」河野貴代美、7月7日「主婦と自立」田中喜美子、同14日「女と表現」せんぼんよしこ(予定)、高野悦子(映画は本誌五月号87ページ参照)
- ・所 岩波シネサロン(岩波ビル9F)
- ・会費 四百円(資料付)
- ・主催 女たちの映画祭実行委員会内「ドイツ・青ざめた母」を見たい会☎03-370-6007
- ◆集会―「家庭科の男女共修をすすめる会」
- 共修へもう一息ノ6・16集会
- ・日時 6月16日(土)pm1時30分

・内容 「共修問題、いま国会では」「いまだうする!?!」・会費 五百円

- ・所 目黒・みやこ荘(連絡先・ウイ書房)
- ◆集会―「三多摩学校給食問題連絡会、総会」
- ・日・所 5月26日(土)1時、府中市市民会館
- ・内容 講演「奇形ザルを訴える」中橋実氏、総会行事
- ・連絡先 三多摩学校給食問題連絡会、志方気付☎025-76-8940

・会紹介 東京都立定時制高校は、この3月に統廃合が行われて35校。定時制高校生のために学校給食が実施されたのは、昭和39年。都高教の組織が確立していない昭和33年頃から、定時制の給食現場の人たちが、苦労を重ねて給食の制度化をかつとつたもの。それは、勤労生徒の健康と生命を守るためだった。

ところが昨年12月23日に、鈴木都知事の私的諮問機関「活力ある都政をすすめる懇談会(活力懇)」の中間報告で、「給食調理なども民間委託すべき……」と発表。これは、小・中の給食にも及ぶ恐れがあると「会」は、3月29日、「民間委託を阻止しよう」集会を国立市で開催し、「より豊かな学校給食を目指す要求」を確認。(樹下尚子)

〈新刊紹介〉

青木悦著『人間』をさがす旅

―横浜の「浮浪者」と少年たち―

民衆社刊 価九五〇円

横浜の「浮浪者」襲撃事件。婦人民主新聞記者として、「殺された側」からこの事件を取材するうちに、青木さんは寿町といういわゆるドヤ街に住む人たちと知りあになる。

知識ではなく、人間への信頼によって判断するその人たちの前で、ショックを受け、人間のやさしさを知らされる。受験戦争、いじめ、非行など、ほんとに「イヤな時代」を生きている中学生に「ひとりひとりがこれから世の中を考えることが、この事件で亡くなった方たちへのひとつのたむけになる」とのメッセージを贈る。「三七歳の私の歴史、すべてをこめていっしょけんめいに書きました」と。

私自身は、あのショックキングな事件の章よりも、第7章生きることとは学ぶことに、ひきつけられた。寿識^{しき}字学校の授業―大沢先生の指導で詩や文章を読み、最後に各自が自分の思いを書く―のくだりに心洗われた。

野口英世の母のあの有名な手紙に対して、

ちよつと顔を赤くして時々つまりながら長さんが話した言葉。「お母さんがこの手紙を書いたわけは、……えらくなった息子に帰ってきてもらいたい、というのではないと思う。息子が、まともな人間になっているかどうかを、顔を見て確かめたくて、書いたのだと思うんだ。」

青木さんは、胸がキューツとしめつけられる感じを味わった。母というものに対する、まっすぐの信頼をその言葉に感じた。ああ、人間に対するまっすぐの信頼―私も恥じる。この本の書名はこうして生まれたのだ。

中学生はむろん、「人間」でありたいと、人間をたずねる人に読んでほしい。

黒岩秩子著『へびも毛虫もお友だち

―おもしろ冒険保育―

教育史料出版会刊 価一二〇〇円

雪国に春が訪れる。すべての生物が自己の存在を誇示し、いのちを開花させる。春の野山にくり出して、ふきのとう、つくしんぼ、いとみみず、かえるのたまご、はては青大将まで発見し、友達になって春を満喫する子どもたちと保母。

恵まれた大自然の中、のびのびと冒険保育

をする黒岩さん。もつと自由に、もつと大胆に。でも、自分はできれば子どもたちの後方に退いて、姿を隠したい。子どもが頼りたくなつた時は、しつかりと抱きしめてあげたい。そのみを使命にしたい、という黒岩さん。

家庭では七人の子の母、医者^{いしや}の妻。職場では大勢の子どもたちに囲まれて――その子育て讃歌は、前作『おお子育て』に高らかだ。どつと寄せられた反響の中に、ご自身の内部をえぐるものがあり、それが二作目の出版を生んだことを誠実に語るあとがき。

降矢洋子さんの絵が、黒岩さんの文の中ではねまわる子どもたちを見事に視覚化した。たのしく、勇気づけられる本である。

平井雷太著『子育て中止宣言』

本阿弥書店刊 価一二〇〇円

教育に救いがあるとしたら／それは／どんな親から生まれても／どんな環境で育っても／子ども自身の力で／立派な大人に育っていくという事実だ

平井さんは、この詩に「確信」というタイトルをつけた。子どもを見、人間を見、真実をひき出し、鋭い感性を詞にして二百余り。うなずきながら一つ一つを味わった。(平田)

読者の会だより

〈We愛知の会〉

◆いよいよ教科書調べのスタート！ 三月の例会では小学校「家庭」の東京書籍と開隆堂の教科書を、性別役割分担と家庭と社会のかわりの二点から比較検討しました。新しく参加した方も加わって、各自の意見をまとめたコピーをもとに意見を出しあいましたが、「教科書を読んで、五・六年の子が理解できるのか」という疑問が出されました。Tさんは、高校生に自分の生き方を書かせた時「仕事を続けるために、長男の所に嫁にいきたい」と書く生徒がいたが、家庭の中を守つていく誰かが必要という考え方が、小学生のうちから植えつけられるのかもしれない、と感想を述べられました。私は、核家族化が進み、共働きが増えている現在の社会の中で、父母が働くことの意義（収入を得るだけでなく）を押さえ、さらに夫婦は同等の権利を有するという憲法の精神が生かされた教科書であったら、と思いました。四月は、中学校の技術・家庭の教科書調べと、「女子必修見直し」に

ついでに具体的な運動のすずめ方を話し合います。

（E・T）
〈Weさがみの会〉

◆さがみの会も三年目を迎えました。これまでお世話役として活動して下さった山崎さんが、福井に移られることになり、私が受けつぐことになりました。どうぞよろしく。

第一回の呼びかけは十五名、それが九回の集まりを重ねて、今や七〇余名にふくれ上がっていますので、三年目は「さがみの会だより」を発行します。会に参加できなかった人も様子がわかるように、と。人物紹介、おすめ本、催し、TV番組なども、と考えています。年会費として千円集めます。ほとんど通信費として使うことになります。会に参加の際にお支払い下されば結構です。固苦しくならない範囲でゆるやかなテーマを毎回決め、話し合いのきっかけにしたいと思います。

五月のテーマは「教育基本法と子どもの現状を見比べて……」です。集まりは、原則として隔月の第一土曜日、場所は相原高校の家庭科研究室です。

（熊谷裕子）
〈We城北の会〉

◆三月十日には、新入り佐川さんを迎えて、今の教育のむずかしさに話の花が咲きました。

情熱で立ち向かえば、心が通じるのでは……という話も出ました。私は住みなれた北区を引越し、江東区に移るのですが、本音を話せる会―城北の会にひき続き参加したいと思っています。

（原田玲子）
〈Weの会カレンダー〉

4・29 埼玉 坂上真理宅

5・3 兵庫 神戸市勤労会館

5・12 さがみ 相原高校

城北 北区十条出張所

5・19 愛知 名古屋市勤労婦人センター

6・2 夏季フォーラム実行委員会

新宿東口 滝沢（特別室）三時

楽しく有意義なものにするために、

ご意見をウイ書房へお寄せ下さい

6・3 武蔵野 御殿山C・C 一時半

〈編集部より〉

時々、私たちの知らないところで、読者会が開かれているという風の便りを聞くことがあります。どうぞ、ご一報下さい。編集部からも、都合のつく限り、参加させていただきたいと思います。そこで読者の方たちのなまの声を聞き、Weの編集に生かすことが、私たちの使命だと思っています。また、読者会レポートも気軽ににお寄せ下さい。



◆ある出版社から家庭科の本を共著で出すことになりましたが、文部省が共修に踏み切らなくてはならない状況が出てきたことから、

(長野・湯沢静江)

急拠共修の授業実践で統一することになりました。共修にせざるを得ない状況が、こんなに早くくるとは夢にも思いませんでした。私たちは少し早めに準備してきたおかげで、そうあわてることもなく受けとめていますけれど、今まで女子のみ必修にこだわっていた方々は、どう対処なさるのだろうか、気になるところです。

それにしても必修にこぎつけるのは、また大変なことだと思いますが、どのような運動をすすめてゆかなくてはならないか、皆で考えたり、行動したりしないといけないと思っています。歴史の歯車は逆もどりにしていないし、またさせてはいけない時期なのだと思います。

◆四月号、うんうんとうなずきながら読ませていただきました。視点と霞通信は、いつも期待しつつページを開いております。心にぐさつとき刺さる時、「そうだ」と共感のこぶしをふり上げたい時、両方なのですが、自分の教師としての生き方を試されているようにとても読み甲斐があります。

宮沢賢治の作品を、私も授業で今年初めて扱うチャンスに恵まれたのは私自身の生きる指針にもなったのですが、「銀河鉄道の夜」と「竜のはなし」は子供たちを非常に感動させ、彼らの生き方を問うたようでした。

私自身、教師としてまた母親として、こんな生き方、こんな接し

わたからあなたに

方(子供たちに対して)でよいのかと、いつも煩悶していましたので、四年生の彼らと共に生きるべき方向が見えてきて、心がとても豊かになりました。賢治の作品は今、そしてこれから、自分は人としていかに生くべきかということを、我々に語りかけており、十歳の子供たちにも理解できる素晴らしい作品でした。武田さんの文章で、私自身のやってきたことが誤っていないかと確信でき、幸せです。また楽しみにしています。

(東京・鈴木まき子)

◆四月号の拙稿、読み返してみても、前任校で「PTA改革」を夢みて書記をやった二年間の体験を挿入できた、もっとテーマに近づけたかも知れないと反省しました。でも、今一緒にWeを読んでいるおかあさん方に、わたしの想いの一端をメッセージできたのは、ほんとによかったなと、感謝しております。

佐野さんの〈We 横浜北部の会〉

だより、最後の「植垣さん、ごちそうさまでした」には、「先生」ではなくとも新鮮なすがすがしさといいいいのか、ああ裸の人間になれて、っていうような感じがしてうれしく思いました。

(東京・竹見智恵子)

◆四月号トップの古川さんには、向井承子さんからご紹介いただいて「ひろば」という機関誌を送っていただいたところでしたので、心から納得して読ませていただきました。また大寄先生の「PTA改革にどうとりくむか」には、非常に多くの示唆を得ることができました。教育を取り巻く状況が変わろうとしている今年こそ、PTAも改革の好機だという思いがいたします。一人の親として、微力ながら力を尽くしてゆこうと、Weを読みながら心を新たにしております。

◆最近の中曽根内閣の教育に対する熱心さには、ひとりの市民としてたいへん危険なものを感じています。教育の主体である子どもや親、教師をぬきにして改革を語られたのはあまりません。なんとかおせっかいは止めてもらいたいと、PTAの仲間や教科書を守る市民の会の人たちといっしょに、今度反対の意思表示をすることにしました。改革は、私たち市民の手で進めなければならないと思います。同じ思いの方があれば共闘したいと思います。

Weの感性は、こんな時代だからこそたいせつです。よりどころにしている人がいっぱいいます。どこ

◆Weと初めて出会った時の気持ち、今でも忘れることができません。地方にくらして、女故におおいかぶさってくる不条理に悶々とし、したり顔の周囲の大人たちを見るにつけ、出口を失った思いに閉じ

込められて、ひとりギラギラしていた私に、We刊行のメッセージが飛び込んできたのです。あの言葉をやつくり味わおうと、何度も読み返し、性急に丸のみこみしようとする自分がおかしいほどでした。それから二年。Weは、私の孤独な思いを解き放ち、公正に誠実に私を導いてくれました。大きな出会いであったと感謝しています。引込み思案から、にぎやかな声援は送らなくとも、毎月熱い思いでWeの到着を待っている読者もいることを思い出して下さって、ご健闘下さるよう祈っております。(米子・森山寿美)

◆佐々木賢氏の『学校非行』を読みました。定時制高校の状況から書かれているものの、今の高校のかかえる普遍的な問題だと思いました。そして対応策のところでは、「現状では生徒・教師の双方が歩みよる方法しか残されていない」と言われている所は、今の自分の

心境とも似ていて何かホッとしました。生徒との「感情的交流」に努力しても、結局は生徒に「甘い先生」と印象づけ、規律や秩序を自ら守る生徒になつていかず、生徒を甘やかしているに過ぎないのではないかと、自分のやっていることに不安を抱きながら生徒とつき合ってきましたが、「感情的交流」が生徒の内的変化にかかわる意味があることを知り、励まされたと思います。(静岡・加藤千恵子)

(埼玉・柴田栄子)



愛知・トットちゃん学校・名古屋版

協同組合方式で建てる集合住宅コーポラティブハウスの一部に「窓ぎわのトットちゃん」のトモエ学園のような自由な学校を作ろうという計画がまとまり動き出した。場所は名古屋市天白区土原一丁目、鉄筋コンクリート三階建てを四棟、三十一・三十五戸を予定。計画したのは「名古屋に自由な学校を作る会」で、同会は現在の学校教育が詰め込み主義、規則で縛っていると不満を持ち、欧米の「自由な学校づくり」を研究してきた。三歳から十二歳までが対象。幼児部と小学部の低学年、高学年の三学級を設け、一学級は十五人。小学校に対し文部省の認可がおりるかが問題。コーポラティブハウスは土地購入から設計、建設まで発注、中間マージンがなく割安。一軒あたり約八十三平方メートルで約二十千万円。連絡先 ☎ 05 615・4・4181

(中日、3・30)

・「女性会議なごや」

名古屋市が婦人の連帯と地位の向上、拡大を図るため、七月二十一、二十二日に開催す

る「日本女性会議84なごや」の第一回実行委員会が開かれた。全国から一万人の参加者を集め「自立・平等・平和をもとめて」の機運を高めた。 (中日、4・6、山田和枝)

北海道・学テ完全実施は23——中一・二年生分

北教組が「教育の国家統制につながる」と反対している「到達度テスト」、中学一、二年生分は対象校三十四のうち完全実施校は二十一。中学三年生分は指定日の完全実施校は二十にとどまったが最終的にはすべての対象校で完全実施された。 (読売、2・24)

・現金キャッチボール

主任手当返還闘争を続けてきた北教組は二十五日、これまでの最高額五億二千万円を道教委につぎ返した。兼古哲郎書記長は「道教委は主任制度を根本から見なおすべき」と話している。 (毎日夕、2・25)

・親になる心構え

将来、家庭をもつ高校生に今から親になる心構えを植えつけようと、道教委は生徒指導資料の中で「高校生が親になるための教育」と題したパンフレットをつくり、道内の高校に配る。 (毎日、3・10、高橋芳恵)

宮城・産業より高福祉 変わる県民意識

県は定住条件や福祉、教育など県民生活に

身近な問題についての「県民意識調査」をまとめた。三年に一度の調査で、産業振興などハード面に関する期待が大きかった前回調査と比べ、医療、福祉、雇用などソフト面への関心が強く、高齢化社会を色濃く映している。 (河北、3・27)

・男女雇用平等法を考える市民集会

表題の集会は働く主婦ら約八十人が参加して三十日夕開かれた。女性差別の実態も発表され、全員で討論。(朝日、3・31、高橋静子)

新潟・男女差別県内は……

労働省新潟婦人少年室は「婦人の地位向上会議」を開き、県内の取り組みを総点検した。各団体が互いのワクを超える活動もなく、行政担当者も消極的で、立ち遅れている現状が浮き彫りにされた。 (新潟日報、3・12)

・カギっ子の面倒みます

「放課後のカギっ子を預かり、宿題や予習、復習の世話から、遊び、運動に至るまで面倒みます」という民間の学童保育施設が長岡市にオープンする。「長岡育英センター」小一から三年生まで。 (新潟日報、3・17)

・地域ぐるみの公開講座

「開かれた大学」を目指す新潟薬科大学は地域に根ざし、地域に貢献できる大学に脱皮す

べきだと公開講座を計画。学外委員六人も企画に加わり年二回、それぞれ五週にわたる集中講座。第一弾は五月、テーマは「健康」

(新潟日報、3・24、山口久子)

千葉・ダンブ公舎

君津市小糸、小櫃地区でダンブカーが人体に与える影響を調べて注目された東大の佐久間充助手は、木更津市馬来田と君津市六手の国道410号と県道君津―丸山線沿道住民を対象に調査した。こちらは前記地区と異なり騒音公害中心。「安眠できない」などノイロ―ゼ寸前の被害もあると。(毎日、3・13)

・体罰・350万円で和解

マラソンのホープ・増田明美選手の育ての親で前成田高校陸上部監督の滝田昭生氏ら二教諭から体罰を加えられ重傷を負ったとして元同高校生Aさん(21)と両親が損害賠償を求めている訴訟で、原告・被告が千葉地裁民事一部の和解勧告を受け入れ、三百五十万円で和解が成立した。(毎日、3・15)

東京・平等法の改善を!

表題を願って、弁護士の中島通子、大野明子さんが女性弁護士三百五十三人の署名を集め、声明文を発表した。①募集・採用から定年・退職まで雇用上のすべての性差別禁止

②母性保護以外の女子保護規定は、男性の労働条件の改善なしに廃止しない―の二点は最低限実現すべきとしている。(毎日、4・3)

・中野区長・青山良道さん―インタビュ―

マンチェスター市で、非核宣言都市の代表約二百名が集い第一回国際非核地帯会議が開かれる。これに参加なさるそうですね……

青山・中野区は一昨年八月非核都市を宣言、昨年八月核兵器廃絶の宣言に調印した。

日本では三千余の自治体のうち、非核宣言は七十程度で恥ずかしい。平和運動は住民の草根運動に帰するが、行政がどうとらえて生かしているか考えたい。(毎日、4・4)

・特技・専門知識のある方 登録を!!

「社会教育活動指導者登録紹介制度」に十八歳以上の区内在住・在勤・在学者で次の分野の専門的知識をおもちの方・グループ。▽政治▽経済▽社会▽歴史▽地理▽文学▽教育▽芸術文化▽医事▽健康▽自然科学▽職業技術▽生活技術▽社会奉仕活動▽その他、なおスポーツ関係は除く。(中野区報、4・5)

・「法政平和大学」続けます!

昨年開校された同大学が新年度のカリキュラムと募集要項を発表した。月一回、土曜日の午後。法政大構内。無料託児所あり。五月

二十六日「アメリカの平和運動に学ぶ」が第一講、十二月まで八回。通信教育課程もある。年間授業料七千円。通信教育三千円。郵便振替、東京5170560法政平和大学。

問い合わせ、東京都千代田区富士見二一七一、法政大尾形研究室内「法政平和大学世話人会」☎03・2664・9628

(朝日、4・18、三橋典子)

京都「非常事態宣言」へ 京教組大会

京教組は第四十一回定期大会で教育臨調反対、平和を守る闘いの進め方を討論。高校三原則における「非常事態宣言」をして結束を固める予定。(朝日、3・8)

・早急な改革待った!

高校教育制度の早急な改革待った―と京教組や革新団体などによる「3・25教育府民大集会」が開かれ約一万三千人が「高校三原則の教育を守れ」と訴えた。(朝日、3・26)

・新高校大綱

府教委と市教委は新しい高校教育制度の「大綱」を決めた。小学区制を基本に数校ずつのグループ化(通学圏)をはかり「一般」「学力伸長」「個性伸長」の三類型を設ける。

(朝日、3・28、塚崎美和子)

あんでな あんでな

★男女雇用平等法案の要綱諮問 労働省★

国連の婦人差別撤廃条約の批准を来年に控え、「男女雇用平等法」案を作成中の労働省は4月19日、法案要綱をまとめ、労働大臣の諮問機関、婦人少年問題審議会（藤田たき会長）へ諮問した。要綱は、先に同審議会が坂本芳相へ提出した報告（5月号46頁参照）に基づいて作成されたもので、「公益委員の意見を基調としつつ、労使の主張にも一定の配慮を示し、「微妙にバランスをとった」（赤松良子 婦人少年局長）中身”。法案の名称は「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保を促進するための関係法律案」（仮称、男女雇用機会均等法案）で、'72年施行の勤労婦人福祉法の全面改正と、労働基準法の一部改正の二本立て。

第1の柱、機会、待遇の均等について、「募集、採用」は「事業主は女子に対し男子と均等な機会を与えるように努力しなければならない」。採用後の「配置、昇進」についても努力義務とし、禁止規定を主張する公益委員の意見より後退している。これに対し労働省は①使用側が絶対に譲れないと主張②配置、昇進は企業の従業員評価にかかわり法になじまない」と説明。

「教育訓練、福利厚生」については、「資金の貸し付けその他の福利厚生の措置で、労働省令で定めるもの」などと範囲を限って禁止規定。女子の結婚、妊娠などを理由にした「定年、退職、解雇」をめぐる差別的取り扱いを、すべて禁止規定。

これらの措置に実効性をもたせるため、労働大臣は募集、採用、配置、昇進に関し、事業主に対する「指針を定めることができる」として、行政指導による差別解消の方向を提示、さらに、採用後の雇用管理をめぐる労使紛争解決のため、都道府県の婦人少年室に、労働大臣が任命する公益委員三人で構成する「雇用機会均等調停委員会」を設け、調停にあたらせる。

このほか、働く意欲の強い女子の就職を援助する目的で再雇用制度の実施を企業の努力義務とした。

第2の柱、労基法の一部改正では、女子保護規定のうち時間外労働は、製造業、土

木建設業、鉱業、運輸業、電気・ガス・水道業など工業的業種の場合、現行規定（1日2時間、1週6時間、1年150時間以内）を2週12時間、1年150時間以内に緩和。「非工業的業種」や管理職、専門職の時間外・休日労働の規制は廃止。

深夜業に関しては、現在認められている看護婦、電話交換手以外にも新しく次の職種を追加。①管理職、専門職（医師、建築士、記者など）②腐敗しやすい物の製造、加工など仕事の性質上深夜業が必要な業種（弁当製造業、新聞配達、市場関係者など）③本人からの申し出に基づくもの（タクシー運転手など）。

生理休暇は、労基法上の「休暇」の規定は廃止するが、生理日の就業が困難で、本人が請求した場合、使用者は就業させてはならないとし、実質上、存続させる。

労働省は、今国会中の成立と'86年4月からの実施を目指しているが、この日、労働側委員は「単独立法とすべきなのに、事前に十分な説明がなかった。諮問内容も経営側の主張を広く取り入れている」と強く反発、実質的な審議には入れなかった。答申までの難航は必至。

「男女平等の原則の 実際の 実現を法律その他の手段により確保すること」という婦人差別撤廃条約の趣旨からは程遠い要綱案に女性側からも強い反発がでている。

（朝日、毎日、4・20付）

★国会議員は男女平等をどう考える？★

「日本女性学研究会教育者会議」（評論家、富士谷あつ子さんら）は3月27日、国会議員の男女平等の意識調査をまとめた。アンケート対象は320議員（男297人、女23人）。

調査によると、全体の89%が「現在の男女の地位は不平等」。「男は仕事、女は家庭」の性別役割分担に「同感しない」は70%。特に女性議員は96%が反発。

女性が職業を持つことについて「子供ができて、ずっと職業を続ける方がよい」が最も多く54%（共産91%、社会81%、民社34%、公明16%、自民12%）。自、公、民で最も多い意見は「子供ができたなら職業をやめ、大きくなったら再び職業を持つ方がよい」で、それぞれ、29%、48%、57%。

しかし、「今、日本で女性が職業を持つのに必要な条件は整っていない」と考える92%。

女性の就労、労働条件に関する意識については、女子に就職試験の門戸を閉ざす企業は「改めるべきだ」が92%（自72%）。「育児休暇を広げるべきだ」88%（自66%）、性別による賃金格差を「なくすべきだ」85%（自55%）。日本の長時間労働が女性の就業を妨げているとの意見に対し「労働時間を一般に短縮すべきだ」88%（自35%）。

女子の深夜業について、「現状のままでよい」38%、「深夜業の可能な業種をもっと多くすべきだ」22%、「一般に制限を緩和すべきだ」19%。自民では女子の深夜業の緩和を望む意見は約7割。

男女雇用平等法制定では「早く実現すべきだ」86%（自53%）。（毎日、4・20付）

★エスカップ会議開催★

来年ナイロビで開かれる「国連婦人の10年」世界会議に向け、国連アジア・太平洋経済社会委員会（ESCAP）の地域政府間準備会議が3月26日から30日までの日程で、東京で開かれた。ESCAP加盟44か国から約200人が参加。

「国連婦人の10年」は来年最終年を迎えるが、国連は婦人の地位向上や男女平等の実現などを目指して運動してきた。今回の会議ではこの運動に対する各国の運動実績を検討し、その成果を評価するもの。

一方、民間の女性グループも26日から31日まで東京で「エスカップ地域の連帯を深める＝民間女性のつどい」（主催・あごら、アジアの女たちの会、国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会など7グループ）を開催した。（毎日、3・26～31付）

★「変わりつつある日本の家族」発表★

生命保険文化センターは4月16日、レポート「変わりつつある日本の家族」を発表した。同センターの委託で家族問題研究会（山根常男駒沢大教授）が昨年11月にまとめた「現代家族の諸問題」をベースに年初来、毎月報告してきた「総まとめ」編。

「国民生活白書」（'83年版）は、わが国の「家族をめぐる問題」の深刻度を欧米先進国と比較するならば、総じてまだ良い状況にある」としているが、同レポートは統計に出ぬゆがみを指摘し反論。

まず離婚について、日本の離婚率は先進諸国に比べ低いし、現在の離婚率（人口千人当たり1.5組＝'83年）は明治期のピーク、明治32年の1.53組に比べて低いことは認めながら①近年の離婚は女性からの請求が急増しており、明治期の「三下り半離婚」が多かったのとは性格が違い、実質的には離婚率は史上最高②結婚期間の長い夫婦の離婚が急増一から、「欧米より離婚率が低いから日本の夫婦関係が健全とはいえず、経済的要因、社会的タブー視のために離婚をがまんするものも不健全」。

また、スウェーデンは非嫡出子が全体の3割に対し、日本は1%未満だが、スウェーデンでは嫡出、非嫡出で相続権等社会的に差別がない。だが日本では①婚姻外で生まれた子供が親族の実子として登録される例がみられるなど、諸外国との単純な統計比較はできない②10代少女を含め人工妊娠中絶が年間59万件もある一など西欧諸国にはないゆがみがある、としている。

同レポートはこうした分析を基に、独身、同せい、子を産まない結婚、同性愛カップル、コンミュンなど家族以外の新しい生活様式にも法的、経済的不利益や差別を受けないような市民権を与えるよう提言している。（毎日、4・17付）

★登校拒否に手引書 文部省★

登校拒否の原因、背景の分析、早期発見の方法、対応の仕方などをまとめた文部省の中学・高校向け「手引書」が4月3日、刊行された。ともすれば、「家庭の問題」だとして学校や行政から突き放されがちだった登校拒否だが、同省は特に学校が一致協力して問題解決に取り組むよう求めている。

同省の学校基本調査によると、学校ぎりぎりの長欠（50日以上）生徒は'82年度中学生の場合、5年間で倍増して約2万人。また'82年に同省が全国都道府県教委を対象にした調査では、中、高校生に関する教育相談の4割以上は登校拒否問題だった。

登校拒否の原因の6割は「不安を中心とした情緒の混乱で登校しない神経症的な拒否型」。同手引書は学校へ配られるほか、1冊260円で市販される（大蔵省印刷局発行）。（毎日、4・4付）

★家庭科の女子必修見直し

—検討機関設置へ（本誌84頁参照）★



★Weバックナンバーのご案内★

〈vol.1〉創刊号いでたちぬ、いま
五月号父よ、母よ、教師よ(品切れ)

六月号共に生きる

七月号新しい家庭科とは

八・九月号反戦とは、平和とは

十月号人間の自立とは

十一月号家事労働を問う

十二月号家庭・家族

一月号新しい男と女のかかわり

二・三月号くらしをいとおしむ

〈vol.2〉四月号教師は、今こそ声を

五月号産む・産まぬ……

六月号はたらくことをめぐって

七月号コミュニケーション

八・九月号老いを考える

十月号今、教科書問題を問う

十一月号食べるということ

十二月号着るということ

増刊号学校はよみがえり得るか

一月号「一九八四年」

二・三月号住むということ

〈vol.3〉四月号PTAって何

五月号いまこそ、家庭科を問う

表紙のことは一加藤由美子

「地域」のネコ。何となくうまく世渡りして
るふうなネコの方が同じくらいいるイヌよ
り地域くさいと思いませんか。ニャーオ!!
て、しつかり地域に生きてるってふうで……
首にくさりもつけないで、ノラノラと歩くネ
コ。チョコチョコ走り回るネコ。人間に近い
ところで生活してるようで……。

ちなみに友達のイメージは、カバ、クマ、
ヒツジ、わからん、むつかしいなあ。私はネ
コの実物はフツウに好き、描くのは一番好き。

◆公開ゼミナールが終わった

たと思う間もなく、夏季フ

ォラムの準備。素晴らしい

所です。是非おいで下さ

い。今実行委員の方々によ

って必要事項が着々と決定

されています。本当に御苦

労さま、ありがとうございます!

◆何回かWeの集いが生まれ

る過程を見ていましたら性

格が変わってきたようで

す、私。なかなか決まらな

いPTA委員自ら引き受け

てしまいました。(中野)

♥新潟の町田さんから、ま

だ積雪三・五米ですとお電

話をいただいた次の日、北

大名誉教授が自宅裏の除雪

作業中、落雪で頭を強く打

ち死亡。享年六八歳。一人

残られた夫人のお心をお慰

びします。山形では慰安旅

行の一行が、車の通れぬ雪

道を一列に歩いていった所に

雪崩が発生し、二婦人が死

傷。東京は桜の花吹雪とい

うのに。遅い春の悲報に、

改めて人為を越える自然の

力を思います。

♥地域も同じ。何事もなけ

れば意識に上ることも少な

いけれど、地域の持つ教育

力を侮ることはできません

ん。隣は何をする人ぞ、の

くらしぶりを、ススんだこ

このように思っていないか

ったでしょうか?

♥次号は「少年・少女たち」

がテーマです。(半田)

新しい家庭科—

発行所/(有)ウイ書房

Vol. 3 No. 3 1984年5月20日発行

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

¥530(年間購読料・増刊号含¥6000)

☎03(326)1380 振替 東京6—59867

編集兼発行人/半田たつ子

印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

引き続きWeの仲間になって下さい
Weの仲間をふやして下さい

—Weの取り扱い店一覧

お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい (4月18日現在)

旭 砂島 銅函盛 花仙	川 松路館岡 巻台	富貴堂 京栄堂書店 いわた書店 矢野書店 カノウ書店 神田書店 東山堂 みみずく書房 誠山房 こどもの本の店 ブーの家 八重洲書房 ボラン 萩書房 高山書店 金港堂 ホビット館 加賀屋書店 八文字屋 岩瀬書店 西沢書店 松文堂 川島朝日堂 アルプス社 近江書店 至誠堂書店 ツルヤB.C 太陽堂 岩瀬書店 須原屋 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ 日野屋書店 比企文化社 山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 信太書店 千代田	書房<新宿>紀伊國屋書店、模索舎、ブックスマ や、伊野屋書店、ジョギ <渋谷>すべーす・えいが さい<葛飾>宏精堂、中 村書店<世田谷>やまべ 書店、江崎書店<練馬> かじか書店<北>愛京堂 <墨田>業平堂<江東> 文俊堂<品川>シグマ図 書<吉祥寺>ウニタ書店 <三鷹>第九書房、たべもの 村<調布>みづは書房 <府中>国府書店会<国 分寺>青野書店<国立> 東海書店<立川>石井書 店、オリオン書房<小平> 和中書店<八王子><く まざわ南口>清瀬マルオ カ書店、飯田書店、日南 書店<町田>久美堂<多 摩><くまざわ永山店 横 浜 文教堂 有隣堂 北野書店 早川書店 ブックス上溝 たらば書房 大船書房 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 マルサン書店 文正堂書店 ウニタ書店 ボランの広場 日比野泰文堂 谷口正文館書店 稲沢文光堂 白樺書房西店 白楊書店	江 豊 豊岡 尾瀬 岐新 小三 長富 高岡 松長 飯金 福	南 橋 田 崎 旭 戸 卓 湯 谷 条 岡 山 岡 谷 本 野 山 沢 井	竹中書店 青雲堂 文教書店 耕文堂 鈴彦書店 カマクラ文庫 活人堂 三浦書店 宝島 柴山書店 島谷書店 新潟書房 覚張書店 清明堂書店 清文堂 イソップ屋 笠原書店 新光堂書店 吉野屋書店 牧野書店 うつのみや セールズセンター ひまわり書店 じっぷじっぷ 吉川隆文堂 春江書店 品川書店 勝木書店 海光堂 海老山書店 尚古堂 旭屋書店本店 紀伊國屋書店 ユーゴー書店 増田書店 樋口書籍 米原十六堂 タミーB.C 藤川書店 学友の友 ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なににに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 オデッサ書房 中島書院 大久保京都書院	長 和 神 尼 姫 明 岡 米 出 広 竹 福 山 松 観 徳 土 佐 北	井田書店 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房 ヒカリ書店 日進堂 明文館 文進堂書店 宣文堂書房 姫路丸善 学友書房 弘栄堂 今井M.C本店 今井書店 武田書店 やまびこ書店 いづみ書店 アサヒ書店 草間書店 岡田書店 白藤書店 去来社 タカハシ書店 雄徳堂徳野書店 依光書店 北九州書店 白石書店 黒崎ひとりわB.C 丸山スコレ店 江頭書店 日新堂 金華堂 文光堂 好文堂 紅屋書店 高校生協 三章文庫 開書堂 今村書店 片桐書店 スズキ書店 球陽堂 畜産大学、東北大学、山形大 学、福島大学、新潟大学、群 馬大学、宇都宮大学、茨城大 学、埼玉大学、日本女子大学、 東京大学、東京家政大学、東 京学芸大学、法政大学、成蹊大 学、愛知教育大学、金沢大学、 大阪市立大学、立命館大学、 宮崎大学、高知大学、琉球大学
----------------------	-----------------	---	---	---	---	---	---	---

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入
ができます。お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由
とご指定のうえ、ご注文下さい。